

700人の記録

続 良心の歴史をつくりたい



報
知
争
議
社
團
會
議
編

—700人の記録—続・良心の歴史をつくりたい—

I

23人が解雇された

2

争議解決後にデッヂ上げ

2

許さなかった。サンケイ化。

9

ひとつの道をえらんだ

16

月島基地はふるさと

24

ロックを受けて村づくり

27

どこにでも仲間を見つけた

36

敵の正体と開けた展望

44

「月島はみんなの会社だ」

52

激論しながら争議收拾

70

会社に「月島」を

79

1 タスキ寝入りも抵抗のうち

79

2 こんな新聞になつた

93

3 ほんとうは「読売・報知争議」

101

4 反撃が始まつた

107

どこにも築かれる「月島」

116

1 広がる報知争議

123

2 見知らぬ人の真実を

116

3 困難でも明るい未来

129

暴力団がピケを襲事+

報知新聞



あみあけゲッで居いぬりければ
す暴力団



5月27日の駄菴争奪で、私たちは
会社の本性をみた

一生をかねたら
上の人間無視



「月島基地」で家族も集ってさらに団結

はじめに

、第二のサンケイ化。を拒否して四五年夏五ヶ月のロックアウトとたたかたった報知労働者のうち二三人が不当解雇されました。読売・報知資本の暴力ガードマン導入・先制ロック攻撃をはね返して職場に復帰した一ヶ月のことです。以来六ヶ月、報知労働者は不当解雇撤回と職場の合理化反対とを結びつけて、再びたたかいを広げています。このたたかいも、全国の労働者・市民に支えられて、必ず勝利することでしょう。なぜそう確信できるのか——ロックアウト時、一人ひとりその生き方を問われた報知労働者約七〇〇人のたたかいが、その疑問に答えるはずです。四五年、一〇万部読まれたパンフレット『良心の歴史をつくりたい』につづいて、七〇〇人の労働者が、弾圧にたいしてどういう生き方をしたのか、その記録を報告します。

報知争議共闘会議は、暴力ロックアウトにつづく不当解雇攻撃を、労働者と労働組合の基本的権利にたいする読売・報知資本の挑戦であると考えます。この挑戦に屈することは、国民の「知る権利」「発言する権利」を危機にさらすことにもつながります。私たちは報知労働者とスクラムを組んで勝利の日まで断固たたかいつづける決意です。

報知争議共闘会議

日本労働組合総評議会 東京地方労働組合評議会 千代田区労働組合協議会
マスコミ共闘会議 総評弁護団 日本新聞労働組合連合

I 23人が解雇された

1 争議解決後にデッヂ上げ



解決！仲間の拍手に送られて就労する第1陣

おふくろにクビだとは
いえなかつた

くつになるの」

「ところでおふくろ、い
ことしで、もう七〇にな
つたさ。町から表彰され
たよ」

そうか、やっぱりもう七
〇にもなっていたんだ。石
井信喜さんは、シワだらけ
の笑顔を見て、あとをつづ
けることができなかつた。
クビになつたよ、とはい
なかつたのだ、一人息子が

クビ、と聞いたらなんと思うだろう。「組合をやるものいが、ほどほどにしなよ」といつておふくろ。組合をやってクビ——このあたりでは「アカ」と呼ぶだろう。「アカ」の息子の行く末を察しながら、肩身の狭い思いをして残りの人生を生きる……。石井さんは黙つて茶ワン酒をあおつた。

石井さんの郷里・千葉県八街(やちまた)は、落花生と西瓜の産地として名高い農家の町である。千葉県から総武本線で銚子に向かって約四

〇分、東京からそう遠くはない。落花生のわが

家を離れて七年、東京で独り住まいの石井さんは、報知印刷社の輪転工として一人前の腕をもつていた。編集から工場を経て初めて新聞になる、その新聞を刷る仕事だ。深夜から早朝までの勤務が大半、ひとみのヒマな時間はなかなか作れない。落花生の里は、だから、彼にとって違ひふるさとでもあった。

五ヶ月近くもつづいたロックアウトが解けて報知争議は終わつた。こげつく夏の日射しもやがて去り、秋が深くなつたころ、石井さんは解雇された。組合の青年婦人部長として、争議責任を追及されたのだ。怒つた。負けるものかと唇をかみしめた。そして仲間の顔を見た。動搖はほとんどない。石井さんの胸におふくろの顔が浮かんだ。家族の理解が先決、だれもがそりついていた。そして二週間後の土曜日、ふるさとに帰ってきたのである。

「よく帰つてきたなあ」常日頃たまつていた繰り言を並べても、生返事しかしなくなつた二八歳の末っ子に、おふくろはそうくり返して、笑いかける。姉も義兄も喜んでいた。大の字に寝つころがれる畳がある。いつきもあるこの暖かさ——。だが、石井さんの気持ちは重かつた。

その夜、落花生畑を横切る秋風を聞きながら

ら、寝つかれなかつた。六つのとき病死したおやじ。以来おふくろは、姉たちの手を借りて一家を支えてきた。そしていまは、背も丸くなつてきた七〇歳……。だが、早くいわなければならぬ。明日は仲間の所に戻らねば……、夕方には青年婦人部の集会があるので。頭のなかではいつまでも、さまざまな思いが堂々めぐりしていだ。

翌日も、いつの間にか日が暮れていた。昼頃からの酒なのに酔いきれない。明日の朝は帰るのだから、と決心してみる。でもメンの前に話してしまっちや、おふくろはメンも喉を通らなくなるだろう。そして夕食も終わった。みんなはテレビを見ながら笑っていた。クイズの司会者の顔が揺れて見える。喉がかわいた。茶ワン酒をおおつた。味はわからなかつた。

「おふくろ、実はオレ、やられちゃつたんだ」

それから一気に説明した。前からときどき闘争ニュースなどを送っていたが、わかっていないと思っていた。しかし少しはわかってくれていたのだ。闘争のこと、解雇のこと、仲間のこと、将来のこと、あらいざらい話した。「ホラ、また、信ちゃんの演説が始まつたわ」姉たちは、やんちやな弟の饒舌を見て笑つた。急に酔いがまわってきた。

「お前の生き方は、親が決められるもんじやない。お前が正しいと思うんなら、仲間に迷惑

笑いが止まつた。テレビだけが、しゃべつて、笑つていた。何かいてくれ、石井さんは待つた。

「ほかの人はどうしたのかい」

やがておふくろが口を開いた。静かな口調だった。石井さんは顔を上げた。帰つてから初めて、母親の顔をじっと見つめた。

「うん……」

をかけずにやりな」寝床で、おふくろの言葉をかみしめながら、石井さんは枕に顔を埋めていた。明日は東京に帰れる。みんなのところに帰るんだ。久しぶりに流す涙は快かつた。

処分を予測していくも

クビを切られたのは、石井さんひとりではない。報知印刷労組で九人、報知新聞労組で八人（東京、大阪各四人）、報知印刷大阪労組で五人と、報知系五労組のうち三労組（他に東京、大阪の臨時労働者労組）の二十一人。休職三か月、二か月などの処分を入れれば、五労組で実に一一四人、組合員の二〇%もが処分された。報知新聞労組では組合員の四〇%にのぼる配転も強行された。解雇の発令は昭和四五年一〇月三一日、報知争議解決後四三日目のことだった。

新聞社内への暴力ガードマン導入と一四〇日

をこえる不当ロックアウトで、世間の注目を集めた報知争議は、東西の報知臨労組約一二〇人を残して（一月妥結）、九月一八日に妥結した。三日後の二一日には、五ヶ月ぶりに暴力ガードマンがいなくなつた報知新聞社内に、組合員の三分の一近くが入って、就労した。三分の一ずつが就労する分割就労だ。第一陣が社内に入ったとき、一般の人々は、これで報知争議も終わつた、と考えたようである。「よかつたね」の声に六〇〇人をこえる報知労働者は「応援してもらつてありがとうございます。これからも元気にやつていきます」と答えていた。

一方、労働争議の先輩たちは「これからが大変」と忠告した。妥結前から「会社は必ず処分していく。不当処分させないために、歯どめとして、争議責任不追及」を協定しておくべきだ」と主張していた。これにたいして報知系労組の指導部は「『責任不追及』の協定は取りた

「いけれども、残念ながらそこまで会社を圧倒していません。ただ処分は予測できるし覚悟もしています」といい切った。たとえ処分が出ても報知労働者はたたかえる、だからこそ解決をはかるのだ、というのである。第二次にわたって二年間近い報知争議をたたかってきた主人公たちの自信。先輩たちを安心させ得る断言だった。

二年近い弾圧のもとで多数派を守りぬいてきた組合の実績、あらゆるところへ広がってきたたかい、負けを知らない法廷闘争——処分をハネ返せない要素は、確かになかつた。会社が処分を強行すれば無謀としかいわれまい。にもかかわらずこれまで無謀を承知で弾圧を強行してきた読売新聞資本と報知経営者。処分はあり得るだろう。しかし処分が出てもたたかえると職場討議が確認していた。取れなかつた歯ドメを、守りぬいてきた諸権利と職場の団結に託し

た。そして解雇を含む大量処分は強行された。実際に処分が出されてみると、労働者の気持ちはまた別である。予測していても、覚悟はしている。ショックは決して小さくない。現実の生活問題だからだ。長かった争議のあとに「争議解決イコール平和」の感覚が、心の片隅にあつたことも、また否定できない事実であつた。

報知印刷大阪労組の杉本副書記長の奥さんは、二人目の子どもを身ごもつていた。その夜死刑宣告。を聞いた奥さんは、二年六か月になる長女の枕もとで、無言の涙を流しつづけた。ころえにこらえてきた杉本さんのなかでなにかが爆発した。「クソッ、やつたる。オレは負けへんで！」

憲法も労働法もないじゃないか。民主主義のかケラも、会社にはわかっていないんだ——一四〇余日の暴力ロックアウトに耐え抜いて間も

なく、報知労働者は、また、同じ言葉を叫ばなければならなかつた。

「争議責任の追及はしない。だが、個人の違法行為を、良識と条理に照して処分する」と言い続けていた経営者が示した処分理由は、すべて、正当な争議行為を「罪科」としていた。おもに「教宣活動」と「職場びん乱」——デッヂ上げである。どのケースも、身に覚えのない罪名。ばかりだつた。だから、たとえ経営者の立場に立つたとしても、常識では考えられない解雇理由がいっぱい。

報知印刷の渡辺さん。この二四歳の輪転工は「職場秩序のびん乱」などの理由で解雇された。社歴二年、組合歴なし。争議では組合の指示に従つた一組合員である。なぜ彼のクビが切られたのか。「ほかの人より背が高かつたから」と仲間たちはいう。1m85の長身。たとえば就労闘争で会社玄関前に集まつたとき、たとえば

組合からの脱落者に職場で抗議したとき、一番先に見えるのが彼だつた。だから、というのである。冗談じやない、と笑つてはいられない。だが、そんなことが報知には起こつてゐるのだ。

この渡辺さん、父親も同じ報知印刷で働いていた。読売新聞を定年で退職し、嘱託だつた。同じ社屋に働く父子は、ロックアウトを境に、家で顔を合わせるだけになつた。保守的な父は組合活動を理解しようとした。争議解決後、息子はクビを切られ、その年いっぱい一二月で父も解雇された。→人べらし政策。による契約切れ。である。父は初めて資本の冷酷さと、息子のいう組合の存在価値を知つた。渡辺父子はいま、家族ぐるみで立ち上がつてゐる。

広がる怒り、集まる激励

報知に大量処分——このニュースは、たちま

ち、全国に広がった。報知新聞社（菅尾亘夫社長）、報知印刷社（岡本武雄社長）・報知労務担当兼任）に抗議の声が殺到し、組合に激励が集まつた。

報知争議を知り、労組を支援していた著名人たちは、暴力ロックアウトに次ぐ、この処分に二度びっくりした。作家の中村武志さん、女優の森光子さんは「私たちも支援します」と、激励の一文を報知労働者に寄せた。

森光子さん「おとなのは話し合いで争議がおさまって良かったと安心していたのに、なんとひどいことを……。私は裏切りはきらいです。仕事をしたい一念でいいとも腹におさめて会社にもどううとした人たちに仕事も与えず、しかもクビ切りまでするなんて、まるでだましうちはありますか。クビになった人たちの家族のことなど、考えただけでもゾッとしてます。ロックアウト中の賃金だって、全額払っていないというではありますか。そのうえにこの仕打ち、とにかく人

の道にはすれません」

中村武志さん「報知争議については、これまで組合の教育活動や人からの話などで、だいたいのことは知っていた。会社のやり方が暴力団を使うなど、不当な部分がかなりあるな、と思つていた。ところが、教育活動を理由に処分を出したとは、まったく不当不法だと思う。第三者にとつて、労使双方が自分の立場、主張を訴えるPR活動がなければ、争議について判断のしようがないのではないか。組合員がPR活動を理由に処分されたのでは、組合活動はできなくなる。暴力団を入れるなど、どうも報知の経営者のやり方は、すべて前近代的においがする」

「民間では数少ない」と総評もびっくり。その日のうちに、全国の傘下単産、地評にたいして、会社側への抗議と、組合への支援を要請する、異例の「通達」を出した。

平和協定ー「まだ、食べてみて下さい。こんなあ
いしいものはありますせんからー」

2 許さなかつたリサンケイ化!!

恐ろしい平和協定の魔力



長かつたロックアウト解除が決まつた昭和四年九月、報知労働者は喜んだ。支援・共闘していた労働者・市民も負けずに喜んだ。報知の労働者が争議に勝つて職場に帰れる——努力してきました甲斐があった。みんなそう思つた。だから全国から祝電が集まり、祝賀パーティーも開かれた。そこに大量クビ切り。組合の勝利を喜んでいる人々の間から素朴な疑問が生まれた。確かに組合が勝つたはずなのにクビ切りとは? 一体どうなつて いるんだろう。

「勝つたからクビになつたんです」と報知新聞労組の佐藤征一郎書記長がいう。二二人の被解雇者の一人。三三歳、社歴九年半のベテラン

整理記者だ。「それはいずれ、だれの目にも明らかになつてくることでしょう。ただ、いまはつきり確信を持つていい切れることは、ぼくたちが。サンケイ。にならなかつたことと、これからもけつしてならないだらうということです」報知争議の基本争点だったサンケイ式「平和協定」を撤回させたではないか、その事実をまず見てくれ、というのだ。佐藤さんのいう意味をサンケイの例で見てみよう。

サンケイの元人事部長・岡本武雄氏が報知に乗り込んだのは四四年一月一日、この年の春闘は、真夏の八月五日までかかるやつと妥結。ひきつづいて暮れから始まつた、いわゆる報知争議の争点は、確かに「平和協定」だった。

平和協定とは何か——サンケイ新聞労使は三年一〇月「賃上げ要求、団体交渉、争議権」など労働者の基本的権利を放棄する平和協定を結んだ。これに反対して、処分されたサンケ

イ新聞裁判闘争原告団のまいだピラは、その魔力を雄弁に物語ってくれる。「……労働基本権を奪われた私達の労働条件はどんなにないでしょか……」と、裁判所に提出した証拠資料から挙げている賃金面での具体例はこうだ。

十年間にサンケイと三大新聞労働者の賃金（基準内組合員平均）の格差は大きくなる一方。朝日と比較すると一万七千円の開きだったものが三万四千円と倍にもなつていて。現在三十四、五歳の社会部記者の月収で比較すると、朝日十二万三千円、毎日十万二千円、読売十二万六千円に対して、サンケイ六万六千円というひどさである。四五年二月にサンケイから朝日に転入社した二十九歳の印刷工の月収は、五万六千三百円から九万八千円（同年七月）にハネ上がつている。

これは、労働条件のほんの一例にすぎない。

「……平和協定締結から二年間に、ざつと千人の人が減った……」、「一千人のクビ切り行進曲」の結果、職場は地獄になった、と『産経残酷物語』（一九六三年三月、新聞労連発行）には書かれている。だが、サンケイの労働者が被害者になつただけではない。同時に、加害者。

にもならざるを得なかつた。読者にたいしてである。また、一例をあげてみよう。

取扱い注意　（原文のまま）

初秋を迎えていよいよ御健勝のこととお慶び申しあげます。

さてサンケイ新聞は、わが自由民主党の政策を理解されわが党の政策遂行にたいへん御協力をいただいております。つきましては地方支部等で、いまだにサンケイ新聞を購読されていない方々に同紙の愛読をお願いしたいと存じます。

同紙の拡張はわが党広報活動の拡大にもつなが

るものでありますので、事情御了承のうえ御高配を願い上げます。

昭和四十五年九月二十二日

自由民主党幹事長　田中角栄

自由民主党

支部連合会長　殿

支部長　殿

こんなことがあつていいものだろうか。この事実をスクープし、国会で追及もした社会党の

機関紙『社会新報』（四五年一月一日）は糾弾する。

……日本新聞協会の新聞倫理綱領は「新聞の中立・公正」を決め、それを理由に新聞協会は記者クラブなどから社会新報、赤旗などの政党機関紙を排除、取材の特権を独占している。協会加盟の有力紙、サンケイが、「中立・公正」とはまったく違つて「自民党に協力」する立場で編集され、それがそのまま「党の広報活動」だったという事実……。これは日本国民の「知る権利」が危機に

ひんしていることを示している。……

社会党だから、左翼だから非難する。そう考
えることができるだろうか。『朝日』『読売』
『毎日』に次いで二〇〇万部を発行している全
国紙『サンケイ新聞』（鹿内信隆社長）の読者
は、どう思うだろう。それでは困る、政党の意
見が聞きたいれば政党機関紙を読む。そう答え
るのでなかろうか。自由民主党も『自由新
報』という機関紙を出ししている。

政府が持つてある強大な権力。それに「ノ
ー」とともいえるのが新聞。一人ひとりであれ
ば、一億分の一の意見しかいえぬ国民の側に立
つ——それが新聞の使命ではなかつたのか。い
ま、ほとんどの新聞がキャンペーンしている。

「公害」「高物価」「暴力」反対は、その立場に
立つものではなかつたのか。
『サンケイ新聞』の喜多幡政治部長はいつて
いる。「編集の立場として困つたことだと考え

ており部内にもそのような声が強い。販売拡大
への協力を民社、自民党に要請している。自民
党はあるのような通達を出して「協力。してくれ
たのだろうが、ひいきのひきだおしだ。部数は
のばしたいが、編集の側からいえば遺憾なこと
だというほかない」（『社会新報』）しかし、七
一年の年頭訓示で鹿内社長はいつた。「これか
らは特定多数のための新聞にする」政治部長が
「遺憾」であつてもどうにもできない。社内世
論がどうあれ、社長の方針に「ノー」とはいえ
ぬ『サンケイ新聞』である。いまなお平和協定
を結んでいる。

「君たちは負けた、ストは打てない」

平和協定を撤回させ、暴力ガードマンを排除
し、多数派を守つて職場に帰つた——総評、マ
スコミ共闘、新聞労連、東京地評、千代田・中
央区労協などで構成している報知争議共闘会議

は、これを基本的勝利と総括した。

佐藤書記長はいう。「ノー・モア・サンケイです。最初に平和協定が出されたとき、一年間ストをやめてくれ、と会社はいっていました。サンケイの場合は三年間でした」と、資料とメモを広げる。

平和維持に関する協定（昭和三五年一〇月、 （産経新聞労使が締結）

（略）

四、平和義務 会社と組合は第一項の基本原則にもとづき、つきの平和維持の義務を負う。

(1) 労使間の交渉事項はすべて労使協議会において平和裡に解決する。

(2) 組合はこの協定期間中一切の争議行為およびこれに類似する行為を行なわないものとする。平和協定書のほんの一部分である。だが(2)を見たいいただきたい。ストライキはおろか、あらゆる抗議行動が封じられているではないか。何が起きて、みんなで声を合わせて「ノー」と

はいえないということだ。「ノー」とみんなにいわせないこと、それが先に例を挙げた「サンケイ」を生み落とす。表現が多少変わろうとも、報知の労働者の多くはだまされなかつた。昭和四四年一二月、報知印刷の第二組合「全報知印刷労組」（当時約五〇人）がのんだ一年間の平和協定の一部にはこう書かれている。

「……会社と組合は、企業再建のため闘争至上主義を排し、良識を旨とし条理に従い、労使間の紛議はすべて話し合いにより解決する……」

一般の人にはわかりにくいだろう。だが、報知の労働者は、キナ臭いにおいをかぎわけていた。労働者を分裂させてまで主張を押しつけようとする手口（四五年七月七日、都労委が不当労働行為と認定）。第二組合が妥結後「ボーナスを出すから一年間ストをやめてくれ」といつてこの条文とともに出された、賃金ダウン、労働強化の諸条件。それをのむか、どちらでも選

べという東西九三人の人員整理案。組合活動への不当処分、活動家への役職降下。憲法なんか知らんよといわんばかりの憶面もないアカ攻撃。それらのなかから、この条文こそ「サンケイ路線」の本質と理解したのである。一四〇余日の暴力ロックアウトを含め、約一年間の苦しめたたかいが始まる。ノー・モア・サンケイ！新聞、印刷、臨時を問わず、報知の労働者は立ち上がった。

解決後しばらくたつてから、サンケイ路線の立役者・岡本武雄報知印刷社長は書いている。「……法政國家、民主主義政治体制のもとにおいては、到底許されない違法、不当な行為の数々を重ね、労働金庫よりの借入金も約二億円に及ぶという大犠牲を払って、諸君の手もとに残った決算書は『今次大争議解決に関する労使協定案』と誌るされた一冊のパンフレットである。しかも諸君の犯した罪科の、償い。はまだ終っていない。

むなしに戦いの戦果である。……この協定書は行き過ぎた「階級闘争至上主義の墓標」として、日本労働運動史に永久に残ることになる。……（一〇月中旬に発行した自筆の青色パンフレット「労使協定解説」前文から）

報知の労働者にたいして、要するに君たちは負けたのだ、といつてい。理由を本文が解説する。「今回の平和協定は……ストライキやロックアウトは事実上もはや打てないことを明らかにしたものである」労組に平和協定をのませたから労働者をいいなりにさせられるんだ、といわんばかり。四五年一二月、ギャンブル職場の中心・松岡照男記者に、横領の罪名を着せて自己退職を迫った。身に覚えがないと断わると、二三人目の解雇である。もちろん組合は反撃態勢をつくった。もしそうしなかつたら、この手口を多発したに違いない。まさにサンケイ路線だった。

結んだ協定、中味は大違い

さらに「闘争至上主義は敗れたり！」——労組は、全面降伏」と報じた業界紙『新聞展望』（四五年九月一八日）で、岡本武雄氏は語っている。「……会社側の筋を全面的に通すといった形で終った争議は、日本でもめずらしい……組合の良識が復活したのです……」読売新聞西部本社から、岡本氏とともに報知新聞社長を命じられた菅尾旦夫氏も「私が考えていた労使協定を結ぶことができた」と胸を張る。

どうだらうこの自信。これを受けて務台光雄読売新聞社長も喜ぶ。「……解決条件は会社のいうとおり……経営権は確立し将来の見通しも立つようになった……」（『読売新聞社報』四六年一月三〇日）。務台社長は四三年秋、水野会長のサンケイ退陣に殉じた岡本武雄氏を、四四年一月、報知の労務対策に起用した張本人であ

る。平和協定の専門家を招いた、読売コンツェルンの主軸。である。彼が「……（報知の）処分退職者の法廷闘争も残っているが、これからはもう大丈夫……」（『新聞展望』四六年一月二二日）というのは、もうストライキはないから、という意味だろう。勝った、勝ったである。では、解説された条文とは、一体どんなものだったのか。報知争議が解決したときの協定書、第一条を見てみよう。

一、平和の維持

(1) 労使は互いに敵視せず、労使間の紛議は、良識と条理に従がい、すべて話し合いによって解決する。

(2) 万一一やむを得ず、組合が争議権を行使する場合は、その実施を一二時間以前に会社に通告する。

なんだ、当たり前のことか書いてあるじゃないかといわれるかも知れない。だが、サンケイ

との違いはどうだろう！「第二組合とも違いますよ。一二時間前通告という制限つきだけど、こちらはスト権を保障させたんですから」と佐藤書記長ニッコリ。報知の労働者は、労働者と労働組合の魂をゆずらなかつたのだ。

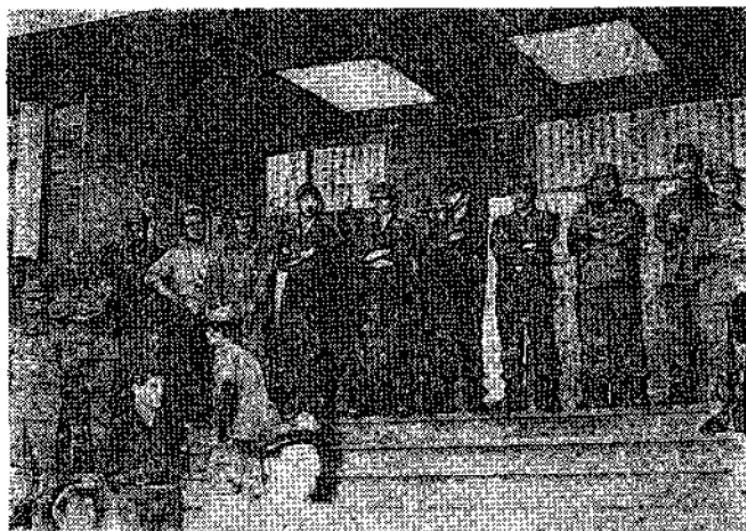
3 ひとつの方をえらんだ

つらい職場に迷い、外部からも疑問

読売と報知の社長が、思い通りになつた。といふ報知争議——労働者は、確かに、キズを受けた。まず組合から脱落者がでた。先輩後輩や友人、血のつながるものもいた。仲間を失う悲しみを、仲間を蹴落としてきた。エライ。人们は知るまい。争議解決後、勝利。したにもかかわらずほとんどの労働者が、「きつくなつた」という。有給休暇がとりづらくなつた。公

休さえ取り上げられたものもいる。ロッカウト中の借金にしても、五〇%は会社からかちとて返済したが、残りの五〇%は三年がかりで返済しなければならない。職場の権利も後退した。そして、監視する、エライ。職制たち…。

覚悟して職場に帰つたはずの報知労働者さえ「組合は負けたのではないか」という迷いを持つた。外部からはなおさらである。特に労働組合関係者からの疑問と批判は、処分を中心にして、終戦処理と、合理化をめぐって投げかけられた。主としてマスコミ、金属、地域の仲間からだ。どうして無法にクビ切りを受けるようになくなつてしまつたのか。不当な配転をされことになつてしまつたのか。労働者に不利な分割就労を認めることになつてしまつたのか。労働強化の大型外注印刷や実質賃下げの勤務システム変更をのんでしまつたのか。——要するに報知争議の解決のしかたが間違つていた



ロック前から5か月も居すわった暴力団

のではないか、ということだった。問い合わせは率直だった。

外でたたかうか、内でたたかうか

四五年九月一七日、報知系労組が、報知新聞労組の解決の仮調印を行なった日は、報知新聞労組のロックアウト仮処分裁判結審の日だった。ロックアウトの不当性を明らかにしロックアウト中の賃金支払いを求めたこの裁判は、9・17を過ぎれば、あとは命令待ちの予定。「九分九厘、勝訴する」五つの法律事務所で構成された弁護団を初めとして、組合側はそう踏んでいた。それだけに会社は、七月一〇日の提訴以降この日に向かって、敗訴が濃厚になってくるにつれて、次第に軟化していった。四月下旬以来二か月半も応じなかつた团体交渉が再開され、そのなかで「平和協定」を事実上撤回した。そして9・17を解決への大きな区切りとして考え

ていた。組合側からみれば9・17は、それまでの運動の到達点を示す道標であると同時に、その後に選択すべき「二つの道」の分岐点でもあつた。

二つの道——一部分妥協し譲歩しても基本的争点で勝ち多数派を擁して職場に帰り新しい局面のたたかいで転換するか、あるいは裁判勝訴を得てそれにたいするさらに大きな攻撃をも覺悟したうえで要求の全面貫徹をめざす長期争議を継続するか、9・17を前に組合側は選択を迫られた。前者は「後退」をともなう運動の局面転換、後者は、犠牲増大を覚悟した要求貫徹路線。この時点での運動にたいする評価が判断の基準となつた。どんな争議でも何度か必ず直面する、深刻な決断のときであった。

議論百出、短期間に密度の濃い討議がくり返されたあと、組合側は局面転換の道を選んだ。報知争議共闘会議と弁護団は次のように総括し

ている。

①裁判に勝訴しても、争議解決に直結しない。むしろかえって会社側が凶暴化する可能性がある。その場合、争議は長期化する。勝利が約束されているとしても、組合側はより大きなキズを負わざるを得まい。

②今までの運動の力量からみて、自主交渉で基本的勝利をおさめることが十分に可能である。

③組合側が会社側を圧倒するほどの力関係は作られていないから、いくつかの面でかなりきびしい譲歩を余儀なくされるだろう。しかし、これから活動で、それらを挽回し前進し得る力量を、組合側は持っている。

④処分が予測されるが、それに耐え得る團結力がある。また処分撤回闘争を早期に勝利し得る展望もある。

「なにより職場に帰つてたたかおう」というこ

とだったんです。外にいても内にいても、いずれたかわざを得ない。一四〇余日、多数派である七〇〇人近くを維持して暴力ロックとたかいぬいた団結で、職場を変えていくたかいに取り組む時機がきた、と判断したのです」と報知印刷労組の山口克巳委員長はいう。

まさしく、超えてたたかい。

負けたのではないか、という疑問を聞いて

「今はそう思う人たちも、やがてときがたてばわかつてくるでしょう」と市毛良昌さんはいわう。主婦と生活社、三井三池争議をくぐりぬけてきた東京地評のオルケだ。報知労働者が争議を通じて身につけた団結の固さ、守り切った争議権、事前協議制などの基本的権利は労働運動の前進を示すものでなくなんだろう。これこそ労働者の未来をひらき得るエネルギーなのではないか、というのだ。

ロックアウト中の賃金にしても基準外（残業料など）を含めて五〇%も支払わせた。翌年度の年次有給休暇をまるまる保障させた。解決後の年末ボーナスさえ六〇%以上を保障させた。そのうえ、これまで多くの争議組合がもつともキズつけられてきた分割就労も、その・きびしさを知りながら受け入れて就労し最小限の脱落者（一%）しか出さなかつたではないか。大型長期争議でこれほどの成果がかつてあつただろうか、というのである。

「六〇年代の長期争議の経験を吸収し、それを乗りこえた、超えてる争議。だつたんですねよ」とも市毛さんはいう。

五ヶ月近い暴力ロックアウトを受けても労働者の過半数約七〇〇人がたたかった。編集の記者たちと印刷労働者たちが肩を組んだ。生活資金にしてもアルバイトをやりながら二億円も資金から借り出して会社の兵糧せめをハネ返し

た。五〇台以上のクルマを乗りまわして活動し、大基地を建設した。学生が妻子あるおとなたちと共に闘った。ビラだけでも、半年間に三〇〇万枚、パンフレット一〇万部、労働運動史上かつてない『マガシン700』まで発行した。

著名人の支援署名も三〇〇人近く集めた。新聞労連を軸に総評、地評、地区労、マスコミ共闘総評弁護団などの共闘会議は、全金、全国一般など争議経験の豊かな幹部の参加も得て指導性を發揮した。国会・労働省での社会党、共産党政の援助による多面的な闘争も展開した。

この経過と結果を見て、なお負けたというなら労働運動にとって報知争議は「不思議としかいえない」と市毛さんはいうのである。

評価する多くの仲間たち

この意見に双手を挙げて賛成するのは、主として報知と同じような弾圧とたたかってきた争

議団の人々である。東京12チャンネル、東京新聞、サンケイ裁判原告団、毎日放送映画、日本活性、東京発動機、天王寺交通などの各労組だ。代表的な存在「ドレイ工場」という映画（山本薩夫監督）で有名な日本ロールの松田書記長はいう。

「日本ロールも暴力団、ロックアウト、解雇、分裂と、報知と同じ苛烈な攻撃を受けた。そして職場を追い出されて八年になる。早くもどりたい。八年のたたかいと報知争議の教訓を見て、労働者にとって労働運動にとってやはり職場が基礎なんだと思う。脱落を防ぎながら約七〇〇人が團結して、時期をとらえて職場に入ったことをまず高く評価したい。なぜ報知でそれができたかといえば、いうまでもなく報知労働者の固い團結だ。同時に、私たちが争議に入った一九六〇年代と今とでは、争議にたいする見方、考え方が変わ

つてはいることがあげられる。労働運動の経験と知恵の前進のなかで、どこを基礎にたたかうかがより深く具体的にとらえられてきているのだ。現在日本ロールでは八〇〇名余りが働いており同盟が主導権を握っている。労使協調路線のために労働者の要求は解決せず職場は苦しんでいる。頼りになるべき私たちは外。八年間も「ドレイ工場」がつづいているわけだ。職場の労働者は私たちに帰ってほしい、そうなれば同盟を抜けてスクラムを組みたいといつている。私たちが門前カンバをするれば一万円ぐらいすぐ集まつてくる。職場のなかの労働者の苦しみが表わされていると思う。このことからも私たちは職場の労働者の団結をどう作っていくかが、どれほど大切なことかと感じている。職場のなかでたたかうこととは苦しいことだろうが、相手もそこが泣きどころであるわけだ。報知もこれからがた

たかいだと思う。文字どおり日本ロールのゆくすえを示すものとして、連帯とともに、ほんとうに見守っていく

四五年一二月四日、一か月の懲戒休職者が就労した。報知印刷労組（東京）は六人。昼の一時、六人は会議室に入った。七か月ぶりの職場復帰に際して行なわれる「就労式」参加のためである。九月二一日の第一陣以降、就労する組合員に社長たちが演説する。催し。だ。庄司印刷部長を先頭に野田工場長、岡本社長、下川活版部長、千田労務部長が会議室に現われた。「君らのその態度は何だね」と野田工場長が口火を切つた。会社側を待つてタバコを吸い足を組んでいたのが気に入らないというのだ。
「本来なら社長が部屋に入つたら直立不動であいさつするのが礼儀じやないか」と岡本社長も威丈高な調子でつづいた。「君らには反省

のイロがない。今までやつてきたことにたいしてどう思つてゐるんだね」執拗な質問が始まつた。会社が勝つたと思うか、組合が勝つたと思うか、こんどの処分はひどいと思うか、などである。六人は黙つて答えなかつた。ヘタなことをしゃべつて、処分撤回の法廷闘争に影響しては、という配慮だつた。六人の沈黙に「抵抗」を感じた岡本社長は次第にいらだつていった。

一人ひとり名指しで質問をくり返し始めた。こんどは六人のだれもが口を開いた。「悪いことはしていない。間違つたことをやつてきたとは思わない」言葉をかえれば、組合が勝つたと思う、といったのである。岡本社長が野田工場長にいった。「全然反省しておらんようだね。自宅待機でもしてもらうか」「そうですね。君ら、よく反省して悪いと思つたら電話してきなさい。それまで六人とも自宅待機だ」

書記局に帰つてきた六人の話を聞いて、報知

印刷労組は、会社に団体交渉を申し入れた。席上、岡本社長は「あんまり態度が悪いので思わず自宅待機を命じた。あれは、ハブニングだった」と自宅待機命令を撤回、命令三時間後に六人は職場に入った。

この当時、疑問や批判を受けるたびに報知印刷労組の山口委員長は「まあ見ていて下さい」と答えた。組合員の反発力を信頼し切つていた。そして確かに、四六年春闘で報知系各労組は高率のスト権を立てた。東京新聞労働組合ではロックアウト後三年かかったスト権確立を半年間でやつてのけたのだ。「七年前、分裂・ロックアウトの弾圧を受けた西日本新聞労働組合だって、第二組合との統一を前進させて、四五年には「全社統一ストライキ」を実現しているじゃないですか。ましてぼくらは多数派だったんだから……」山口委員長はいま、困難な時期にも、その自信だけは失わなかつたと胸を張る。

どこでそんな力をつけたのかと問われるたびに「読売・岡本労政の暴力ロックアウトのおかげ。月島や毎放映の『基地』できたえられたんです」と報知労働者は答えるのである。

争議が終わって四か月、一月もなればすぎのことだ。銀座から築地、勝鬨橋へと、もつれて進む三つの影。一杯、一杯、また一杯だ。

築地の交差点を人力車が通る。自動車の洪水どこ吹く風。老車夫はいつもの確かな足どりで行く。

●「芸者だな、ニキロメ！ オレもきれいな女の子と酒でも飲んで……。ああ、鼻血ブーだな

ア」

「バカ、そいつをいうならキレイどころ、ま、お兄さん、おひとつどうぞ、てなもんだ」

「それは去りゆく風物誌、あの人力車さ」

肩を組むようにして歩く三人。報知新聞芸能記者一五年のAさん、整理記者九年のBさん、まん中が輪轂工七年のCさんだ。有楽町の交通会館地下の飲み屋でばったり、懐しの「天竹」へふぐを喰いに行こう、ということになったのだ。

「天竹近いか、まだなのか」

「近いよ、すぐだ。酔ってくだまきや天竹ブルース、目の前にあり、だ」

ロック前にはAさんやBさんと口を聞いたこともなかつた。四階の編集記者たちと輪轂のオレが肩をくんで飲み歩く……月島基地があつたおかげだ。あそこで一緒にがんばつているうちにこんなふうになつた。

両肩に重い酔っぱらいになつたAさんとBさんの問答を聞きながら、Cさんは思った。あの橋を渡れば、月島だ、と。

II 月島基地はふるさと



昼食時は大忙しのレストラン「ロック」

その夜、帰ってきた
仲間たち

スマッジの東京の空も、
ときには星が降るよう輝く夜がある。その日は、いつとき風が吹いて、空の底にはりついたような星が、夕暮れをいろどった。その光がしだいに輝きを強めるころ、プレハブの窓から外を見て叫んだものがいる。「アレッ、あいつは就労したんじゃなかつたかな」声につられてもう一人が見えた。

「ほんとだ。きょうから仕事のDさんだ……」

電車通りの方からやつてきたDさんは、月島基地。前の空き地を横切りながら、顔いつぱいの笑いを見せて手を振っている。歩幅が小さくなつて、やがて駆け出し基地のなかに踊り込むように入ってきた。

「やあ！」

「どうも！」

息をはずませながらあいさつするDさんのまわりに、基地にいたものは、みんな集まってきた。

「どうだつた、会社のなかは？」

「いやあ、イヤな空氣。えらい人はいやがらせをいうし、アタマにきっぱなしだよ。だけどガマン、ガマンと自分にいいきかせていたんだ」

「そんなにひどいか？」しばらくは会社にはいれない聞き手たちの胸が痛む。争議解決直後の社内は、最前線。に違いない。

「いや。まあ、大丈夫さ。タヌキ寝入りすることに決めたよ。でもいいなあ、月島は。自分のウチへ帰ってきたような気がするよ。きょうは早帰りでどうしようかと思つたんだけど、月島へきてよかつた。一日中モヤモヤしていたのがスーっと消えちやつた……」

四五年九月二二日、報知三労組のロックアウト解除後、組合員の約三分の一の一七一人が、五か月ぶりに会社に戻った日である。あの三分の二は、一一月四日までに二回に分けて戻る、という分割就労の第一陣だった。話がはずむうちに、ぞくぞくと就労組が帰つてくる。聞き手に、残留組だけではなく、ビルの工事現場から帰ってきた土方姿の臨労組員も加わった。アルバイト学生だから、という会社のいい分で、まだ解決していない仲間たちである。会社のなかはどうなつてゐるんだ。部長はなんていつてゐる。第二組合員は……。広い基地のなか

に、就労組を囲むいくつもの輪ができた。

同じ日、同じ頃、大阪の基地、毎日放送映画労組管理のスタジオでも、同じようなシーンがくりひろげられていた。五〇〇キロ離れていても、報知の労働者の気持ちは同じだったのである。

やがて就労組と残留組は、連れだって三々五々と出ていく。室内の明かりも一つ二つ消えて残ったのは泊り番。若い労働者がひとり、ギターを抱えて星の夜のセンチメントをハミングし始めた。

基地——正式には、報知争議をたたかつた報知系五労組の連絡所であり、仮事務所である。いつの間にか基地と呼ばれるようになつた。たたかつているという気持ちが、そう呼ばせたのかも知れない。事実、基地は会社から閉め出された組合員たちが身を寄せ合う場所だった。こ

こに集まつて話し合い、ここから活動に出て行った。たたかいの拠点、まさに基地だったのである。

住人は東京約五〇〇人、大阪二〇〇人、合わせて七〇〇人。およその内訳は、東西にまたがつて組織している報知新聞労働組合（古川洋一委員長）が四〇〇人（第二組合二〇〇人）、報知印刷労働組合（山口克巳委員長）が一三〇人（第二組合九〇〇人）、報知印刷大阪労働組合（糸井富雄委員長）が五〇人（第二組合五〇人）、報知新聞臨時労働者労働組合（北村健次郎委員長）の発送分会が七〇人、そしてロックアウトを受けず社内でたたかつた臨労組の連絡員分会が三〇人、報知新聞臨時労働者大阪労働組合（川北明委員長）が二〇人となつてゐる。

報知新聞を製作・発行している、報知新聞・報知印刷両社の全従業員数が約二三〇〇人だから、過半数が基地の住人だったわけだ。争議

中、会社の味方になつた第二組合の合計が三五〇人弱、これとくらべれば報知系全体の六七%という数字になる。この数字はこの七〇〇人のうちから争議解決四か月後までに退社・脱退など出て六二三人になつた（昭和四六年二月一日現在）ため、六二%となつた。

こんなにたくさんの人々の足場になつた基地。「その基地の象徴が月島なんです」と東京の報知労働者はいう。大阪では毎放映のスタジオ。数か月暮らしだけなのに、いつでも帰つていきたくなるところ。ふるさとのようなものであつたのだろうか。

ふるさと月島。そこへの道のりは、しかし決して短いものではなかつた。一人ひとりが、人生を問われながら歩いた道だつた。

1 ロックを受けて村づくり

社外に放りだされた七〇〇人

ロックアウトは矢張りばやに襲いかかってきた。四五四年四月一五日、特別防衛保障（飯島勇社長）の暴力ガードマン約三〇人が導入され、文字どおり暴力が報知新聞社内を支配した。組合のスト態勢が強まつた。戦闘服・軍靴姿にだれもが怒つたのだ。会社側の部長すら不安の色をかくさなかつた。「あれで棒剣をつければ帝國陸軍じやないか。2・26や5・15事件みたいだ。『話せばわかる』という組合の主張には同意だ」と耳打むする人もいた。しかし、多数の意見など無視するのが暴力の本質だ。再三の抗議にもかかわらず、暴力ガードマンは社内をのし歩き、会社は話し合いで解決する態度を示さ

なかつた。大阪ではXジムのライセンス・ボクサーを警備室に入れて威圧しようとさえした。四月二八日、報知新聞社から五〇〇メートルしか離れていない国会議事堂で、社会党の島本代議士がこの問題を緊急質問、野原労働大臣は「驚いた。まことに遺憾である。厳正な措置をとる」と答えた。傍聴した組合員は、これで会社も少しは反省するだろう、と考えた。事態が好転するだろう、争議は解決するかも知れない。しかし逆だった。

大臣の答弁をあざ笑うかのように、その晩八時、報知印刷労組にたいして全面無期限ロックアウトが強行された。報知新聞労組では、会社の意を受けた野球・販売両分会の有志がスト指令を返上し、スト破りした。三〇日午後一〇時三五分、報知新聞の拠点職場である整理・校閲三分会に部分ロックアウト。五月二日午前零時、報知印刷大阪労組に全面無期限ロックアウト。

午後七時三〇分、報知新聞労組東京支部に全面無期限ロックアウト。六日午後九時、報知臨時三〇分、報知新聞労組大阪支部に全面無期限ロックアウト。一〇日間で、七〇〇人を越える労働者が、社外に放り出された。五月七日、解決のために開かれた報知系の上部団体・新聞労連との団交で、岡本武雄氏はいった。「解決策は組合がすべての非をわびることだ。国会の委員会で野原労働大臣が驚いても何にもならん」この後二か月以上、会社は団体交渉に応じようとしなかつた。

この間、すでに、四四年秋報知印刷労組を脱退、第二組合を結成していた全報知印刷労組は五月一日、「共産党員は報知から去れ」の立看板を玄関前階段上に立てた。会社の宣伝に全面協力したものだった。この「援護射撃」を暴力ガードマンは拍手で称賛した。無法・暴力・ア

カ攻撃の連合戦線である。

報知新聞東京では、ロックアウト一時間前までに、分派活動の中心だった野球・販売両分会が一名を除き全員連名で脱退届けを出してきた。これをキッカケとするかのように東京・大阪で脱退者が出始める。『良識派』と自称して、脱退者数を玄関前に掲示した。組合の掲示物が玄関前に出されるたびに『嚴重抗議』して、いた会社のなんたる寛容さ。まことにみごとな連係プレー』というほかない。

組合員は放り出されて気がついた。どこに行つて何をやつたらいいんだ、どこに集まれば仲間の顔が見られるのだ。みんなで問題を出し合い、みんなで考え、行動していくのが労働組合だ。集まる場所がまず必要だった。ロックアウト直後、どの組合も、富士紡会館や日本学生会館、太融寺などを借りて集会をもった。合同集

会も開いた。

暴力団にたいする怒りがどつと出た。どの集会でも、仲間や肉親を引きさいて組合を分裂させた岡本労政への憎しみが語られた。「こんなひどいことは許せない。オレは岡本のイエス・マンにはならない。勝つまでたたかう」という決意がのべられた。組合の集会ではしゃべったこともない人が次々に立ち上がったのだ。

五月三日、日本学生会館の全員集会に佐宗記者がきた。報知新聞のエリートを自認し、スト破りをつづけてきた三〇人の野球分会から、ただ一人組合に残る決意でやってきたのだ。社歴一年余り、二四歳だった。「心のなかに良心の歴史を作りたい。そう思つたんです」拍手の嵐がまきおこつた。しっかりと眼を閉じたまま、いつまでも、拍手をやめない若い現場労働者がいた。流れる涙を拭おうともせず「がんばれよ！」と叫ぶ、中年の記者がいた。そうだ、貸上

げや時短の問題じゃない良心を守るたたかいなんだ、だれの胸のなかにもしみこんでいく何かがあった。しかし、この集会に参加したもののがからも、やがて何人か脱落していく。良心の歴史を作りたい——実は、一人ひとりが、キミの良心とは何なのか、と問い合わせていたのだ。何を守る良心なのか、何にたいして守られるべき良心なのか。このときから、報知の労働者は、それを自らに問い合わせることになる。そして生き方でそれに答えた。

生きがいを求めた新しい日常

ロックアウト——団結の場を奪い、生きがいであった仕事を奪い、生活を維持してきた力ネを奪う。組合は団結の場を作り、生きがいを求める、生活を保障し、会社に反撃しなければならない。ロックアウト直後の集会は、人々の心にスクランブルを組ませた。だが、それだけで十分な

わけではない。会場も毎日は借りられない。どうしても長期的な拠点、基地の建設が必要だった。

五月六日、東京・京橋の正路喜社ビル一階、遅れて六月四日、大阪・堂島毎日会館内の毎日放送映画社スタジオが借りられた。いずれもTBS資本や毎日新聞資本の偽装倒産とたたかっている、正路喜社労組、毎放映労組という争議団の管理下にある空室だった。無償の大部屋。みんなこおどりして喜んだ。労働者の連帯はありがたい。だが聞いて喜び、見てびっくり。何年も放りっぱなしになっていたそこは、お化け屋敷同然だった。組合員は持てる力をすべて発揮して整備した。

京橋連絡所(東京)と名づけられ、五〇〇人近くの人間がどっと押しよせて二日もたたぬうちに、そこは、新聞社になつた。約八三平方メートルの室内のど真ん中に編集デスク。すぐそば

には写真の暗室、自動車の配車デスクもある。交換嬢だって電話の前にデンといる。ないのは工場施設だけ。闘争本部の机など奥に追いやられた感じになった。必要な人材もすべている。カネと施設と販売ルートさえあれば、明日から五〇万部の新聞だって発行できた。それはそうだろう。なにしろ日頃東京で七三万、大阪一九万の報知新聞をつくっている人間の過半数がいるのだ。内外勤記者だけでみれば七割もいる。

だが逆にいえば、それだけ多くの人がロックアウトによって新聞づくりという仕事を奪われたのだ。ロック一週間後、闘争本部そっちのけで、まず編集局を作り上げたのも無理はなかつた。しかし、新聞づくりのために京橋を借りたのではない。たたかいのためだ。新聞づくりができる——みんなの気持ちのなかにボッカリ穴があいた。意に反して失業したときの気分である。とくに一週間前までは報知新聞の社旗を

ひるがえして肩で風切って歩いていた記者たちの胸に、いいようのないやるせなさがこみ上げていた。

「暴力団に監視されて、原稿が書けるかい」新聞記者としてこのうえない屈辱、と思つた。それが出発点だった。ジャーナリズムの一翼を担う誇りであり、生き方であった。だが、社外に放り出されると、たんに「肩書き」を剥ぎ取られただけなく、人生の目的まで奪われてしまつたような気がした。組合員として、記者として、暴力労政を決然と拒否したもののが「組合人間」ではない。オレは新聞記者だ」そのころは、まだ、みんなそう思つていた。

だから会社もそこにつづこんで脱退工作をしてくる。早朝に、深夜に電話が鳴る。ジャン、と鳴つたら飛びつけ。長年の習慣で受話機を握った耳もとに「お前も新聞記者なら、帰つてき

て仕事しろ」……。悪魔のささやきである。

「いや、記者としてより人間として生きます」と答えて受話機を置く。また鳴る。また、断わる。最後には「ばかやろう」「死んでしまえ」といわれた。新聞記者としての日常生活から、新しい日常生活へと変わっていく苦闘だった。

「あの頃、初めてほんとうに読者という存在について考えました」いま、F記者は思い返す。人間と記者と組合と読者とを、別々に考える間違いに気がつき始めた時期だったというのである。

新聞記者を生きがいにしてきたこの一〇年。この一〇年はどこに行ってしまうのだろう。来年のオレは一体何ものになつているのだろう。組合人間、か……。将来への不安が際限なく押し寄せてきた。しかし、とまた考える。会社は、報知新聞をだれが作ってきたと思つているんだ。だれが公休も返上して一日一五時間も駆

けずりまわって、紙面を埋めてきたと思つているんだ。オレたちじやないか。それを追い出しやがつて、チクショウ、あいつら!……。このオレたちのささやかな真実を多くの人に知つてもらわなければならぬ。報知新聞の読者は何も知らないで、暴力団を雇つた会社と、その同調者の「汚れたペン」で作られた紙面を買っているだろう。その読者に真実を知つてもらおう。

「小さな新聞」づくりの中に

日刊の組合ニュース『闘う報知』は、だからデスク会議で編集方針が決められ、あらゆる組合員によって書かれた。記者も、現場労働者も、学生も書いた。途中から家族や一般市民の投稿ものつた。これまでのよう闘争本部の作つたニュースではなかつた。報知印刷労組の『勝利』が全面ロックアウトに先がけて、指名

ロックを受けた三人の手によって始められたようだ。

新聞づくり——「京橋連絡所は生き生きしていますね」訪問した人はみなそういった。九〇万部とはいかないが二〇〇〇部の。小さな紙の弾丸。づくりにみんなの生きがいがかけられていった。新しい日常生活が始まったのである。

轟々と鳴る輪転機から流れ出てくる活字の埋まつた紙面を見る喜び、それは手書きのガリ版ニュースがバッタン、バッタン小さな輪転機からはき出されてくるのを見る喜びに変わった。そしてやがてこの『新聞』こそ報知労働者の血であり肉であることも理解していく。

編集も現場もなかつた。現場労働者は、原稿書きに打ちこむ編集労働者の姿に人間を見た。記者たちは、ガリを切り、小さな輪転機をまわしてみて現場の苦労を思つた。「編集と工場は別会社であつても、仕事のうえは一本。みんな

でやるのが新聞づくりだ」とは会社がいいつけた言葉だ。別会社方式で労働者を分割支配しながら、生産性向上のためには、『举国一致』をはかる会社側。だが、報知の労働者は、その言葉の眞の意味を肌身に感じていた。そうだ、読者が、受け取り手が、心から求めているものを作る、それならわかる。売つてもうけるためでなく、本当に役に立つものを送りだすためなら、オレは機械の一部になつてでもがんばりぬくぞ。輪転のWさんは『闘う報知』（四五六年六月一日）に書いている。

「……編集関係の人気がよく『読者のためにいい新聞を届けなければならない』というのを耳にしてきた。まったくその通りだと思う。だからオレは、取材部の記者が、汗水流して取材したものをして『きれいで鮮明な紙面を印刷する義務』があると思つてやってきた。地味でガラが悪く、その上空氣もにごって衛生的には決してよくない輪転職場

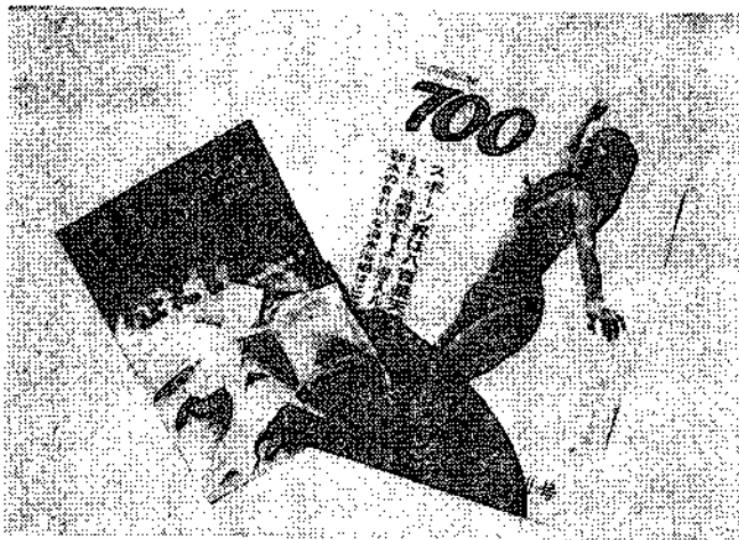
であるが、オレなりにこの十年精いっぱい努力して

きたと、胸を張っていえる。入社当時は輪転機がたった三台しかなかったが、いまは二三百台にふえた。この発展、オレは微力だが、多少はなにかの役に立っていると思っている。先日の『闘う報知』を読んで涙が出てしかたがなかつた。相撲担当(記者)の吉田さんを退社に追いやつた岡本(報知印刷)社長、いくじのない部長、自分さえよければと平氣で友を裏切る組合脱退者……。ハラがたってたまらないが、吉田さんの退社を決してムダにしてはならないと思う。一日も早く吉田さんに吉報を届けるためにも、現代の悪雄、岡本社長のやっている不法で、異常な行為を粉碎しなくてはならない。……この闘争を勝利し二〇〇フォン以上(スキヤ橋交差点のラッシュで九〇フォン)の輪転機の轟音の中で、早く仕事をしたい心境だ。……ロックアウトなんて、長い人生のうちでは一瞬の悪夢さ」

健在。示したマガジン「700」

こうしたことのなかから、スポーツ・レジャー・オーライの出版計画が始まった。資本の圧力のない、そのかわり組合の主張を訴えるためでもなく、庶民であるオレたちが庶民のために眞実のスポーツ界・芸能界を書こう。いまの報知新聞に負けないものを作ろう。

『700』編集会議が積み重ねられていつた。発案から約二ヶ月を経た七月一〇日、『マガジン700』は発売された。『700』の名の由来は、そのバタ臭い読み方にもかかわらず約七〇〇人の団結だった。取材や編集作業、印刷工程に一ヶ月以上かけて準備されてきた創刊号の内容はグラビアが「なまざと女と」、トップ記事が「スポーツ界は八百長天国」だった。報知のたたかう記者たちが精一杯、庶民の立場



全国で反響をよんだ「良心……」と「700」

で書いたものだ。すぐ反響があった。労働争議のなかの「新しい感覚」と『東京新聞』は一ページ近い特集記事を書いた。共同通信社も取材にきた。週刊X社もきた。X社の記者は取材にきて一冊の『700』に五〇〇〇円を払った。前にも後にもない、高値、だった。パリ滞在の日本人から激励されたときは報知の労働者もびっくりした。

もちろん批判の声も少なくなかつた。「争議団なのに労働者の視点に立っていない。オアソビだ」と、労働運動のプロたちが言つた。「雑誌版『報知新聞』に過ぎないじゃないか」と同業者の一部がいつた。「マスター・ベーション、売れるはずがない」という厳しい意見もあつた。だが現実には、二号が八月七日、三号が九月一二日に発売され、一〇〇万近く黒字で終わつた。『殿サマ雑誌発行』にはならなくてすんだようである。

争議解決後、報知新聞社の菅尾旦夫社長は、「組合もずいぶんイヤミなことをする、と思つた」といつた。販売出身の同氏の目に『ライバル』と映つたのか。社内の記者が、社外の記者を憎んだ理由のひとつようである。彼らは売れ行きを気にかけ、取材先で読まれることをきらつた。多分、社外に放り出されたものが、記者としても人間としても組合員としても「健在」であることが不快であつただろう。ロックアウト中の社内へ切り込んだ。武器の一つであつたことは事実である。同時に、社外に放り出されて新しい日常生活、生きがいを求めていた編集記者たちの心の支えになつたことも間違いない。ロックアウト当初の団結の基礎の一つであつた。

発行されたものは、良くも悪くも記者たちの意識を反映する産物だろう。「もっと書きたいものがあることを今になつて痛感する」という

記者もいる。また、赤字を出すまいとして記者たちはがんばつた。一人で各号約四〇〇部売つてのけたものもいた。『700』を作ることも売ることもたたかいのひとつだつた。そしてそのなかで無我夢中だった記者たちが鍛えられていったのである。

2 どこにでも仲間を見つけた

あの人の姿を見ると……

ロックアウトを解き職場に戻せ、と会社に要求する就労闘争。報知新聞社や読売新聞社にたいする抗議デモ。一般の人に報知争議を訴えるデモとビラまき、宣伝カー活動、労働組合支援・共闘を求めるオルゲ活動と交流集会。組合脱落者や会社側職制、スキップ（スト破り）にたいする説得行動。会社の不法性を明らかに

する法廷闘争。お互い同士の理解を深め、方針を決める全員集会、分会討議、家族交流……。一日として行動のない日はなかった。「会社より一日長くたたかおう」などといいながら、苦しきことのみ多かりき、だった。しんどい諸行動のなかで、報知労働者が見つけたものは、外にも内にもいる仲間であった。

「帰りの電車のこと。読むものも持つていなかったので配つて残ったビラを取り出して読み直していくと、となりにすわっていた人が肩をつづいた。ふり向くと『そのビラ、有楽町でもらつたんでしよう?』『いいえ』と答えると『実はぼくもさつきもらつたんだけれど、あんまり読まなかつたな。でも報知はいろんな所でビラを配つていてるよ。よくうけとるんだが大変らしいよ。君は労働運動に关心があるの? 女のコで珍しいネ』と話しかけてきた。その人は『あの私……』という

のもきかずに、東京駅から戸塚駅をすぎるころまで演説をぶつていた。私もおもしろいので黙つて聞いていた。『労働運動は純粹だ。出世主義の世の中でもそういう不当や不正に立ち向かっていく人間ってすばらしい。ぼくは労働運動を支援する』。こんな話だった。戸塚をすぎたあたりで『どんな関係に勤めているの?』と聞いてきた。『報知新聞社』と答えたたら頭をかいていた。それから電車で顔を合わせるたびに『どうですか? やつてますか。がんばつて下さいネ』とはげましてくれる。私もはつきりいわなかつたことがちょっと後ろめたいけれど、こんなふうにはげましてくれる人がふえて、ちょっぴり自信もできた』(写真分会 女性組合員『闘う報知』四五五年六月二五日)

梅雨に入つて、五〇〇人近い人間の出入り

に、京橋連絡所は、人いきれでむせ返るようだった。格子のスーツに、ソフトをかぶった深沢哲也さんは、いつものダンディーな姿で顔を出した。もう五〇の坂を越え、定年も間近い映画記者である。映画評論家としても名を成していた。週刊誌や映画雑誌、広告などに、署名入りの記事を見た人は多かる。報知では「哲」の署名で書いていた。いわば一家を構えた人なのである。その深沢さんが、みんなと一緒に汚い椅子に腰をかけ、ビラを黙々と折っている。もう何年も折りつづけてきたように、確実にていねいに……。ときどき、仲間のジャレを聞いて、手を休めずにニッコリ笑う。鬭争中のことで映画の話は出ないから、寡黙である。

会社からの脱退工作に動搖したこともあるまだ若いH記者はいった。「あの人姿を見ると涙がこみ上げてくる。組合に残ってほんとうによかったってね」輪転のGさんもいう。「あの

人、この間、ここで即席ラーメンくつてたんだよ。『卵ひとつ入れて』なんていってさ。オレの隣にすわってよ」あのカッコいい人がビラも折れば即席ラーメンもする、と喜ぶのである。

仲間がいる——なんでもないことのようだが、当然のことでもあるが、大きな発見だった。たんなる友だちではない。たんに同じ組合員ということでもない。ロックアウト前から何回もくり返してきた全員集会、分会議。そのとき「最後までがんばります」と誓った仲間が去っていった。そのたびに驚き、傷つき、怒った。他人は頼りにならない、たとえオレ一人になつても、とがんばってきて見つけた仲間だった。言葉で、ではない。人生をかけた行動を通して知った仲間だった。

知らない町で、出退勤を急ぐ人がいっぱいの駅頭で、よその会社で、オルグした組合書記局

で、知人の家庭で、喫茶店やバー、繩のれんや屋台のオーデン屋で、稼ぎにいったアルバイト先で、住んでいる団地や自治会で、所属している記者クラブで、たくさんあるこれまでの取材先で、授業料値上げ反対のキャンパスで、行きずりのタクシーや電車のなかで、遊びに行つた山や海で……。今まで思つてもみなかつた所で仲間に出会つた。たたかつてみたら、たたかう労働者の目でまわりを見まわしたら、どこにでも仲間はいたのである。家に帰れば、妻はもとよりわが子まで「父さん、思つた通りやれよ。ぼくは大学進学をあきらめてもいい」などといった。

支援の人々ばかりでなく、会社側の人間たちにも奪いあうようにして読まれた。『闘う報知』を読んだ人は、どこの町の横丁の赤提灯でも、報知争議が語られているに違ひない、と思つたことだろう。

生活資金にも大きなバック

「生活資金はどうなつてゐるんだい」——ロックアウト後、七〇〇人が必ず聞かれたことだ。給料が出ないのでどうやって生活していくんだ。その問い合わせたのも、たしかに仲間だった。日本新聞労働組合連合（三八〇〇〇人）——新聞労連は、ロックアウトと同時に、緊急全国中央闘争委員会を開いた。そして、動員、ビラまき、スト権などによる支援とともに、財政確立の方針を決めた。全組合員一人五〇〇円カンパと労働金庫から報知系組合が生活資金を借り出す場合の裏書き保証、だつ

た。この決定が、報知の労働者を基本的に支えた。

この段階では、全精力を争議の早期解決に注ぎこむ、五と六月中にもロックアウトを解除させる、というのが闘争方針だった。そしてまた、なにしろ約七〇〇人の大世帯、闘争資金の貯えもほとんどなかったから、ロックアウト直後は借金とカンパがなによりの味方だ。だから新聞労連のバックアップは、闘争への全力投球を可能にし、明日のメシをとりあえず保障した。まだ争議への心構えが十分でない多くの組合員の数ある不安のうち、生活への不安を取り除いて柔軟な團結をも支えた。報知労働者は仲間の支援に感謝しながら思った。借金は、会社からバックペイを取つて返せる。カンパは今後の共闘で返していく。オレたちの闘争は正しいのだから……。そして個人々々、可能な範囲で生活を切りつめながら、ロックアウト前の平均

賃金に近い金額を労働金庫から借り入れたのである。

暴力団導入の翌々日、四月一七日には、それまであった報知支援共闘会議が、報知争議共闘会議に発展した。構成は、総評、総評弁護団、東京地評、マスコミ共闘、新聞労連、千代田区労協、中央春闘共闘などだった。報知新聞労組にたいする全面ロックアウトの翌日、五月三日、民間放送労働組合連合は支援を決議した。以後、一番身近の読売新聞労組、日本テレビ労組、読売テレビ労組、読売広告労組をはじめとして、全国の労働組合の支援決議、支援スト権があいついだ。スト権は、争議終結までに合計四〇本立った。

争議共闘会議に参加した大単産や中小単組の指導者たちが次々にかけつけて、それぞれの争議経験にもとづいて報知の指導部にアドバイスした。報知労働者の大部分にとつて、聞いたこ

とも見たこともない地域の組合の組合員から、集会でデモで激励を受けた。社会党の国会質問、共産党的労働省抗議なども行なわれて、報知争議はまたたく間に大型化していった。

「労金借入金といい、争議共闘会議の充実と



「もうすぐ完成」基地づくりに汗ながす

いい六〇年安保以降の一九六〇年代にはなかつたことです。弾圧のあくどさと、すでに一年以上前からの大量宣伝や法廷闘争、ストライキなど報知系労組のたたかいが実を結んだのでしょう。この「六〇年安保共闘」型のたたかいは、

七〇年代の労働運動の展望を切りひらくものになるはずです」正路喜社労組の佐藤委員長がいった。

そんな難しいことを考えてもいなかつた報知労働者は、次々に増える仲間の存在に、ひたすら感激した。オレたちはひとりぼっちじやない。たくさん仲間に支えられているんだ。

みんなの月島基地を建設

連絡所が借りられ、新聞づくりも取り戻し、仲間を見つけ、と

りあえずはメンの心配もなしに、総反撃態勢に入っていた六月なかばすぎ、朗報が入った。ある組合員の知人の好意で、月島の約一〇〇〇平方メートルの空き地が九か月間借りられるというのである。みんな喜んだ。夢のようだつた。闘争が正しければ、組合員の数が多ければ、こんな運にもめぐり会える。当時、九年間続いた正路喜社争議も勝利を目の前にし、何かと微妙な時期にきていた。それに五〇〇人近い人数にとって正路喜社ビルは手ぜまでもあつた。早速、月島の空き地にプレハブを建てる準備が始まつた。

発送分会のIさん。雨の合い間に空き地の整地をしてきた。もう少しでプレハブ建築にかかる頃だった。昼休み、くもり空だといふに、裸の上半身には汗が流れている。疲れていた。しかし七月一日移転のはずが、雨で、いつ

になるかわからなくなつていて。がんばらねば……。ここにできるプレハブの大きさを想像した。そこに集まつてくる組合員の笑顔が見えた。「長かつた」とIさんはつぶやく。婦人部がにぎつたオムスピを右手に、お茶を左手にIさんは思い返す。「四〇年頃から組合のありがたみがわかつた。査定の少ない賃上げやボーナスが取れ、オレでもいいたいことがいえた。怒られるんじやないか、笑われるんじやないかといふ心配を、この五年間しなくてすんだ」そしてロッカアウト。「そうだ、いまオレが作ろうとしている基地は、みんなが何年も前から作るうとしてきた。基地、なんだ」ここにできる月島基地はみんなのものなんだ、とIさんは思つた。

3 「敵」の正体と開けた展望

二八七人の文化・芸能人アピール

七月七日、雨の七夕である。京橋から月島へ、東京の報知系労組は移転を完了した。この日、たたかいのひろがりがまたひとつ実を結んだ。文化人、学者、芸能人、スポーツマンなど各界の第一線で働く著名人が、報知の労働者を支持する「共同署名」のアピールを行なつたのである。全国町村会館の九階会議室に、一般紙、スポーツ紙、週刊誌の記者二十数人が集まつて、記者会見が開かれた。発起人のひとり高木教典・東大助教授による経過説明のあと、映画監督の篠田正浩氏が、アピールを読みあげた。中村梅吉から藤圭子まで、といわれた共同署名はこのとき二〇九人。争議解決時までに二八

七人に達している。労働争議では初めてのことだった。

記者団とのやりとりのなかで、ある記者が篠田氏に質問を向けた。「あなたは一方的に組合を支持しているが、公平に判断するには両方のいい分を聞かねばなるまい。会社のいい分は聞いたのか」

篠田氏は答えた。「『敵』に向かってどう考えるかと聞くほどナンセンスなことはない。新聞社のなかに暴力団が導入されて、その暴力団の威嚇によって組合員が生活を脅かされていふ。こうした事実関係が客観的にあらわされているときに、なお、暴力団を雇つた資本家に説明を求めるのですか。日頃ニュースに敏感なジャーナリズムが、同じ新聞社で行なわれているこのような事件はとりあげない。そのことに私は大きな不満を持っている。私たちのアピールの性格は、争議の良し悪しではなく、あくまで言

論機関である新聞社に暴力団が導入され、組合員のなかには負傷者まで出たという事実にたいする激しい憤りだ。力のあるものとないものが争つたとき、力のないもの、働く労働者の側に立つのが私の、生きるモラルです」

篠田氏のこの言葉を、もつとも喜びながらもつとも冷静に聞いたのは、報知の労働者自身だったろう。月島基地が生まれた頃、篠田氏のいふ。敵の姿がようやく正体をあらわしていたからだ。

横行する暴力、加担する警察

5・14 ……わが社労使の紛争は、すでに会社が確固不動の証拠を把握しているとおり、日本共産党東京都委員会内に『報知関係特別委員会』が特設され、その戦略戦術の指導下に、ひたすら革命路線への奉仕に終始する一部日共党員の謀略に基因していることは、まぎれもない事実

である。……（菅尾報知新聞社長、岡本報知印刷社長の「声明書」）

五月に入つて会社のアカ攻撃は恥も外聞もないものとなつた。菅尾氏は読売新聞西部本社社長だった。岡本氏は読売の務台社長に抜てきされてやつてきた。当時の編集局長は元読売新聞社会部長、長谷川実雄氏である。長谷川氏は副社長に昇進したあと読売へ帰任、現在労務担当、社員教育委員会委員などを兼務している。このようなアカ攻撃は玄関前に堂々と掲示され、道行く人々を驚かせた。共産党から「事実無根」と抗議を受けるまで貼り出されてあつた。読売新聞資本と報知の経営者は憲法を守る意思を持たない、「思想及び良心の自由は、これを侵してはならない」（憲法第一九条）ことなど閑知しない。敵であることを、報知の労働者は見抜かざるを得なかつたのである。

5・25 ……ぼくはこれまで色々と反体制的など

とを言つてきただが、争議を通じて、体制の人間だということがわかつた。ぼくには妻と二人の子どもがいる。報知で食つていかなければならぬ。だから報知新聞社がつぶれないよう努力している。……（一部長の発言）

その後も脱退工作に狂奔した一部長の発言である。争議前には「ジャーナリストは反権力、国民の側に立つべき」などといつていた。カッコいいからいっていただけなのか。先輩記者たちの変節。だがオレたちにだって妻子はあるんだ。そこに日常では見つけることができなかつた。敵を見た。

5・27

私は、報知六年の生活にビリオドを打ちこの四月末に退社するはずだった。……好きな映画に没頭したいと思ったのである。……あまり金にはなりそうもないが、映画の宣伝の仕事をしたいという夢を抱いていた。……そこのロックアウトである。最初は、予定通り五月末まで組合と行動をともにし、期限がきた

ら会社に辞表を出すつもりだった。……五月二七日。組合脱落者およびスキップ説得のため婦人班から派遣された私は、男性組合員とともに会社前でピケをはつていて、暴力ガードマンから泥水を浴びせられた。夕刻の大就労闘争の際には、目の前で組合員が乱暴されるのを見た。なぜ私たちがこのような不当な暴行を受けねばならないのかという怒りで涙があふれて仕方なかつた。この時から私の決意は変わつた。ロックが解け、この闘争が終わるまでは絶対に組合を離れない。いや、あるいはすっと社にとどまり……行方を見とどければ気がすまない……（『闘う報知』から文化分掌上記者）

四五年五月二七日。この日を忘れる報知の労働者はいないだろう。いつものように、就労闘争をやろうと玄関階段にピケを張ろうとしたとたん、暴力ガードマンは襲いかかった。戦闘服に身を固めた彼らは、スクランムを組んで無抵抗の組合員にたいして、殴る、突く、蹴る。警棒

のようなもので頭を割られてうずくまるものを、なお踏み倒す。

「警官！ 現行犯じゃないか、逮捕してくれ！」

だが、無表情に動こうともしない制服・私服の警官たち。集まつた一二〇〇人の労働者・市民が目撃した。道路にまで押し出された組合員は、いつたん近くの平河天神境内に集合した。

「オイ、みんな！ 玄関にもどろう！ あいつら暴力団を叩き出そう！」だれかが叫んだ。

「よし、行こう！」即座に応じる声があつた。

「待ってくれ！」闘争本部員が制止した。

「いまもどつたらあいつらの思つてつぽだ。機動隊が入つて組合が暴力をふるつた」とオレたちがパクられるぞ。いま見えてきたばかりじゃないか」そうかも知れない、しかし……。くやし涙があふれた。即日入院の重傷者が一人、軽

傷は十数人にのぼつた。

東京のどまんなか、夕闇にまぎれての凶行、黙認する警察官……。労働者は、大きな「黒い敵」の姿をじかに見た。六月五日には、交通警官が張つたピケットに就労闘争を妨害された。

七月一七日には、肩がぶつかつたといふ理由で、若い組合員が一人、公安刑事に連行されそうになつた。国民に眞実を伝えるべき新聞のテンペングが、読売新聞資本や岡本武雄氏が、暴力で社内世論を抑え込もうとする、それに警察までが加担した。これを日本中に知らせたくないのか。この日、報知の労働者はそう決意した。

暗い圧力が見えてきた

6・17 「シゴキ受けて死ぬ、退会前、拓大空手同好会員」(『報知新聞』七面二段見出し)

安生君の死をきっかけに、拓大では学園の民

主化運動が起つた。一人の青年を殺した原因は、学内の民主主義不在にある。一般紙は大きく報道し、世論は拓大当局（中曾根康弘総長）を糾弾した。このとき、『報知新聞』は、運動部のシゴキ事件、という角度からしかこの問題を取り上げなかつた。そのはずである。報知新聞社が雇い入れている暴力ガードマンの、関係者、こそ、民主主義を否定する殺人者たちだつたからだ。拓大の一般学生たちは報知の暴力ガードマンの写真を見て「学内にしおちゅう見かける顔だ」と証言した。会社に身を売つた当時の記者たちは、九〇万人の読者に、問題の本質を語ろうとしなかつた。ジャーナリストは一体何者だろう——深刻な反省から、闘争へのエネルギーがわいた。

6・28 ……問題は安生君死亡事件を起とした「拓忍会」や、それとともに、拓大派、と一般学生から、恐れられている「銃剣道愛好会」や

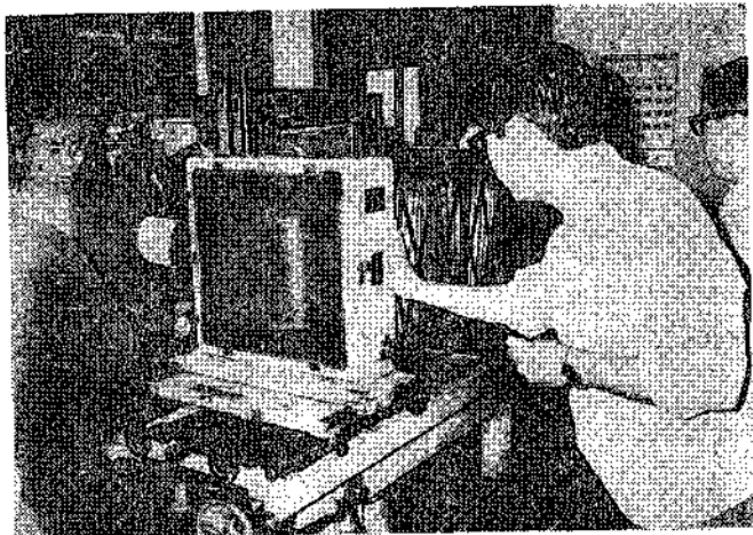
「拓忍会」その他の暴力的サークルが、麗澤会の末端につらなっていること。これらは、おもに、部くずれの学生でつくられているといふが外部の先輩や右翼組織と関係があることが指摘されている。『関東車』と呼ばれ、一昨年の十一月日大芸術学部になぐりこんだり、ことし五月、報知新聞のスト破りに雇われた「特別防衛保障会社」はその一つ。飯島勇社長や恩慈宗武専務は、拓大OBで、東京中央区にある同事務所には、「拓大学友会中央支部」も同居。日大芸術学部事件では、逮捕された『関東車』の中には拓大生が何人かいたが、スト破りの時には後輩がかき集められるという。……（朝日新聞、四五五年五月二八日）

これを読んだ報知の労働者は喜んだ。初めて報知争議の「眞実」の一部が新聞にのつた、といふのである。それまでも、新聞が報知争議について全然書かなかつたわけではない。ただ、他産業の争議紹介にくらべれば、ホンの申し訳

ていどの一級ベタ記事扱いであった。四四年のストライキ報道が、新聞・週刊誌とともににぎにぎしかつたのにくらべれば、組合員がハテと首をかしげるのは当然だつたろう。しかも、『眞実』には触れてない、としか受け取れない記事だつた。『同業の仁義』なのかも知れない。『圧力がかかった』とはつきりいつた週刊誌の記者もいた。『朝日ジャーナル』のように堂々と『眞実』の一端を書いた所もあつた。報知新聞社から告訴され、係争中である。『マスコミ界の内幕とその姿勢について、勉強になりました』とK記者はいう。『眞実』を報道することのたいせつさを学んだのだ。

かう仲間がいっぱいいることに気づくと同時に、『敵』の『仲間』も少なからずいることが見えてきた。読売・報知資本——マスコミ資本——大資本と結んだ線の延長に自民党政の姿があり、警察まで『協力』させて弾圧するそれらの勢力は労働者の要求と相反する要求を持つているという事実が見えてきたのである。それは労働者が、市民が、最大多数の最大幸福という民主主義の目標に向かつて、人間としての要求を満たそうとすることを認めまいとする『敵』だった。

「報知争議は、日米安保条約下で政府自民党と独占資本がマスコミを意のままに従えようとして起こされたものであり、読売新聞資本が、植民地としての報知新聞を確保するためには、人間性を拒否することから始まつたはずの報知争議。だが、たたかってみると、世の中にたた



正々堂々と社内に入り「板差押え」

る。そういうことではないですか』報知労働者がオルグ先でよくいわれた言葉だ。初めは多くのものがとまどつた。が、やがてほとんどのものがその意味を理解した。たたかってみて知つた。どちらかといえば取つつきにくい表現と、自分の目で見た現実との間の落差が埋まつていったのだ。敵の正体わかつた、とみんな思つた。これまで気づかなかつたことを恥じ入るほど大きな、わかつてみると身ぶるいせざるを得ないほど強大な、そして許すべからざる敵だつた。

大威張りで会社に入った

「岡本が憎い、暴力団がいけない」それはもちろんだが、もつと大きな敵がいる。二ヶ月間「良心」を守つてきた。何にたいして守つてきたのか、明らかになりつつあった。そんなころの六月二三日、「二度と足を踏み入れさせ

ない」と岡本武雄氏が豪語していた、ロックア
ウト中の報知新聞社内に、三〇人の労働者が正面玄関から堂々と入った。暴力ガードマンも手を出せなかつた。東京地裁の「仮差押え」執行だつた。

四四年冬のボーナス、ロックアウト中の五月分賃金、計二二〇〇万円の賃金債権が報知印刷労組にあることを、裁判所が認めて、会社の財産を仮に差押えたのである。裁判所がロックアウトの不当性を認め、オレたちは、正しかつた。そしてそのうえで社内に入れるんだ。玄関前は報知の労働者でいっぱいになつた。みんなハチ切れそうな笑顔だつた。

「執行補佐」として三〇人が入つた社内の情景は正反対だつた。会社側は驚き、狼狽し、おびえた。蒼白になつた岡本武雄氏は「なぜ事前に知らせなかつたんだ」とたずねて、裁判所執行官の失笑を貰つた。「差押えを事前通告した

ら、財産を隠匿される恐れがあります」三〇人が爆笑した。意氣ようようと社内の物件に差押えの札を貼つて歩いた。

見慣れた大組台やローリングに貼りながら、こうすることがオレたちの当然の権利なのだ、とみんな思つた。勝利感が胸を満たした。職場では組合脱落者が背を向けて仕事に没頭していく。その背中に「裏切りの重み」が見えた。

輪転工のTさんは、仮差押え執行官のすぐ後について歩いた。「補佐」三〇人の先頭だ。歩くというより踊るようにはずんでいた。差押え証を機械や道具にべたべた貼つて歩いた。Tさんの動作は普段どおり威勢がいい。三階の経理を出てから活版部、製版部、そして二階の鋳造室へ。それから一階へ。一階の印刷部のなかを抜けたとき三〇人の先頭からTさんの姿は消えていた。

三台連結三セット、二台二セットの輪転機の

群れの第三セットの間にTさんはいた。鉛版のセーバーを差押えてぶらりとやつてきた同じ輪転工のSさんが見つけた。始動ボタンの近くに手をかけたTさんは、直徑約三五センチの版胴（輪転機の紙面を直接刷る円筒）をじっと見つめていた。その表情を見たSさんは話しかけなかつた。気持ちわかるよ、ここはオレたちの職場だもんなん。

広い空間に所狭しとならんだ巨大な輪転機の群れは沈黙していた。油とインクで黒光りして、所々カバー部分の塗装がはげている。Sさんは目の前の版胴に、まだインクののりきらなり『報知新聞』の紙面が見えるような気がした。肌に感じられぬミスチング（インクのはこり）に顔を黒く塗られている思いがした。

Tさんがいった。「こいつはひどいロートルなんだよ。前にはオレたちがやらなきや、紙が切れて使いものにならなかつた。今じゃ臨時の

連中もなんとかまわしているらしい……」何年もの間、このバカでかくて古ぼけている輪転機と格闘してきた毎日を、Sさんも思い出した。家庭にいる時間より社内の方が長かつた。とりわけ輪転機とのつきあいが多かつた。「そのうちこいつをブンブンまわすんだ」ブンブンまわした轟音を耳底で聞きながら二人は黙つて差押え部隊に戻つていつた。ウキウキした足どりが決意のこもつた足どりに変わつていた。

この日、報知へ向けてデモ行進していた千代田区労協やマスコミなど支援・共闘してきた仲間たちも、この知らせを聞いてどよめいた。「やつた！」という気分だ。内外の労働者に自信を持たせた仮差押を執行。暴力ロックアウトから新しい方向へと、局面を変えるキッカケとなつた。積み重ねてきたたたかいの到達点としての法廷勝利であつた。

仲間を見つけ、敵を知り、会社と脱落者の動搖を見て報知の労働者の確信は深まつた。展望が明るくなつた。勝てる、この確信に世論の支持も大きく広がりつつあつた。それが民主主義だ、という思いであつた。

激減する脱落者

月島移転のころから、組合脱落者は激減した。脱落者の数を報知新聞労組東京支部の場合で見ると、ロックアウトと同時に一〇九人、京橋時代に三九人、月島時代に七人、一二月から被解雇者以外全員就労するまでに八人、合計一六三人になる。脱落前は四二四人の組合員が二四四人に減つた。脱落者によって作られた第二組合「新報知新聞労働組合」は、一四〇人である。残りの数は、中立、と退社者だ。

二か月の京橋時代に三九人脱落したものが、五か月の月島時代には、わずか七人。月島基地

の生活が、いかに報知の労働者を支えていたか、この数字でもうかがい知れる。いわゆる動搖が、ほとんど見られなくなつたのである。

4 「月島はみんなの会社だ」

これが基地です

暑い！ 八月の太陽はトタン屋根をシリシリこがした。「オイ、早くやれよ」上半身裸の自動車連絡班が、熱気のたまつた自動車に乗りこむ。「ヒヤーあつい」と思わず飛びだす。「わかつてよ、あついのは。もたもたしてると、連中きちゃうぞ」「そうか……。イエス・サー！」勇を鼓して熱氣にもぐりこみ、スターターのスイッチをひねる。一台、また一台、月島基地の空き地に置かれた二〇台余りの自動車がへつっていく。

新聞労連のオルグ団が月島へくると聞いたとき、自動車デスクは空き地に駐車しているクルマの群れを見つめた。多すぎる。また、殿サマ用車を移動させていたのだ。月島のあちらこちらの、駐車可能な路地にクルマは分散した。残つたのは一〇台たらず。「これでいい」デスクは胸をなでおろした。これなら争議団らしいだらう。だが、悪事は必ず露見するものだ。

オルグ団が到着した。「すごいクルマの数ですね。それに駐車場もある争議団なん……」デスクはびっくり、ふり返った。なんと！ 夕闇せまりそよ風も立ちはじめた空き地には昼間よりもたくさんのクルマが駐車していた。「そうか！」と舌打ちした。外出していた他の自家用車組が帰つてきていたのである。しかし、オルグ団は、自家用車の多さを責めてはいなかつた。驚いていたのだ。見るものすべてに驚いて

いた。クルマの数、基地の大きさ、組合員の明るさ……。

今まで東京に少なくなった都電通り、終点月島から越中島へ向かって、二〇〇メートルほど、最初の交差点を右に曲がる。五〇メートルといった左側の角地が月島基地だ。一〇〇〇平方メートルの土地の奥に建て坪三三〇平方メートルのプレハブ。三棟のうち一棟は二階建てだ。二〇台余り駐車しているクルマをよけながら、広い空き地を横ぎって、プレハブの横腹に二つ開いている出入り口の右の方を抜けると、三棟の内部がひとめで見える。全然仕切りがないのだ。これなら五〇〇人の集会もできる。みんな立たして詰めこめば一〇〇〇人だつて入る、とわかる。

入つてすぐ右側に「パンフ・オルグ・共闘班」「マガジン700班」「アルバイト対策班」のデスクがある。たえず人が動いているいそがしさ……。

げな所だ。この棟の左側には「自動車連絡班」の待機所と、臨労組の本部デスクが見える。ヒゲをはやした学生が、難しい本を読んでいたりする。

横腹をつけ合つた感じの向こう棟は、右から、内職の仕事場、婦人部のたまり、編集デスクとガリ切り作業場、隣合つて「パネル・サービス」のデスク、つづいて小さい机に電話が三台、左の奥の一角が、報知新聞、報知印刷の闘争本部デスク、そのまた奥に財政部と法対部のデスクだ。いかめしい金庫がいくつもならんで、なんとはなしに「宝庫」のような感じがする。向こう棟の出入り口を出るとすぐ水道があつてその左手に男女の簡易水洗トイレもある。

さて、二階建ての棟は本部の一角の手前、さつきの入り口から見て左の奥だ。月島基地にきたものなら、だれでも一度はお世話になるレストラン「ロック」がある。月島に移つてからメ

ニニーが増えて喫茶から昇格したのだ。このレストラン、同時に婦人部とカメラマンのたまりでもある。左手に「女子更衣室」と「暗室」があるからだ。ここを突つ切り、いたん勝手口をくぐつて非常バシゴのようなものを昇つっていくとタタミ二四枚敷きつめた会議室兼宿直室に行ける。寝具と灰皿とマンガが、いつも置いてある。

こんな所で約五ヶ月間、五〇〇人近い労働者が、のびのびとたたかつた。「殿サマ争議」といわれるゆえんである。

基地——大阪でがんばる仲間にとつては、毎放映のスタジオだ。写真の暗室用に提供してもらつたBスタジオをのぞけば、冷房装置はむろん、換気装置もない。電話もひけなかつた。それでも大阪の仲間には、ふるさとである。大阪はキタの中心地、堂島にある毎日会館のなかに毎放映はあつた。朝日、毎日、サンケイと新

聞社が集まっているマスコミの町である。堂島地下街は梅田の大坂駅までつながっている。雨に濡れず、駅まで行けた。夜、帰宅の途中、地下街でマスコミの仲間のだれかに会う。「がんばってや」「おおきに」この二つの言葉が、心のこもったあいさつだった。

月島基地のある日

- 7・00 月島基地はまだ眠っている。ブレハブが空き地に新鮮な影を落とす。『夜の住人。』トラックが三台とまっている。アルバイト先の運送会社のものだ。車体をよけて野良犬が通る。かつこうの散歩道か。
- 8・00 4トントラックのエンジンがかかる。窓を振り動かす響きに、二階の臨労組の学生がハネ起きる。時間だ、すぐそばのマンション工事現場に走る。夏の朝の『敵』は暑さより眠気だった。

9・00 都内各地で多くのアルバイト組が、現地到着しているだろう。法対部メンバーが一人、二人と入ってくる。書類を両腕いっぱいにかかえて、また出していく。負けを知らぬ法対部、地方裁判所へ行くのだ。

- 10・00 みんなドヒキドヒキやつてくる。基地の窓がいっせいに開かれる。床一面に打ち水されるころ、基地は完全に目を覚ます。ゴザの上に車座の五、六人が、クリスマス電飾作りを始める。内職だ。
- 11・00 遊軍、オルダ、行商部隊が、着いてすぐ出発した。きょう炎天下、『良心の歴史……』を売り、『マガジン700』を押しつけ、デモや就労闘争への動員要請をして歩くことだろう。宣伝カーも出発した。婦人班が二台に一人ずつ乗りこむ。残りは、『闘う報知』郵送のアテ名書きと内職のレース編みだ。

12・00 カレーの香りが、基地いっぱいに流れる。嗅ぎつけたかのように、工事現場の腹っぺらしが飛びこんでくる。メシが多少堅くても、空腹は最度のコツクだ。みんなガツガツ

くい、愛してるよ、などという。「ロック」の美人コツクは喜ぶ。二階で合同闘争本部会が始まった。

13・00 オルグがやってくる。八〇万円のカンパ持参と聞いて大歓声。現金なのだ。多額のカンパでもなければ慣れっこになつていい。それでも八〇人の看護婦来訪はみんな忘れていない。「あのミニ、いかしてたなあ」。本部デスクで週刊誌の記者が取材している。

14・00 半パンツ、長身のメガネがドタドタと走る。電話だ。「ハイ報知です。ハイ、ハイ、どうもお世話になります。二五〇〇円で三人ですか。ハイ、必ず。ほんとうにありがとうございました」受話器をにぎつて頭を下げ

る。社の編集局ではやらなかつたことだ。だがすぐ地がでた。「やつたぜベイビー！ 二五〇〇円三人口！」アルバイト対策委員である。

15・00 遊軍が一人帰つてくる。顔に血の気がない。「どうしたんだ」アイスクリームをほおばつていた共闘班デスクが立ち上がる。「調子が悪いんだ。すまないけど帰るよ。きょうまわつた組合は全部夏休み。他の連中は戸別ビラ入れに合流するそうだ」。タクシーで家へ帰る。

16・00 二階で婦人集会。公害と労働組合、なんて話をしている。書記長らは会社との事務折衝に出かけていった。奥のデスクで経理マンが生活資金の計算をしている。この暑さの中、ファイヤーハンマーをぬがぬ、数少ない一人だ。カネについて。解決は近いが、アルバイトが

んはろう、ということだ。基地の小ネコと遊んでいるものもいる。四〇分位で終わると、整理や採字などの闘争委員が分会討議の日取りを相談する。

18・00 清水谷公園へ集合。デモと就労闘争だ。夏枯れのはずが参加者八〇〇。アルバイト先からかけつけた報知の労働者はホロリとする。社の前にくると、暴力ガードマンの姿が見えない。社内に隠れているのだ。世論の力は大きいと感心する。

19・00 基地の空き地からクルマを追い出して盆踊り。読売新聞など銀座周辺の労組主催だ。月島の夏を、ユカタ姿の若い男女が歌い、踊った。町内の人も踊りの輪に入った。子どもたちが夜店のヤキトリをにぎってかけまわった。

20・00 アルバイト先からでた一週間分の賃金を納入にきた。組合のアイヒマン、が情け

容赦もなく、搾取した。法対部員が仕事を終えて家路に向かう。「こんどの地裁もイタダキだぜ」が、帰りのあいさつだ。『マガジン700』の編集者たちは夢中、顔もあげずに「どうも！」

21・00 緑の植え込みがいっぱいの路地を抜けで、下町情緒を飲んできた酔っぱらいたちが帰ってくる。ウイスキー一本くらいのみやげは忘れない。残っていた本部員、専門班員、泊り番がさっそく、イタダキまあーす。もう、本部デスクと「ロック」の灯りしかついていない。

22・00 「ご苦労さん、お先に」といわれたものしか残っていない。暗く、大きく、静かな基地。泊り番たちの基石の音、『闘う報知』を原紙に切る音……。

23・00 泊り番だけになる。有楽町駅まで歩いて三〇分、電車がなくなるのだ。電話が鳴

る。ロレツのまわらない冗談が聞こえる。だれかの家で、交流しているらしい。功績高い電話の団結、も良し悪しだ。

24：00 泊り番が夜食。帰省した学生が持つてきたナメコでミソおじや。戸締りしてから、しまってあつた一升ビンを出して、人生談議。学生も加わる。どんなに長くてもかまわない。朝九時までの不寝番なのだ。

「腰を落ちつけて、笑ってたたかおう」新聞

労連のいい方だ。確かにロックアウト二か月を経た頃、ほとんどの報知労働者がそうなつていた。月島のプレハブの床を初めて踏んだとき、中年のある記者がいった。「ここで年をこすんじや、寒くてたまらねえだろうなあ」腰がすわってきたのである。となると当然、すでに日常生活となつていた闘争の質的な向上が気にかかる。脱落者はほとんどなくなつた。あとは世論

の支持を得て、いくことが争議の勝負を決めるポイントの一つであるとすれば、もっと報知争議を世間に広めるべきだ。パンフレット販売やオルグ・宣伝活動に拍車がかかった。同時に、長期闘争での弱点はゼニ、アルバイト態勢をもつと強化しよう、ということにもなつた。これはこれまでの活動に加えて、月島時代のメイン・テーマとなつた。

『良心の歴史……』ついに10万部

六月一三日に初版三万部の発売を開始した、報知争議を訴えるパンフレット『良心の歴史をつくりたい』は、月島移転までに五万部さばけた。七月、八月の二か月でさらに五万部、合計一〇万部を三か月間に売り切つた。争議組合のパンフレットとしては驚異的な記録、と発行元の労働旬報社はいつている。

従来の記録を塗り替えた原動力は、報知争議

そのものだつたろう。こんなことが許される

か、だれでもそう思うべきことだつた。そので
きどとを街頭ピラで知つて応援し始めた人が多
かつた。約半年間に三〇〇万枚ほどまかれた大
量教宣のピラが、報知争議を広めた。報知の労
働者はもちろん、全国の新聞労働者が手伝つ
た。妻子や友人が手伝つた。ミニコミの威力も
捨てたもんじやない。パンフレットの売れ行き
が示した。「報知？ ああ知つてますよ。パン
フ販売に全面協力しましょう」ほとんど組合
書記局で聞いた言葉だ。

だが、もちろんたたかいの広がりだけで、売
れるわけではない。報知系七〇〇人近い労働者
が自信を持つて、全國に売り歩いた力は大き
い。みんな印刷されてすぐ読んだ。深夜、寝床
で涙を流しながら読んだものもいた。これだ、
オレたちの闘争がここに書いてある。このパン
フを読んでもらえば、報知争議がわかつてもら

える。この確信が支えになつた。

発売四日後の六月一七日夜、報知新聞労組を
脱退し、第二組合の書記長になつていたV記者
が、ロックをまぬかれて社内でたたかいつづけ
る臨労組連絡員分会の組合員を呼びよせた。
「連絡さん、パンフを、一〇〇〇円分売つてくれ」八冊のパンフを受け取つて四〇円のおつり
をポケットに入れたV書記長は、いきなりパン
フを破り始めた。一冊、二冊……全部破り捨て
た。そして「データラメを書くなど組合にいって
くれ」と棄てゼリフ。

この小さな事件は、報知の労働者の確信を深
めた。仲間を裏切り、会社に加担したVさんは
自らの行為を正当化しつづけてきたことだろ
う。だがその心の片隅にも良心はあるだろう。
それをこの本がうずかせた、そう理解できたの
である。六月以降、全國に散ったオルケのカバ
ンには、いつも、『良心……』があつた。この

『良心……』は、たくさんの人々と共鳴し合つた。

七月のある日、一人の青年が月島基地にやつてきた。足立区の工場に勤めているという、やせぎすの青年は、やつと思い切つたようにして、白い小さな包みを闘争本部のデスクにおいてた。「あの、ばあちゃんがきかないもんですから……」開かれた白い包みには一〇〇円玉が一個入っていた。青年は語つた。

「ばあちゃんは、組合っていうと、ぼくには遠慮してはつきりいわないけど、こわいもののようと思つていたんです。それが、どうしたんだか、ぼくが持ち帰つた報知のパンフレットを読んだんですね。この数日、ぼくが会社に出たあと、駅前に行って報知の人を待つていたらしいんです。あの本には、毎日のように駅でビラを入れをしてるって書いてあったもんだから、駅前にいけば報知の人会えるって思つたらしく

て、会つたら一〇〇円渡して励まそうと……。でも会えなかつたもんだから、お前持つていつて渡せつてわけなんです。どうも、年寄りのことだから、笑わないで受け取つてください」たつた一つの一〇〇円玉を見つめて、報知の労働者は、「ありがとう。ほんとうにありがとう」としかいえなかつた。何かいおうとすれば、声をあげて泣き出してしまいそうだつたらだ。うれしい、カネなんかいい、その気持ちがほしかつたんだ……。この二ヶ月あまり、苦しくなんかない、と自分にいい聞かせてきた。ばあちゃん、ありがとう、ほんとうはとつても苦しかつたんだ、そういういたかつた。

たとえばあなたがたのよう

報知新聞労働組合 報知印刷労働組合の皆さん

へ

私は児童福祉施設に働く保母ですが、先日の6

・23 中央大集会に参加して日頃から興味のあった報知新聞の闘いについての記録『良心の歴史をつくりたい』を手にしました。

はじめてページを開いたのは買物にいく電車の中でしたが、人間性のあふれる、又強い闘う決意に感動し涙があふれてくるのをどうしようもなかつたのでした。

まだ私が高校生の頃、姉が、『サンケイ残酷物語』というパンフレットを持ってきてくれたのです。私は信じられない気持のままそれを読みいつの間にかそんなことは忘れていました。しかし、今は、私も労働者として、仲間のたたかいをみつめ、感動し、又、政府や資本家に対し燃えるような怒りを感じることができるようになりました。

私たちの職場でも今、組合を公然化するため、がんばっています。

福祉施設、その近代的な意義に反して、まったく封建的な経営がなされており、福祉の対象者もそこで働く者も人間として生きる、人間らしく生

きる権利をうばわれ、希望も何もない生活を強制されています。

人を殺すための軍事費には、莫大な予算をくむが、人間が人間として最低生きるために、わずかの予算しか出しません。そんな中で私たちは子供のしあわせと私たちの権利を守ることは、同じ一本の糸につながっていることを理解し、子供が子供らしく又、人間らしく生きるために私たちは自分がしあわせでなければならぬと考えます。

人間らしく生きていくことなくして、なんで人間を育てていくことができるでしょうか？

私たちはとくすれば毎日毎日変わりばえのしない暗い職場にて展望をなくし、仲間が信じられなくなったりします。けれど、日本中の仲間がたとえばあなたがたのように、信じあって敵に向かい、たたかっていることを知る時、やっぱり仲間を信じていかなければ仲間も自分を信じてくれないことに気づくのです。

福祉施設の実態は世間にはほんの一端しか知られていないし、知っているとしてもかなり前近代的な感覚である場合が多いのです。けれどそういうなかでも、いえ、そういうなかだからこそ、ひとつ又ひとつとたたかいの輪ができるのです。日本中にたたかう仲間、人間らしく生きたいと叫ぶ仲間のいることに確信をもち、これからもがんばっていきます。あなたがたのたたかいがどんなに私を感動させたか十分表現できないのが残念です。

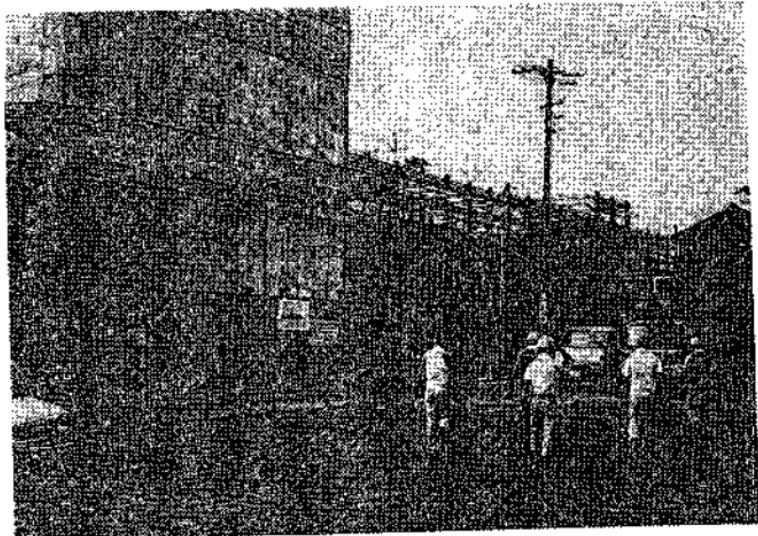
千円同封しますので、何かのお役に立てて下さい。

皆さんの御健闘を心からお祈りします。

一九七〇・六・二九 N子

こんな手紙が全国から何百通となく届いた。
一〇万部が一〇万人以上の心に飛び込み、一〇万以上のエピソードを作ったに違いない。報知争議は広がり、良心は響き合い、たたかいは見えない糸で結ばれ、互いに弱い心を支えあつ

た。パンフレットの反響を『闘う報知』は夏の間中、連日のように紙面にのせた。たたかいを訴え、パンフレットを売り、良心とは何かなどと議論をふつかけて歩いたのは月島基地から散つていったオルグたちだ。東京からは北海道、東北、北陸、中部、北海道、関東一帯。大阪からは九州、四国、山陰、山陽、近畿一帯。おめず憶せず、どこにも顔を出した。総評、中立労連、同盟、新産別など、既成の労働組合組織の違いも意に介さなかつた。社会党にも共産党にも、民社党にも公明党にも、自民党にも飛び込んでいった。オレたちの訴えを聞いてください。わかつてください。オルグたちは、ハダカの自分を隠さず、自分の言葉で訴えつけた。どんな主義主張を持つと、自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の頭で考える人々は受け入れてくれた。そこに、オルグは、人間を見つけた。



朝早く、基地を作る「土方組」

……七月六日。青森市内のパンフ販売に東奥日報前副書記長の秋田氏が、夜勤にもかかわらず三時からつきあってくれた。ボクらと一緒に歩きながら秋田氏「これでボクも報知闘争の一部に参加できましたよ。よかったです」なにげなく言われた言葉だったけれど、胸の底に残っていつまでも忘れることができない尊い言葉だった。……（『闘う報知』四五年七月一七日）

切りつめるよりかせこう

「組合のアイヒマン」と組合員にあだ名されたのはアルバイト対策委員たちであった。汗水流して得た賃金を二倍もなく全額取り上げてしまうことになりする恨みだろう。しかし、「アル対」に造反したものはいなかつた。みんなつらいアルバイトをやってのけた。七月から報知印刷、臨労組、八月から報知新聞の各労組が本格的なアルバイトに入った。

五、六月と闘争に全精力を集中した結果、六

月二三日には例の「仮差押え命令」を得て闘争勝利の展望が明らかになって、長期になつてもたたかいぬこうという決意が組合員の胸のなかにどつしり腰をすえた。そのために自主財政を確立しようということになった。いつまでも借金ばかりしてては会社の「兵糧せめ」に対抗できない、というのである。

七〇〇人という大世帯を支える財政の主要なものは生活費だ。労働金庫からの借金と生活費切りつめでやつてきた。最後には二億円も借り出せたのは、労働組合が社会的勢力として確かに位置を占め得る時代になつてからだらう。長い間の労働運動の成果である。この事実こそ、会社があらゆる手段で切りくずそうとした七〇〇人の団結維持を、生活面から可能にした。カネのために、心を売つたり戦列を離れたりするものの出ないようにする財政計画が可能となつた。守るべきものを守りぬくために七〇

〇人の生活を守り團結を守るうち、七〇〇人の気持ちは前向きになつた。自分たちの生活費は自分でかせぎ出すべきだという、当たり前のことに気がつくようになつていった。

そうしてみると財政の弱点を克服することは重要なたたかいの一つとわかつた。団体交渉が再開された七月月中旬ごろから報知系労組全体会が、月島や毎放映基地を中心に、資金かせぎプラス闘争の日常に切り替わつていった。五分の三が「出かせぎ」、残りが「闘争専科」。だが集会やデモ、就労闘争には「出かせぎ」も全員参加し、内職には「闘争専科」もヒマを見つけて加わつた。

「アルバイトや内職なんてみじめなことをするくらいなら会社に帰る」というものは、もうこの時期にはいなくなつていた。そのかわり、切りつめるよりかせぎまくろう、という図太い発想がアルバイト作戦の基本にすわつた。

これだけたくさんの人間がいるんだからできな
いはずがない、というわけである。もちろん、
現実は甘いものではなかつたが、報知労働者は
逃げなかつた。

事、温室修理、ホテルの客室係や飯炊き……。
数えあげればきりがない。少數の恵まれたもの
が本来の「仕事」、発送や編集の仕事にありつ
いた。

ふとつちょの客室係

運動分会のアルバイト・第五弾。は、Iさんと
ボクのコンビによるホテルの客室係。八月二十八
日から一ヶ月の約束で銀座下田のホテルで働いてい
る。新聞の求人広告を見て、履歴書も持たずに面
接場にとび込んでいったのだが、人事担当のAさ
んは「ああ、報知の人たちですね。同系の白馬や
下田のホテルにもお宅の組合員が行っているよう
ですね。みんなよくやつてくれていますよ。報知
の人なら安心です。大変ですが、しっかり働いて
下さい」と言って、気持ちよく採用を決定してくれた。Tホテルにおける報知労組員の活躍ぶりが
高く評価されているようだ。

金ボタン、ツメえりの純白の給仕服に、サイド

組版、鉛版、輪転と、いわゆる「仕事」をする
ことができた。報知新聞の労働者は、ほとんど
そうはいかなかつた。大部分の編集労働者、短
期間ではつぶしがきかずまつたくの「アルバイト」
をやるしかなかつたのである。海の家の監
視員、区役所の事務、デパート展示物の飾り付
け、工事現場の土工、コーラ会社の配達、運送
会社の下働き、レストランのウエーティーや皿洗
い、芝居の小道具係、映画ロケの裏方さん、コ
ンペアで流される書籍の梱包、温泉旅館の番
頭、競輪場の駐車係、狂犬病の予防注射受け付
け、白アリ退治部隊、ベンキ塗り、商家の大掃
除手伝い、プレハブ建築の大工、水道配管工

・リボンのついた黒ズボン。これが男子客室係のユニホーム。太めの二人は、L.S.I.J.判の制服を着た。「三十男がボーイのかうこうじゃ……」と、はじめのうちはどうもテレくさかったが、まわりの人気がそろって制服に身を包んでいる職場にはいると、そんな恥ずかしさはすぐに吹きとんでしまったから不思議だ。

勤務時間は午前九時から午後六時まで。ちょうどラッシュ・アワーにぶつかって慣れないスシ詰め電車に乗ってモミクチャにされるのにはいさかまいだが、これも勤めのうちとあきらめてしまった。

客室係というと聞こえがいいが、実は客室そのものを担当するのではなく、客室部分の三階から十階までのエレベーター前のロビーと廊下全城の清掃が私たちに与えられた仕事だ。

アメリカ製の大型掃除機でジユウタンを掃除するのと、カベの下部のハメ板をゾウキンがけするわけだが、腰を折って前かがみになるといったム

リな体勢にならなければならないために、腰、肩、腕、指先までが痛んで、からだがじむまでフレーフーいった。冷房完備なのに汗もダラダラ。しかし、絶好の「減量運動」になつた。

客室係は三人のボーイのほかは女性ばかり。私たちが労働争議でアルバイトをしているのだという苦しい事情を知っているせいもあって、大変親切にしてくれる。「おそらくまでご苦労さん」「疲れないうちに休憩しなさいよ」などと、各階のチーフ・メードさんが絶えず気をくばってくれ、ときどきコーヒーや茶菓子のサービスまでしてくれるのでありがたい。

ふん団氣のよい職場で、のびのびとマイ・ペースで働いている二人は「争議が終わって報知へもどつても、またここへアルバイトをしにやって来たいね」と冗談を言い合つて、毎日廊下掃除に精を出している。

日給はたいした額ではなく、アル対のみなさんは申しわけないが、労働の喜びをしばらくぶり

に味わっただけでも、今回のアルバイトはとても有意義だったと思っている。（運動分会・I記者）

（I記者）

仕事を探すのはアル対のメンバー。朝、家で目を覚ますと新聞広告にかじりついた。頼んでおいた知人から電話がかからないかと耳をすませた。一〇時、月島に着くとすぐ会議。いつでも、「コネってエのは少ないもんだ」と慨嘆した。だからいきおい新聞の案内広告に頼る。しかし、電話をかけてみると、三行。に書かれていない条件があつたりして、『破談』が多い。まとまつても日給が安い。そのうち色々なカラクリを発見した。案内広告に毎日のるのは「人入れ稼業」が多い。「労働者供給違反じゃないか」などといいながら、問い合わせていろうち、中間搾取の実態がわかつた。たとえば、あるガードマン会社はこうだ。新聞広告に日給一七〇〇円ぐらいの条件を出す。人が集まる。日給五〇

〇〇円ぐらいで、依頼をとっていた会社の警備に出す。その差額は、広告費用と制服代を引けば、丸々もうけだ。そんなカラクリを「ガードマンたちが取材してきた」「ひでえじやねえか」。さっそく「アル対」は広告主と「団交」する。このケースでは、日給二五〇〇円まで出させた。八〇〇円アップ。「さすがアイヒマン！」アル対へのたつたひとつのはめ言葉である。こんな例はいくらもあった。

これは商売になるぜ

これではゼニにならない、と、アイヒマン。は考えた。八月下旬、事業分会と写真分会が主力となつて「パネル・サービス」ができた。写真を撮つて引きのばし板にはつて売る、会社である。写真分会が団地やスイミング・クラブの子どもたちなどを相手にやつていた。商売を。事業にしたものだ。まずゴルフに目をつ

けた。カネのある、気違いが多いからだ。

「一流カメラマンが、あなたのショットをとらえます」とベテラン事業部員がゴルフ場、練習場をまわった。みごとにあたった。もうかつた。半月あまりで、従業員一人一〇万円ぐらい売り上げた。「こりやあ、やめられない」と思つたとたん争議が終わってしまった。

切りつめるより、かせごう。報知労働者の合言葉だった。いつも明るく、楽しくいこう——どの顔もいっていた。

大阪で、小城ようかんを売り歩いた行商部隊の話である。必要にせまられて中古車を買った。「ウワー、カッコイイ！ 高級車やないか」と喜んでよく見ると、バンパーは錆び、ボディーは傷だらけ、なには「墓場」、おまけにバックするとブレーキがよくきかない。三万円のクルマである。「まあ、ええやないか」と出動する。快調に走っているつもりでも最高時速

四〇キロ。「おい、もつと早く走れへんのか」「気にしない、気にしない」だが坂道にかかると気にしないわけにはいかない。それ！ 「走れ走れポンコツ車、ここで坂道上がらねば、オイラの生活ままならぬ……」と走れコー・タローの歌もでる……。このクルマ、あるとき交差点で接触事故を起こした。ボディーが少々傷ついたが、こちらも悪かつたらしい。引き分けで帰ってきた仲間に「なんだ、もうけそくなつて帰つてきたんか」ポンコツ車なればこそその話である。ロック解除後、チャッカリ六〇〇〇円で、処分した。

社内に「月島」を作ろう！

ある夜、月島に納金しにきた仲間がいった。「ねエ、オレたちだけで会社作ろうよ。場所もあるし、人もいる。カネはみんなで相談すりやいい。社長は選挙だ」

「社長が、選挙？ そんな会社あるもんかい！」

「いいじゃないか、オレたちならできる」……。
指にいっぱいタコを作った仲間とふざけながら「アル対」は思った。そうだ、オレたちならできるかも知れない。これだけの信頼があるんだから、これだけのアルバイトができるんだから。

月島の午後三時、近所のマンション工場現場に、「アル対」はお茶とタクアンを届けに行く。

まだむき出しのコンクリートの階段を、一段一段、注意深く昇っていく。手すりもない、作られていないカベに手をつとうとすれば真っさかさまだ。一二階、屋内とはいえ吹きさらしの仕事場に到着。歓声に迎えられて、ほおをなでる涼風が快い。車座になつてタクアンをかじる。朝八時からの重労働、疲れがでたのか口数が少ない。「だけどこわいよなあ、ここは、ち

よつと間違えたならアノ世だもんな。土方さんは偉いよ、平気でやつてる」見ると、どうみても土方サン、乙さんがいつていた。アル対は、江戸っ子を自称し、ガラッパチを自認する乙さんも、編集マンであつたことを、思いだした。ガラスなどない窓の外に、空と東京があつた。報知はどうちだろう。社内はどうなつているんだろう。ビルの群れを照らす夏の日射しが、心なしか弱まって見えた。もう九月。やっぱり乙さんは編集に帰らねばならない。オレだつて、そのためにはんぱってきたんじゃないか。そうだ、帰つて、必ず会社に帰つて、あそこに、月島を作ろう、月島で会社を作るんではなく、会社に月島を作ろう……。ほとばしり出た新しい決意——。身動きもしなかつた背に、乙さんの声が飛んだ。

「さあさあ、仕事だよ。アイヒマンは帰ん

5 激論しながら争議収拾

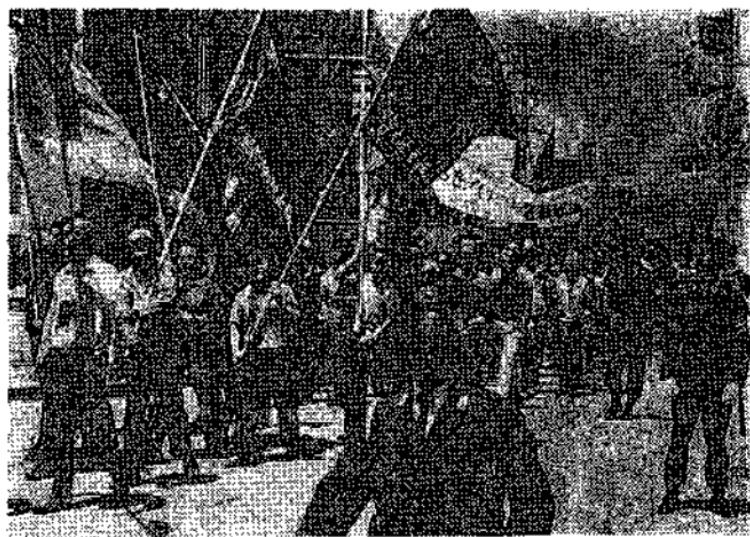
9・17に向かって漸つまる

九月一六日午後一一時一五分、報知新聞労組の闘争委員会。一週間ほどぶつ通しで徹夜団交をつづけてきた闘争本部が、争議の収拾を提案した。質問や意見がいくつか出されたあと、各闘争委員はいつもの通り所属の組合員にはかるため本部提案を持ち帰った。あい前後して報知印刷、報知印刷大阪両労組も收拾討議に入つた。

四四年末から九か月あまり、ロックアウト開始から五か月近くつづいてきた報知争議は、このとき、大きな分岐点を眼前にしていた。労使双方にとつて、このまま争議を継続するか、ここで一定の解決をはかるか、決断をすべきとき

であった。労働組合が長い、しんぼう強いたたかいの積み重ねで到達した分岐点であった。それが、本部の收拾提案だった。本部の決断に至るまでのたたかいの経過をふり返つてみよう。

四四年來、ストライキを軸にした職場の團結、内外への大量宣伝活動、広範囲な共闘の輪のなかで重要な武器となつた法廷闘争と、報知労働者のたたかいは着実に読売・岡本労政を包囲していった。その広がりは、四五年六月二三日、東京地裁の「仮差押え命令執行」によつて、具体的な到達点を示した。この法廷勝訴は、暴力ロックアウト、団体交渉拒否をつづけてきた会社の硬直した政策を転換させる突破口の役割を果たした。七〇年安保の日「6・23」にロックアウトの不当性が明らかになるというショッキングな敗訴は、読売・岡本労政にみず



最後の追い込みへ大阪の仲間もデモ

からの孤立化を認識させたようである。

七月に入つてすぐ「平和協定は精神的・道義的規定で、スト権放棄をせまるものではない」といって変えてきた。二週間前まで「単なるモラル協定ではない」といつづけてきた、その同じ口からである。七月一〇日に始まつたロックアウト仮処分裁判の会社側弁護団は、増強された。これまで読売新聞社の代理人としてしか姿を現わさなかつた経営法曹会議の事務局長、和田良一氏が会社側の法廷闘争の「ボス」に起用された。人数も増えた。「防備」を固めたのだ。「大量教宣こわくない」ともいわなくなつた。

七月一六日、会社から申し入れがあり、二一日、約八〇日ぶりに団体交渉が再開された。その後、なかなかスムーズに進まない団体交渉のなかでも、「平和協定」撤回、事前協議制の確認などがあつて基本争点は消滅していった。焦

点はむしろ処分問題やロックアウト中の賃金問題など、終戦処理事項に移つていった。

一方、6・23以降、報知労働者のたたかいの具体的な結果としてあらわれていた法廷闘争は、着実に前進していた。七月を過ぎ、報知三番のりが報知新聞労組の九月一七日という予定になつた。この日に会社側の証人岡本武雄氏と長谷川実雄氏が証言を終え、あとは判決待ちになるはずだった。「ロックアウトは不当、賃金を支払え」という会社側敗訴の命令が出される形勢はしだいに濃厚になつていつた。

ロックアウト不当となれば、組合主張の正しさが内外に浮きぼりされる。そうなれば読売新聞社、報知新聞社の言論機関としての立場はなくなる。そこまで追い込まれていることに気づいたとき、会社側は、その不当性が社会的に明らかになることを避けて命令の出される前に争

議解決をはかるか、たとえ敗訴してもその命令の非を主張して、組合つぶしの初志を貫徹するか、決断しなければならなくなつた。決断の最終的日限が九月一七日。だから、「9・17」は、団体交渉を煮つめていくべき終点としてのカベとなつた。その結果、まず、基本争点での譲歩となつたのである。

確信に満ちた選択

組合側も、そこまで追い込んで争議の主導権を握ったところで、やはり二者択一しなければならなかつた。ここで争議を收拾するか、窮地に立つ会社側をさらに追撃するか――。

前者は相当の妥協を覚悟しなければならなかつた。七〇〇人の団結によるたたかいの前進が基本争点での勝利をかちとつたものの、組合側の弱点もないわけではない。組織は分裂を許していた。過半数の人員を獲得したにもかかわらず

ず、新聞は発行されている。大世帯の団結であるだけに財政面の将来は予断を許さない。そしてによりも社外においては、報知新聞社内で進行中の「非民主化」の動きをくい止めることができなかつた。それらの弱点は、この時点での収拾が妥協なしに可能とはならない客観的背景を示していた。

後者は、より大きな勝利のためにより大きな犠牲を覚悟しなければならなかつた。ロックアウト裁判で勝訴すれば、賃金を得ながらの長期争議になり得る。そのかわり、会社がその不当性を押し隠すために新たな攻撃を仕掛けてくる可能性が大きい。大量解雇、偽装解散など理不尽な手段はまだ残されていた。現在の全般的労働情勢のもとで、弱点をかかえたままさらにはきな弾圧とたたかえば犠牲の増大は必至である。基本争点で主張を通したあと二つの道の一方を選択するさいの基本的な基準は「このうえ

は職場に帰つてたたかおう」という決意であった。争議を継続してかちとり得るものより、はあるかに大きい成果が得られるという判断である。読売・岡本労政とのたたかいが、いずれつづくものだとすれば、基本争点に勝利したいま、多少の譲歩をしても職場に入つて社内を変えていくたたかいに取り組むべきだ。

報知系労組指導部の決断は確信に満ちていた。各方面から報知争議に集まつていた争議経験豊かな指導者たちも同意した。「たたかいはこれからだ」と確認しながら——。そして一六日の収拾提案となつた。

九月一七日午前一〇時。ほとんどの組合員が基地に詰めかけていた。広い基地のそこ、ここで議論だ。たいせつな事を決めるとき、いつも見られる情景だった。議論は大ざっぱにいえば二つに分かれた。

「人間を人間として扱わず、暴力でねじ伏せようとしてきた読売・岡本労政は許せない。ここで妥協するよりも、法廷ではつきり決着つけて、会社の非を明らかにすべきだ。越年してもたたかおう」若い人たちの大勢を占めた。

「裁判は確かに勝てるだろう。しかし勝ったからといって、解決できるとは限らない。争点だった平和協定も撤回させだし、解決金も不満ではあるが五〇%まで引き出した。本部のいうとおりいまは社内に入ろう。人生は短くないんだ」年配の人多い意見だった。

この二つの意見が、何度も何度もくり返された。

一七日午後零時半、全員集会。疲れ切ったようすの古川洋一報知新聞労組委員長が姿を見せた。それでも笑顔を絶やさずに収拾提案を説明する。「私たちの目的はほぼ達成された。不分な点、後退した部分といろいろあるが、それ

はこれからみんなで改善していく。みんなの顔を見ていると、そうできる、と自信を持ついい切れる。ここで收拾し、会社に帰る決意をしてほしい、社内に入るといろいろな苦勞があるだろうが、私たちならそれを乗り切つているということに確信をもとう」三時間後、満場の拍手が「イエス！」と叫んでいた。午後五時、闘争委員会が正式收拾を決めた。

聞きたかった岡本証言

それでも議論はつづいた。「わかった。しかし、みすみす勝てる裁判を……。せめて岡本や長谷川の証言を聞きたかった。あんなひどいことをしてきた奴らが、世間にたいして頭を下げるを得なくなる姿が見たかったんだ。あんなやり方を国民が許すはずはない、それを読売新聞社のエライ奴らに悟らせたかったんだ。それにこれだけオレたちを苦しめてきたロックアウ

ト中の賃金が五〇%というのも納得できない」というのである。

一八日に労使が正式調印したあとも話し合いはつづいた。分会議で、喫茶店で、飲み屋で、納得するまでつづけられた。この議論は報知労働者の間で交わされただけではなかつた。五つの法律事務所から派遣されている弁護団のなかでも行なわれた。「完全に勝てるロック裁判なのだから、勝訴したうえで局面をさらに切り開いては」という意見が活発に出されていたのである。

長くつづいた議論は、法廷闘争の総括にまで及び、そもそも争点にも戻つた。そして次第に、指導部の判断に同意する方向で統一されていった。五か月前、記者たちは、職業としての新聞記者であるより、人間としての生き方を選んでロックアウトを受けた。今では記者も印刷工も、人間として生きる視点に立つて新聞を作

るべきだ、と知っている。入ってからが本番だつた。

社内に「月島」を——表現はさまざまだが、議論がそこまで一致してきたとき、心の底から喜びが湧き上がってきた。社に帰れる！仕事ができる！ それぞれ職場を思い浮かべた。鉛筆を、原稿用紙を、活字を、指先に感じた。輸送機の轟音を耳にした。働く喜びが胸を熱くした。苦しかったロックアウト。だがまた仕事ができるんだ。たたかうだけでなく、働きながらたたかえる。生き返った思いがした。議論が消えたら欲も得もなく帰りたかった。そんな報知労働者の結論に弁護団も共感をもつて賛同した。

多数派なんだから「分割就労」も気にしなかつた。ロックアウト直後から、分割就労の害毒は討議しつづけていた。ロックアウトの神様、といわれる全国金属の杉本さんの話も聞

いていた。全国一般の倉持委員長のアドバイスも受けていた。そして分割就労下で離れ離れにされても、いやがらせをされても、甘い言葉で誘われても、ロックアウト五か月の経験をテコに団結は守り切れる。そう、討議のなかで確認し合っていた。臨労組の解決が遅れていることも心の重荷にはならなかつた。なに、オレたちさえ入れば……みんな自信を持つていた。

『闘う報知』『勝利』も閉局

九月一九日付け『闘う報知』は第一二三号である。

前号で妥結条件が紹介され、この最終号一面には、「18日に正式調印終わる」と横見出し。二面下段には、「続々祝電の嵐」とある。役目終えた『闘う報知』という見出しの本文――。

『闘う報知』は、一九日付け、一二三号をもつて閉局

いたします。全面ロックアウトを受けて三日後、新聞休刊日の五月五日に「輪転機」を回しはじめて以来、闘争の中で起こった動きを伝えてきました。結婚した人、赤ちゃんが産まれた人。「あの分会は、みんな積極的な行動をやっているのか」「あの人人が大変なアルバイトをやっているんだな」——紙質もけつしてよくはない、たつた一枚のガリ・ニュースでしたが、みんなに笑い合ってもらえたし、団結を固める役割も多少は果たしてきたと思ひます。

報知印刷労組の『勝利』もこの日第八〇号で閉局、東京・大阪の日刊闘争ニュースは、就労第一陣の九月二一日から『三単組合同ニュース』『進む報知(大阪)』などに切りかわつた。いわゆる組合ニュースに戻つたのである。ロックアウト中、外部にたいして文書による宣伝活動は、活版ずりビラの大量配布(三〇〇

万枚、一年半で五〇〇万枚)とパンフレット發行(一〇万部)であった。最盛時五台の宣伝力

活動や盛り場での立看板・写真展活動とともに、広く報知争議を浸透させた。一方内部と関係者にたいしては『闘う報知』『勝利』『闘う報知大阪』などの日刊ニュースが決定的な役割を果たした。

『闘う報知』最終号は「……團結を固める役割も多少は……」などといつてはいるが、けんそんしていくには評価を間違える。闘争経過はもちろん、好んで、人間を書いたこれらの機関紙こそ、報知労働者の団結の象徴であり、その内容を具体的に示した。ロック以前には組合や青婦部、職場から一日二〇紙近くのニュースが出されていて、それらの役割をまとめて果たした。むしろもっと広く、文化人・芸能人や家族、読売新聞労働者をはじめ共闘する仲間たちすべての目と耳であり口ともなったのである。

基地や大衆討議とならん大切なる團結の屋台骨だつた。

共同生活をしていたものが、一人でも姿を見せなくなる寂しいものだ。九月二一日、三分の一の仲間が基地を去つて、大きなブレハブにポッカリ穴があいた。秋風が冷たくなりはじめた。一〇月末に第二陣、一一月四日第三陣が去つて、残るは処分者だけ、人影もまばらになつた。きれいに掃除していたトイレがほこりをかぶり、空き地もいつしかゴミで荒れた。闘争本部も少しずつ社内の書記局へ移転を始めた。

月島サヨナラ・パーティが盛大に開かれたのは、建て物の取りこわしにかかつた一月末である。ビールや一升瓶を持ち込み、築地の魚河岸からサカナを仕入れて、感無量の杯を交換した。「ネコはどうした」ひとりが大声をあげた。

やせた小ネコが迷いこんだのは基地ができる間もなくである。

四六時中流れ出る料理のにおいに誘われたのか、レストラン「ロック」のあたりに出没した。呼ぶと逃げ、人がいないと食べものを探すのである。美人コックたちがねばり強く、食べものを与えた。間もなくイスの下にチヨコンとすわるようになり「ロック」のペットとなつた。二ヶ月を越した頃から、基地

地のペットにもなつて、秋を迎えた。生み落とされてからひとりぼっち、いじめられて反抗しつたかってみても肌寒い。やがて団結の味を覚えてきた小ネコ。オレたちみたいだと報知の労働者は思ったのである。

呼ばれても酒宴には無関心、いつものようにそ知らぬ顔で歩く。こっちへこいよ、と追つかれて基地を飛び出した。じきに何気なげに戻つてどこかの隅にすわるだろう。夜ふけて、酔っぱらいが一人、よろめきながら、基地をふ

りかえつて叫んだ。

「月島サヨナラ、月島のネコよ、サヨーナラ！」

いま、小ネコは元気に育っているという。ある婦人組合員が引き取ったのだ。今度は家庭のぬくもりを味わつていることだろう。

Ⅲ 会社に、月島。を

1 タヌキ寝入りも抵抗のうち



笑顔がならぶ書記局「さあ！ これからだ」

やっぱり二ガイ分割
就労の味

「ただいま」東京・新宿のバー「W」に、いきさか場違いのあいさつを投げながら二人の男が入ってきた。奥にかたまつて飲んでいた一〇人あまりが「よう！ どうだった」と応じる。報知新聞のスポーツ記者たちのタマリ場の一つ、九月二一日午後二〇時すぎのことである。入って来た二人はロックアウト解除後

第一陣の就労者。「敵陣」での第一日、無事に「先兵」の役割を果たしてきました」と、若いM記者がおどけてみせた。「なんてことはないよ。さすがに緊張してちょっぴり疲れただけ……。編集局は変わったぜ。まるで活気がなくなって死んだみたい、みんな何かに萎縮しているような感じなんだ。まあオレたちの方は大丈夫さ。ただ、かわいそうに佐宗がヤラレてたよ。離れてみてたけどアタマにきた。だけど今はガマン、ガマンってね。あいつも終わったらここにくるはずだ」

待っていた記者たちとの会話はいつものようにならぬくくなつたのないものだった。二人が会社で取材してきたことを話し合っては、水割りをおおつて笑つた。その調子、その調子、などといつている間に、就労者が続々参加、二〇人くらいにふくらんでバ「W」を借り切った感じの午前零時すぎ、佐宗記者が到着した。いつ

もあお白い顔色が、いつそう白く見えた。どことなく力無げな身ごなし。だが口元は笑っていた。「すいません」と口を開いた。「ご心配かけてしまって……。ヤラレちゃつたんですよ」

みんなの顔にホッとした表情が浮かんだ。良きにつけ悪しきにつけまだ若い佐宗記者。まいているのではないかと心配していたのだ。大丈夫、大丈夫。なあに少しぐらい痛めつけられたってこれからさ。飲酒分会はすぐ月島ムードにもどつた。「どっこい生きている、だよ」とだれかがいって、「古いい！」とみんな笑つた。しかし、就労初日の社内は、仲間の所で味わうムードと正反対のものであつた。社内に月島を作ろう、という目的に向かつて、悪戦苦闘の第一日だった。

「男なら何とかいってみろ！ お前がオレの弟ならぶん殴つてやるぞ！」
突然あげた編集局中に響き渡る大声……。N

レジヤー部長だ。分裂当時の野球分会の首謀者、いまは昇進している。編集局長席そばの応接セッタ、目の前に坐っている佐宗さんに罵声を浴びせた。佐宗さんは黙つたままN部長の顔を見返している。

約二時間前の午後七時、野球部会。たつた一人、五ヶ月間組合とともに生きた佐宗さんを、野球記者一〇人あまりが取りかこんでいた。

「新人としては長いブランクになりました。
最初の一歩からやり直しますのでよろしく」部長、デスク、部員があいさつした佐宗さんを見えていた。三〇秒、一分……。

「オメエ、一言足りねえんじやあないか」とデスクの一人が切りだした。「オメエらが外で遊んでいる間、オレたちが報知新聞を守つてきただ。そんなあいさつですむと思つていてるのか。悪いとは思つていません」

「ファン、自分一人だけが記者だと思ってやがる。だとすりや、オレたちは記者じゃないんだな」とある部員。パンフレット『良心の歴史をつくりたい』をあげつらった。パンフレットに掲載されている佐宗さんの手記は、記者像を問い合わせていた。自らの記者像を正視できなかつたものが、感情をムキ出しにした。五ヶ月前、みんなで決めた組合の方針をまず破つた連中が、こんどもまず、口を開いてきた。約一時間、詰問がつづけられたあと、所属外のN部長から呼び出されたのだった。

すでに一時間も経つていたであろうか。罵声はつづいていた。これまで十数年間に醉っ払うと何回となく社員に暴力をふるつてきたN部長。論理で人が納得しないとみると暴力。それも人目につかない所が多かった。その手口を、目の前の若い記者が五ヶ月間守りつづけてきた良心によつけたかったに違いない。N部長が並

べたてた理くつでは揺らぐはずもない良心だつたらだ。あとは暴力でうづぶん晴らし、と望んだかも知れない。しかし、「ぶん殴ってやるぞ」とはいっても実行できなかつた。佐宗さんの仲間たちの目があつた。少数ではあつたが、

押し隠してきた怒りが、くやしさが言葉になつておどり出でていた。居あわせた仲間は佐宗さんの耳に届いている。月島の声を胸で聞いていた。「わかるよ佐宗、お前の気持ちは。がんばれ、もう少しのしんぼうだ……」

仕事に熱中してはいたが、鍛えられてきた連帶があった。そこで脅迫的な大声を張り上げる。その怒声に、若い心がにらみ返してニヤリ。昔のことを知つていれば「やっぱり、そんな程度だったのか……」と、佐宗さんは思ったことだろう。負けてはいなかつた。

だが、ただひとつ社内の“とりで”書記局に

戻ってきたとき、若い心のキズ口は開いた。
「委員長、ほくは……ほくは……がまんできな
いんです……」殴らしてください、とでもいい
たかったのか、月島と社内をつなぐ受話器に向
かって訴えかける佐宗さんの右手はこぶしにな
つっていた。涙が流れていた。数時間、心の底に

機械になつて働け！

分割就労とは分裂工作。さんざん聞かされてきたし、覚悟もしていたつもりだったが、現実は肩にいくこむ重みがあった。みんな背を丸め、怒りの声を飲みこんだ。明日、がくるまで、タヌキ寝入りして耐えることにした。

この日午前一〇時。東京では麴町会館、大阪では靈雲院、職場に戻る前、就労第一陣が集められ就労式が行なわれた。報知新聞の菅尾社長はいって、「名づけてきようは協定書の、入魂式。といつてもいいかも知れない」解決時の労使協定書に、魂を入れる——要するに協定書

についての「会社解釈」を受け入れて「従来の考え方の一新をはかれ」ということだったのである。さらに、東京でも大阪でも「会社を守つ

た（？）人たちにたいして脱帽しろ」「土下座しろ」という発言がつづいた。表現を「せいぜい注意」した報知印刷の岡本社長は「職場の秩序は就業規則と職制の手で厳正に維持」すると語った。何が就業規則か、何が厳正なものか。佐宗記者にたいする仕打ちを見てほしい。それも例外ではなかったのだ。

「入魂式」の演説を黙って聞き、五ヶ月ぶりの職場に入った組合員を待っていたのは、権限を乱用する職制と、仕返しのチャンスを待っていた一部第二組合員だった。仕事を与えず、「反省しろ」「あやまれ」を連発するもの。おとなしそうな組合員を探しては「組合が勝つたと思うならすぐ出て行け」と威嚇して歩くもの……。就業規則にも定められている祝祭

日分の代休はおろか、二・三か月にわたって公休日さえほとんど与えられなかつたものも出た。

報知印刷ではその日、部長や課長がいつた。

「あんたたちは、自分のことを人間だと思つて働いてもらつては困る。機械だと思って働いてくれ。新組合（第二組合）の連中もそうやってきたのだから、あんたたちにできないはずはない」（写真製版）「これから君たちが、どういう気持ちでやるのか、心のなかで決意するだけではダメだ。みんなの前で、はつきり口に出していいってもらいたい」（活版）

そして、どの職場でもあたり前のように労働強化が待つていた。ロングアウト前の「報知」はどこにもなかつた。多くの第二組合員は、脱落の後めたさとロックアウト中の「労働強化」のうっふんを、たたかつてきた労働者にぶつけ晴らした。そのうえに職制が「君臨」してい

た。タヌキ寝入りで耐えられないものは、死んだふり。して耐えた。

外にいる仲間の就労を心待ちにした。月島の生活が心の支えだった。五ヶ月の間、一緒に深夜、団地でビラまきし、就労闘争にも出てきた妻や子の寝顔が、明日の活力だった。みんな仕事を没頭してがんばった。仲間が帰ってくるのを待つた。そして脱落しなかった。

深沢哲也記者が社を去った

九月二三日昼、月島で全員集会。残留組と、勤務時間前の就労組が集まつた。社内の実情を聞いて深刻なムードがただよつていて、みんなで会社に抗議に行きたい。しかし、抗議に行けば、社内の仲間がもつと不利な状態に追いやられるかも知れない。社外の仲間が帰れなくなるかも知れない。闘争態勢を解き、「闘争本部」の名称を元に戻していた執行部は、「会社に抗

議をしている」といった。しかし、執行部だけで抗議したって……、幹部だけの力ではどうにもなるまい。全員が声をそろえて「ノー」といって初めて労働組合の力が發揮されるのだ。分割就労の意味がわかつていたはずなのに、一方的に攻めまくられるサッカー・チームが目に浮かんだ。敵の「形」にはまると勝てないことが多い。憤りのなかにくやしさが、くやしさのかに不安があつた。

集会の終わりころ、映画記者の深沢哲也さんが、マイクの前に立つた。深沢さんは第一陣、いまは勤務時間中のはずだった。

「みなさん、私は、きょうで、報知新聞社をやめます」……。広い基地が静まりかえった。深沢さんの口調も静かで落ち着いていた。

「私は約二〇年、報知新聞と苦樂をともにしてきました。しかし、報知新聞社が暴力団を入れたとき、私は、何のためらいもなく、みなさ

んとともにたたかいました。そして五ヶ月ぶり

に社に帰るとき、入魂式で私が受けとつた辞令には、『資料課勤務を命ず。』と書いてありました。社内に入つてひとまわり、私が見たものは荒涼とした世界でした。よう哲ちゃん、と声もかけられたが、人間の住む所ではない、と感じました。あの日の午後、気がついたら家で辞表を書いていました……。ここで戦列を離れていくことはみなさんについして、たいへん申しわけないことだと思います。許してください……。しかし定年を前にして突然の資料課勤務。人をバカにするのもいいかげんにしろ、といいたい、ボクのプライドが許さなかつたのです……。もう、報知新聞にたいする未練はありません。もちろん、組合活動にたいする後悔もありません。ボクは五ヶ月のロックアウトのなかに人間と人間との本当のふれあいを感じました。このトシになつてはじめて経験したことです。

貴重な経験でした。感謝しています」

深沢さんは、いつものようにダンディーな背広姿で、みんなのなかのこわれかけたイスに戻つた。声もなかつた。拍手もなかつた。

いつも一緒に行動してきた深沢さん、ピラを折り、ラーメンを並んで食べた。その深沢さんが戦列を去ろうとしているさびしさに、心が痛んだ。だが、定年まで三年間の資料課勤務、そのブランクで、『映画評論家の人生』を奪われようとしている深沢さんの心の痛みもわかつた。

会社の残酷さを憎んだ。黙りこくる組合員に、司会の安増康彦執行委員がいつた。「私たちちは深沢さんに残つてもらいたい、そう慰留してきました。だれもがそういう気持ちだと思ひます。拍手で確認しましょう」拍手が湧いた。長かつた。しかし、いつもと違つてイキ苦しさを互いに感じあう拍手だった。一人一人の気持

ちを支えてきた深沢さんを、今度は自分たちが支えられればよいものを、その力がないと知っている、別れの拍手だったのだ。

だまし討ちの配置転換

配置転換は、分割就労政策のなかで「有効な一打」となった。就労後三か月間に、報知新聞労組東京の場合を例にとると、深沢さんのほか四人のベテラン記者が社を去った。いずれも、十数年間守り育ててきた「自分の仕事」を、何の断わりもなしに、理由らしい理由さえ示さず剥奪されたのだった。もちろん、組合は抗議した。しかし「人事権はこっちにある」と会社は開き直った。会社は、労使間の約束を平然と破り棄てたのである。それも「予定のコース」だった。

ロックアウト中の八月二一日、報知新聞社は全面的な機構改革と人事異動を一方的に発表し

た。ほとんどの部・課の名称を変え、統廃合した。そして社外でたかう労働者を全員「局付け」にした。具体的仕事を行なう各部・課は社内の人間だけで構成し、社外のものは「編集局付け」とか「営業局付け」とかいうことにしたのだ。一〇年前のサンケイ新聞では、「局付け」の後にくるのは、退職勧告。だった。ロックアウト中の報知では「どの職場でも、もうお前たちを必要としていない」という、切りくずしだった。このことをただし八月二七日の事務折衝で、長谷川副社長は明言した。「ロックアウトを解いた場合、夕刊をだす計画があるので、一部の異動があるかも知れない。しかしはとんど全員を原職場に戻す。異動する人も同一職種にする」

現実はどうだったか。集中的に配転された報知新聞労組（東京・大阪）の数字は次のようになる。

第一陣（九月二一日）一一八人中一八人
(15%)

第二陣（一〇月三〇日）八九人中三三人
(37%)

第三陣（一月四日）九七人中四八人
(49%)

その後 五九人中四八人 (81%)
(昭和四六年二月四日までに就労した处分者)

総計三六三人中、一四七人で、なんと組織人員の四割もが配置転換されたのである。報知新聞労組の古川洋一委員長は東京都地方労働委員会へ提出した陳述書に怒りをこめて書いている。

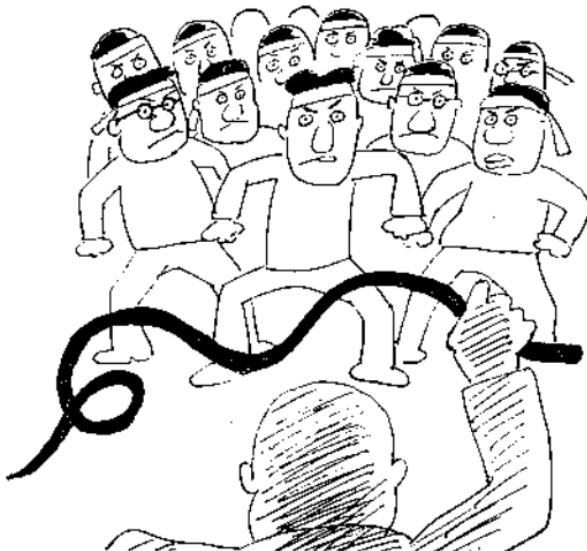
……長谷川副社長のいいぶんが変化したのはこのころです。「いろいろ仕事を経験したほうが本人のためにもなる。私は元来配転に賛成だから、原職場に復帰するなどといはずがない。このロック解除を機会に新しいセ

クションで働いてもらうのだ」正直にいってあいた口がふきがりませんでした。こういう豹変ぶりにたいして、いったいなにを約束し、なにを信すれば、いいというのでしょうか。この配転が、長谷川副社長のいうように「報知に清新の気を注入する」ためのものではないことはたしかです。率直に疑問を提出しますが、二組（新報知労組）でかためられた野球と販売の職場に異動がほとんどないというのはどういうわけでしょうか。たとえば私の所属していた一般スポーツで、二組の人はまったく移動せず、報知労組員だけが配転されたのはどういうわけでしょう。配転の狙いが、組織攻撃以外のなにものでもないことははつきりしています。……

格子なき牢獄の囚人たち

配置転換のねらいは、報知新聞の場合、編集

就労なし牢獄、格子なき牢獄が待つたりに



局のある四階に極力戻らせない、退社に追い込んで人へらしする、希望の配転、をエサに脱落させる——の三つだった。退社と脱落者は、就労後五か月間に組織人員の一〇%を越えなかつた。

組織的な意味での「実害」は少なかつたといえるかも知れない。それだけにいっそう会社は編集局にたたかう労働者全部を戻すわけにはいかなかつた。もしみんな元へ戻せば野球分会を除く全分会が圧倒的多数派となるのだ。五か月のロックアウトで多数派を守りぬいた労働者の「成果」を、分割就労下の配転強行政策が明らかにした。たたかう記者たちを編集局から「部分ロックアウト」せざるを得なかつたのである。

格子なき牢獄——ロックアウト後新設された報知新聞東京の「事業本部」(四一人)と、大阪の「開発局」(一四人)は、そう組合員に呼ばれた。『隔離病棟』とも呼ばれ、『座敷牢

とも呼ばれた。編集記者を編集局から隔離する所であり、隔離された組合の中堅勢力を閉じこめて、洗脳する所もある、という意味だ。運動部記者、文化部記者、カメラマン、整理・校閲の記者、事業部員などで構成されていることは、当初、とても新事業開拓の「場」とは思えなかつた。会社は夕刊、週刊誌など新しい出版物を発行するセクションだといつてゐた。余剩社員で新規事業を、がキャッチフレーズだつた。五ヶ月後にやつと実現した新規事業は、東京の場合、三月からの競馬週刊誌発行。この方針が決められる前、四六年一月末までの東京本社六階にある事業本部の「仕事」は次のようにものであつた。

午前一〇時半出社。約一〇分間、朝礼、があ

る。本部長が部屋の中央でマイクを片手に訓話を一席。全員、神妙に聞かねばならない。内容はその日の作業の指示、社員心得、部員の行動

への批判などだ。そして作業開始。競馬ウマの血統・過去の成績調べやファンへのアンケートづくり。また、決して紙面にはのらないが一般的取材を命じられるものもある。出張取材もあつた。同時に全員を対象に、取材、整理、校閲、写真撮影の「再教育」が行なわれる。校閲の場合、書き取りテスト、があった。成績の悪い方から順に四、五人が、夕方六時すぎの「夕礼」のあとに残されて、復習させられた。記者歴最低六年のベテランたちもこれには悩まされた。もちろん、この間に一時間の食事時間と一〇分程度の休憩時間はある。ただし、八班制度がとられ時間がずらされているので、拘束時間内で全員そろつて話し合うことはできない仕組みになつてゐる。

まさに「洗脳学校」である。記者たちが月島時代に築き上げてきた民主主義のヨコワリの仕組みを、「先生」のいうとおりにしなければ罰

せられるタテワリの仕組みへと、発想方法自体を変革していこうとする作戦のようだつた。

露骨に「洗脳」を拒否してみせると、懲戒される。懲戒休職一ヶ月の処分が解けて事業本部に配属されたもと文化部のX記者。初日、二

日目と本部長からじかに「反省」を迫られ、拒否した。その後約一〇日間、社内に机もイスも与えられず、常に社外にいることを命じられた。仕事の指示が社の受付けに預けられていることもあつた。X記者は仕方なく、ホテルのロビーや喫茶店で原稿を書いたりした。懲戒隔離されたのである。

事実からいえば、「洗脳」されたものはいい。しかし、会社から見て反抗的姿勢のあるものには、記者手当やボーナスの査定で、合法的懲戒¹が加えられた。反抗させまいとするときには、出張取材で外の空気を吸わせる。「アメとムチ」の政策が取られた。しかし、アメをし

やぶらされようとしたものも、ムチを振りおろされようとしたものも、夜、飲み屋で励ましあつた。「面従腹背、ヤツらのいいなりになんかなるもんかい」、月島²は、生きていたのである。

事業本部に付属して事業企画部がある。企画部というと聞こえはいいが、違う所はかたや六階、かたや七階ということと、構成人員だけ。作業内容に変わりはない。ここに配転された、あるもと文化部記者は昼食時間を午後三時と決められた。仕方なしに午後一時前の一五分休みに社員食堂へかけこみ、せわしくかきこんで、体調を守ろうとする。結果は逆で消化不良、体重が五キロも減つた。たまりかねて企画部長に時間を世間なみに近づけてほしいと頼んだ。回答³はあつた。「食事管理をしっかりとやって、三時の昼食でも大丈夫なよう努力せよ」なんという冷酷さ。だが、部員の食事時間も、オ

カミのお達しで、一部長には変更する権限すら与えられていなかつたのかも知れない。

これもある企画部員。連日、電話番号簿より小さい文字をにらみつづけていたが、ある朝、すべてのものがボヤけて見えることに気付いた。目医者に行くと、1・5 あつた視力が 0・8 に低下していく、過労だから休養しろ、と診断された。同じケースが事業本部からも出で、さすがにあわてた本部長は、休憩時間を延長し、病人の仕事を変えた。ほとんどの人が八時間拘束で残業はなかつたが、精神的にも肉体的にも、決してラクな毎日ではなかつた。だが、もつと厳しい状態におかれていたのは、編集局の各職場に戻つた仲間たちである。

押し寄せてきた過重労働

大量配置転換の結果、ロックアウト後の各職場の人員は大幅に減少した。作業の定量に變化

の少ない編集内勤を例にとると、整理（現制作部）が三五人から二一人（うち第二組合員八人）、校閲（現校閲課）が三二人から二〇人（うち第二組合員四人）に減つていて（四六年二月一日）。たいへんな労働過重になつた。有給休暇もとりにくく。「…昭和元禄」から労基法制定の敗戦直後まで逆戻りだよ」とは職場の声だ。なにしろ懲戒処分の理由のなかに「…権利であるとはいっても、年次有給休暇の消化も高く…」と、有給休暇をたくさんとつたことを悪いことのように書く会社なのだ。

取材関係では元の野球部が従来通り、元の文化部がやや減り、写真部と一般スポーツは大幅に減つた。たとえば四六年冬の札幌ブレーブスが終わつたときのことである。争議中脱落して解決後主任に昇進した、ある第二組合員が戻つてきただ。雪焼けした顔がやつれ果てている。「いや、キツイなんてもんじやないよ。なにしろう

ちは三人なのに日刊は「〇人だからな」と嘆いた。かつて、報知の人海戦術、といえばライバル紙間では有名だった。それが札幌ではライバル紙『日刊スポーツ』の三分の一の人員しか取材陣を組めなかつたのである。

労働過重になつたのは、もちろん、記者たちだけではない。むしろ、機械になれ、といわれた印刷労働者の方がきつかったかも知れない。外部からの受注印刷作業量は、ロックアウト前の約三倍、人員は五分の一も減つている。会社は笑いのとまらぬもうけのはず。その一方、労働者はそれこそ機械の一部になつて黙々と働くを得ない状態になつた。職場から笑いが消え、だれの背中にも監視の目が焼きついている。

そのくせ、人べらしはさらに入れられた。報知印刷（東京）ではロックアウト中の会社のために、新聞づくりに励んだ定年退職後の嘱託一〇人ほどが「解雇」された。人を減らした上で

残った人間に前より多くの仕事をこなさせる。そのため活版部門では、組版も採字も紙型取りもこなせる「万能工」育成の動きが出ている。労働者を質的にも量的にも人間の能力を越えて使い切ろうというわけである。機械よりも効率のよい「人間機械」——道具と見立てれば便利であるには違いない。労働者は、殺人的労働密度のなかに追いやられる事になる。さらに並行して機械化の動きも活発化してきた。

新聞関係では週刊誌、書籍などの新規発行、印刷関係では外部からの受注印刷の増大。職場の労働者の人間性を無視したこれらの合理化強行こそ、ロックアウト後も、執拗につづく組合攻撃のねらいであることを、組合員は再確認した。分割就労もいやがらせやシメツケも配当転換も、合理化の露払いであったのだ。分割就労の「害毒」を承知で職場に帰つた組合員は、そのことを再確認し、その攻撃に耐えていくこと

をも再確認した。やがて巻き返していく決意を
こめて――。

2 こんな新聞になつた

紙面を使って組合攻撃

争議解決後一八日目の報知新聞（四五年一〇月六日）一二面のコラム「寄席バカ斬」は、三遊亭円楽評¹をのせており。この記事の後半を読んで記者たちは激怒した。「それでも報知新聞か！」と。

……九月二十七日付赤旗（日曜版）での労働運動についての発言を読んであきれかえった。「要は正義」組合は必ず勝つということです。いまどき右翼暴力団などを使って労働組合におどしをかけるなどこんなアナクロニズムがまかり通るようでは世の中よくありません」と語っているのだ。……日共の指導する組合が無理難題をふっかけ、

乱暴らうぜきの限りをつくして会社を混乱させ、ロツクアウトを宣告されたのは自業自得だ。非常識な不良党員に煽動された組合員が社内に立ち入るのは違法だが、なぐりこみを予測して警備保障会社に防衛を依頼するのは常識ではないか。……案の定、なぐりこみがあり、たちまち追いかえされた。……実情をなにも知らないで……不勉強のきわみ。……

争議中、報知労働者を誹謗・中傷した会社主張そのままのアカ攻撃であるが、今度はそれを自己の紙面に堂々と掲載したのだ。いつたい九〇万読者を何だと思つていいのだろう。新聞は眞実を書くものと信じていて読者を欺むくつもりか。組合はその日のうちに団体交渉で抗議した。馬立編集局長は答えた。「円楽論であり人物評だ。そのなかで赤旗紙上で的一方的きめつけ発言に反論したのだ」反論？ 会社の反論か、と問うと「いや、そんなことはいっていない。

署名原稿なんだから、文責は執筆者の境田昭造さんにある」と長谷川副社長。ウソを書いてあっても新聞社が掲載するものだろうか。もし、「意見」だといふなら、そのような「意見」をのせる場合には、反対意見か、新聞社の見方も方ではなかつたのか。コラムの掲載責任は、報知新聞にあるはずだ。報知の編集綱領にも「眞実と公正を信条として編集し、報道する」とある。さらに追及すると、長谷川副社長が突然怒り出し、ウヤムヤのまま団体交渉は打ち切られた。説明し切れなかつたのだ。組合は、執筆者の漫画家境田氏にも抗議と質問書を内容証明郵便で送つた。一言の弁明も返つてこなかつた。

知られたくない眞実を人々に知らせようと/or>るものが出ると、共産党」と決めつける。共産党を「左翼の暴力」と決めつける。共産党の「暴力」に屈するなど宣伝する。アカ攻撃の

手口だ。たとえばこの本を読んでいるあなたのまわりに、この本が訴えている眞実をあなたに知られては困る人がいるとする。その人はまず、この本はアカの書いた本だから、デマゴイグだから、読むのをやめなさいというだろう。もしあなたが「ノー」といえば、その人は次に、あなたのことをアカだ、というだろう。だが、あなたはアカなのだろうか。アカと決めつけた人の「アカ」の意味を考えながら、あなたは、眞実を知ろうとしたり発言したりすることが「アカ」と呼ばれるなら、アカと呼ばれてもいい、と考えるに違ひない。

アカ攻撃を受けたとき、報知労働者の過半数は、五ヵ月間のロックアウトとたたかいながら考え、あなたと同じ結論に達した。報知争議で労働者側を支援したすべての人がそうだった。コラムでコキおろされた円楽師匠もその一人である。デモにまで参加し、宣伝カーの上で演説

もした前田武彦さんや、文化人アピールに署名した大橋巨泉さんも、報知新聞紙面でコキおろされた。一月一五日付テレビ面のコラムがそれである。そこには二人のことが「人気落ち目のウスラ・デブ」とさえ書かれてあった。この記事を読んだ両氏はカンカンになつて「以後、報知とはお付き合いできない」といった。

お付き合いしてもらわなくとも結構」というのが、これまでのところ会社の方針であるらしい。以上の三氏に加えて、作曲家のいずみ・たく、映画監督の篠田正浩の五氏を、絶対に扱わないという、申し合わせがあるという。報知争議の真実を積極的に広めたからだ。出版部発行の雑誌に篠田談話と計画してストップがかかり、いざみ・たく氏登場の広告が企画され、お流れになつた事実がある。そういえば、二二人の解雇理由も「主として教宣活動」であった。

犯人は編集局の構成

しかし、どうしてこうした、勝手気ままなことができるのだろう。大量配置転換によつて作られた、編集局が、犯人だった。

スポーツ部（野球、一般スポーツ）

部長 3

第二組合員 26 (うちデスク9)

報知労組員 11 (うちデスク0)

レジャー部（文化、芸能、レジャー）

部長 1

第二組合員 11 (うちデスク6)

報知労組員 4 (うちデスク1)

制作部（整理・紙面編集）

部長 3

第二組合員 8 (うちデスク5)

報知労組員 13 (うちデスク0)

報知新聞の主要な記事を企画し取捨選択する

場合にもっとも重要な三部門の人員構成である。報知新聞労組員は、企画を立て取材して書くスポーツ、レジャー両部に三〇%、記事を紙面に割り振り、見出しつける制作部に六〇%いる。そのうち現場責任をもつデスク（主任以上）は三部に一人もない（主任待遇は三人）。数のうえでは、報知新聞労組員の、部内世論、形能力はきわめて弱いものとならざるを得ない。

部長と第二組合員は、暴力ガードマンに守られて新聞づくりをしてきた人々だ。編集局次長のU氏は、争議途中までの労務部長。レジャー部長は野球分会出身、例のN氏だ。おまけに、経営首脳部→編集局長→部長→デスクという命令伝達機能は、争議を通じて格段に強化された。ほとんど「ノー」とはいえぬシステム。

局長も部長もデスクもない、民主的な議論と研鑽のなかでの新聞づくりなど望むべくもない編集局なのである。読者不在の『報道公害』を

起こす危険がいっぱい。

この編集局は、だから、『週刊文春』（四五年一月二三日）に、見出しどり報知も、自民党広報紙になつた？」と問われる新聞づくりをする。

記者 日本シリーズの興奮も一段落したさる五日朝、いつもの習慣どおり報知新聞を手にした読者は、アッと声をあげ、あわてて目をこすつたろう。

事情通 ムリもないね。一面の三分の二くらいをつぶしたトップ記事。凸版で大きく「愛情のストレートパンチ」。ボクシング選手の結婚かと思えば、真ん中の写真で笑っているのは、なんと佐藤寛子・総理夫人。一瞬、自民党的機関紙を買ったのかと錯覚した。

記者 読んでみると「失礼!! 金田です」というタイトルで、報知の誇る専属ライター金田元投手のインタビュー記事。これがふだんの毒舌とは似ても似つかない。

事情通 「大投手の金田さんには前からお目に

かかりたかった」といわれ、とたんにニコニコ。

そのせいか、夫人の肩をもんでみせた。見出しへ

特大活字で、「全くいかした・おはん。」(笑)

記者 この寛子さん、某週刊誌の連載では、

「・庶民・ぶるネコなで声の権勢欲夫人」と書かれ、たいへんなおカンムリで、そのためか連載も中止になつたな。

事情通 ところで、この「失礼!! 金田です」

その翌日には石原慎太郎が登場。もともと報知は復刊以来、スポーツ・芸能の第一級専門紙のハズ。なにもケチをつけるつもりはないが、なんど佐藤夫人につづいて石原慎太郎が登場するのか、ワカラない。(中略)

記者 組合との再度の激突が予想される微妙な時期に、政党のチョウチン持ちかと、痛くもないハラをさぐられるような企画記事を連載するのには、姿勢として疑問だな。

秦野さんに始球式やらせたい

読者の疑問がすばりと指摘されている。この「失礼!! 金田です」には、四三人の「各界有名人」が登場しているが、政界関係者の登場四回。佐藤総理夫人、石原慎太郎参議院議員、河野洋平衆議院議員、秦野章東京都知事候補、すべて自民党関係者である。

都知事選挙告示を七〇日後に控えた一月五日、イノシシのエトにちなんで秦野章さん、プロ野球ロッテの木樽投手、歌手の高田恭子さんにインタビュー。選挙にテーマが移った最後に、金田記者は「応援弁士」となつた。

……いざお話ししてみると、この人、四兆円、という予算がなかつたとしても、なにがドカーンとやる人のような気がしてきた。秋の日本シリーズの始球式に秦野さんは出てくることを祈つても、美濃部さんは別におこら



11月5日付け『報知新聞』の1面

ないだろう。……

この「応援演説」を全国の金田ファン、巨人ファンはどう受け取つたろう。公正な新聞の「腹のうち」を読み取つてくれただろうか。是々非々を問う紙面ではなく、特定候補を押しつける紙面になつてゐることを見破つてくれたろうか。この心配は、第一回の「佐藤総理夫人」記事に関する、もうひとつ疑問を思い起させれる。

四五年夏、『週刊読売』は、ルポ・ライター竹中労氏の執筆による企画もの「エライ人を斬る」を連載していた。一回目の九月二五日号では「、庶民、ぶるネコな声の権勢欲夫人」というタイトルで佐藤総理夫人を取り上げた。この号が同月一五日ごろ発売されてまもなく、突然読売新聞社は連載を中止した。次号の連載予告までしながらである。「約束が違う」と抗議した竹中氏に、「わが社の体質にあわない」

という理由が返ってきた。約一か月半後の報知新聞に紹介された。佐藤夫人像は、『週刊読売』のルポとほぼ正反対のものであった。

竹中氏は一月一七日、佐藤夫人と読売新聞社、および務台光雄社長を相手どつて東京地裁に提訴した。訴状によると、『週刊読売』発売直後の一九日、佐藤夫人が務台社長に抗議を申入れ、同社長がただちに連載中止をきめた、という。この主張どおりなら、「失礼!」金田です」第一回は、たんに自民党の「チカラチャン持ち」と批判されるにとどまらず、読売新聞社長の佐藤夫人にたいする「謝罪広告」に利用されたのではないかといふ疑いまで、もたれかねない。

務台社長のツルの一聲で決まつてきた報知系の社長人事。その社長のツルの一聲が、末端まで届くように仕組まれている編集局。これではダメだ。社内に民主主義を育てなければ読者を

裏切ることになる。民主主義の母体が国民の世論にあるとすれば、世論形成のためのデータを、国民は新聞に求めているだろう。それが読者だ。その読者に渡すデータが、ひと握りの人々に好ましいものだけになるとしたら、世論は国民の利益にそぐわないものになるだろう。国民の一人一人でもある新聞社内の労働者が、社内世論を自由に形成していく力を持たずには、眞実は、読者の必要なデータは、読者に渡し得ないだろう。

「ノーモア・サンケイ!」——報知の労働者は、わが社の編集局から作り出される報知新聞を見つめながら、読者のための新聞づくりへ、険しい道のりを歩く決意をあらためて固めた。

新しい「始まり」

分割就労は、一時的にせよ、事実上労働組合を分裂支配下においていた。進むも退くも困難だつ

た。会社はイヤガラセをやり、不当労働行為をやや、大量配置転換を強行し、大量処分を出した。一〇月三一日、一一月四日に発令された处分は、出勤停止七日一人、懲戒休職一か月三人、二か月二人、三か月二人、解雇二人。解雇を除く一〇一人は、三か月休職者の就労日二月四日まで、事実上四回に分かれて分割就労した。九月二一日から三か月半の「分裂支配」となったのである。

報知系三労組に解雇が発令された一〇月三一日、残っていた東京の報知臨労組が会社と仮調印した。大阪の臨労組は一一月一二日だった。妥結条件は、先に解決した三労組より改悪された。三労組と二労組の間に分割政策を許した結果だった。この事実について三労組は「共闘態勢が十分でなかった」と反省した。「分割支配」が「敵」の基本戦略であることを実証する一例だった。それにもかかわらず東京・大阪の臨労

組は、ついに組織の分裂は許さなかつた。
分裂支配下で、報知労働者は、過重労働を負い、あらぬ方向へ走る報知新聞を「傍観」し、わずかではあるが仲間が減っていくことに耐えなければならなかつた。しかしながらこの間、労働者は「タヌキ寝入り」や「死んだふり」ばかりしていたのではない。岡本、菅尾両氏の登場以来二年間に、報知系の従業員一五〇余人が退社し解雇された。紙面は第三者からもオカシイといわれるようになつた。人べらしと偏向報道——このままで、サンケイ化が進んでいく。「目の前にそれを見ながら、組合結成以来もつとも不利な条件に耐えて組織の団結を守り切つた自信が新しい展望を切りひらきました」いま、報知印刷の井川昌之副委員長はいう。みんな、報知争議の解決が「終わり」ではなく、新しい「始まり」であることを理解していた。

3 ほんとうは『読売・報知争議』

報知はいつも読売の下に

「月並みな絵葉書で申し訳ありません。これしかなかつたのですから——。いざ文章化の段になると愈々ますます自分の不勉強が痛感され、仲々書き出せませんでした。目下、ロック中の闘争が詰めに入った段階を文章化しているところです。一人のブルジョアを屈服させるために、これほどまで忍耐する人々は、やがて全ブルジョアの権力をも粉碎することができるだろう」という

エンゲルスの言葉をかみしめながら——。早く守る会に入れて下さい！ 1月7日】

報知の労働者に届いたこの手紙の主は、京都にある大学の女子学生。新聞学科四年、卒業論文のプランをたてているとき、報知争議に出会い、闘争の現場に足を運ぶうち、卒業論文のテ

ーマに「報知争議」を遠んだ。彼女は親しくなった報知労働者に問いかける。「報知争議といふより、『読売・報知争議』というべきじゃないでしょうか。読売新聞資本がいつたい何のために報知新聞の経営者たちに、この争議をやらせたのか、そのことがはつきりしないと。良心の歴史は作れないのではないでしょか」理屈に弱い報知の労働者たちはヘドモドしながら、全世界でたったひとつの中論テーマのために「不十分だろけれど」などと弁解しながら「ボクたちの知っている限りではそもそも報知は……」と説明し始める。

報知新聞は、スポーツ・芸能・レジャーの専門日刊紙。東京七三万部、大阪一九万部（四年）を発行して業界の王座を占めている。報知新聞、報知印刷両社の役員は、かつてすべて読売新聞社から派遣されていた。職制も大部分は読売新聞出向社員。そのシステムと社業の発展に

引きくらべて劣悪すぎる労働条件とは、読売の植民地、と呼ばれるにふさわしいものだった。

三七年に報知印刷労働組合、三九年に報知印刷大阪労働組合が結成された。四〇年春闘、読売新聞労使のベースアップ妥結額が二〇〇〇円と決まつたあと、報知の経営者が、好実績を上げていたにもかかわらず、二〇〇〇円以上を回答しなかつたため、報知の労働者は読売新聞資本の支配の強さをあらためて感じた。この年、結成一〇余年の報知新聞労組が初めてスト権を確立、報知印刷労組が四九時間全面ストライキで「新勤務ダイヤ合理化」を撤回させた。だが、二〇〇〇円回答は破れなかつた。この経験から報知の労働者は「新聞も印刷も本来は同一企業だ。組合も一緒にたたかうべきだ」との教訓を得た。いわゆる「報知系三単組共闘」が始まつたのである。

以後三年間、それまでそつたようにべ

ースアップもボーナスも、読売新聞労使の妥結額を越えることはできなかつた。しかし三労組の共闘が強化されるに従つて、職場の諸権利は前進し、「イエス」と「ノー」を民主的に発言できるふんい気が社内に育つていつた。社内でもっとも差別されていた臨時雇い、嘱託、アルバイト学生の待遇改善も、そんななかで実現していつた。労働条件では、本国の読売新聞の労働者を超える部分もでてきた。読売の植民地・報知・から、われらが報知に変わりつつあつたのである。

そんなとき四四年一月一日に、菅尾旦夫氏が報知新聞社長に、岡本武雄氏が報知印刷社長に就任した。この突然の交代は、務台光雄読売新聞社長の指示だつた。岡本武雄氏は元サンケイ新聞の役員、読売新聞社以外からの起用はこれが初めてのことであつた。なぜサンケイの人間を？ 労働者はすぐに「産経残酷物語」を思

い出した。はたして岡本武雄氏は一ヶ月たつかたぬうちに、『残酷政策』を推進し始めた。われらが報知を守るために労働者は立ち上がった。そして疑いを抱いた。天下の大読売新聞がなんでこんな経営者をよこしたのだろう。読売新聞資本とは何なのか、何を考えているのか。まずその知識が必要だった。

読売新聞社（三本社、二支社）は全国約五五〇万の発行部数を誇っており、朝日新聞に次いで業界第二位である。新聞では報知新聞と福島民友新聞、放送では日本テレビ放送網と読売テレビ放送網を支配下に置いているほか、全国一九のUHFテレビ局に資本と人間を送りこんでいる。さらにご多聞に洩れぬ多角経営。読売興業（巨人軍など）、よみうりランド（ゴルフ場、川崎競馬、船橋オートなど）、読売映画、読売旅行、読売不動産 etc……まさに読売コンツェルンである。そしてその現総帥が務台光雄

読売新聞社長。読売コンツェルンの基礎を築き、天皇と呼ばれた正力氏と同じように全系列を掌中に収めている。すべての翼下経営トップの人事を握り、末端までその経営方針を貫徹させている。この読売コンツェルンにとって、報知系労組の存在がなぜ邪魔になつたのである。「合理化のために」と報知労働者はいう。

合理化のために系列強化

マスコミ界の企業競争は、『情報化時代』などといわれる今日、熾烈をきわめている。技術革新が急速に進行し市場の限界がささやかれる状況の下で、テレビ・放送・新聞界はバスに乗り遅れぬために、ぼう大な設備投資や中小企業の系列化とともに経営合理化に必死だ。いわゆる「合理化」である。

新聞の場合でみると、東京オリンピック直後の四〇年から、大手紙が二四ページ体制という

増ページ、カラー化の時代に入った四五年までの五年間に、二〇〇〇億円の設備投資が行なわれたといわれる。朝日新聞約六〇〇億円、読売新聞約四〇〇億円、毎日新聞約二〇〇億円、日本経済新聞約一五〇億円、東京・中日新聞約一〇〇億円、他に地方紙も着々と新社屋建設、新技術導入などの設備投資を行なっている。

読売新聞資本が、コンソーシャル化しながら、マスコミの一角落に「王国」を築こうとしているように、他の大手である朝日新聞、毎日新聞、サンケイ新聞、中日新聞、日本経済新聞なども同じである。既成のテレビ・キー局や放送局のほか、すでに開局された三二局のUHFテレビのいすれかに資本を投入、経営参加している。大手による地方紙の系列化も漸進している。近い将来、全マスコミ界がいくつかの資本の系列下に置かれてしまうだろうときえいわれて、字義通りの「マスコミ独占」へ業界再編成が進ん

でいるのである。そして、その競争に要する莫大なカネは、マスコミ労働者と、受益者であるべき国民の肩にのしかかってくる。ほとんどの人が反対せざるを得ない合理化だ。

黒い潮流——マスコミ再編成

マスコミ再編成をめぐる「合理化」は、また言論の「中央集権化」——ひとにぎりの権力者の「私有物」へ進む危険をはらんでいる。二つの例を見てみよう。

……「夫婦の別居を強いる転勤命令は不当」——大阪地裁の判決は、七月一日の各紙に大きく報道されました。……ところが、岡山に本社を持ち広島、香川を販売エリアにした、三県プロック紙。を自称する山陽新聞だけが一行も掲載せずまったくのほおかむり。……山陽新聞といえば、佐世保報道（米空母寄港事件）にからんで、共同（通信）配信の原稿をまったく逆に改ざんした（警官帰れ）という市民の声を「学生帰れ」と

書き直し労働者と市民に抗議されて謝罪広告を出した

社として私たちの記憶にも新しいところ。
……いま山陽労組員で五、六年別居配転とたたか
つている人は多い。たとえば香川県下の六支局の
うち五支局までが単身赴任の別居者。……大阪判
決が出たあと、第二組合を含めていそそう広範
なひどい配転を強行しています。……（四五年九
月一五日、新聞労連機関紙から）

要するに自社が行なっている配転にとつてつ
ごうの悪い記事は抹殺したのである。三七年に
労働組合を大弾圧したこの山陽新聞社は、その
後も反安保、沖縄、公害、選挙報道の「特オ
チ」的扱いをやつて批判を浴びている。

……サンケイで二月末、鹿内社長が「サンケイ
四原則」なるものを宣言、従わないものは処分す
ると管理職を集めてぶつたとかいう。その内容は
①公言報道はオーバーにしない。②消費者運動を
持ち上げない。③二つの中国を認める。④秦野
(自民推せんの都知事候補)を勝たせる……(週

刊文春)、四六年三月二二日号から)

残念ながら、資本・経営者の「上意下達」が
まかり通っている。あらゆる権力から「独立」
しているはずの言論機関の一つの姿勢だ。明ら
かに言論統制への黒い潮流が見えてくる。

言論統制への黒い意図まで底流にあるマスコ
ミ再編成の動きのなかにあって、「読売王国」
を築いていくには過激な競争に勝ちぬき得る基
礎づくりを早急にやつてのけなければならな
い。その点で、読売は朝日、毎日に一步遅れを
とつていた。

「（四六年中に）東西呼応して新社屋ができ
る。東京は二三〇億円、大阪も八〇億円かかっ
ている。非常な犠牲を払つていて……ここにお
いて読売新聞は、本年は決戦の年だ。……編集
も工場も全社一丸となつてやる……」読売コ
ンツェルンの主軸・読売新聞社の基盤を固める
ために、合計三一〇億円の新社屋ができる。新

社屋では多くの技術革新が行なわれ、労働条件の大転換や大量の配置転換が必要だ。巨額の投資のすみやかな回収も必須条件。そのためには、全社一丸の態勢をとらねばならない。

全系列から人心とカネが新社屋建設に集中しなければならない。抵抗する、わざわざ報知ではなく、従順な「植民地・報知」でなければならなかつた。全読売系列が巨額の融資をしてくれる財界の「お気に入り」でもあるべきだった。新社屋合理化が読売新聞資本のプログラムにのつたとき、同じプログラムに報知系労組の排除、という項目が書き加えられたのである。

「本国」よります「植民地」からというのが植民地支配の鉄則だ。だから報知争議は、たたかう労働組合の末路。を明らかにしなければならなかつた。それが実現して初めて、全系列労働者の末端までトップの意志が貫徹し得て、資本への忠誠が返つてくるはずだった。

争議初期から「報知なんか廃刊になつても対決すると務台さんがいっている」という噂が流れた。事実、その噂に脅えた者は脱落した。どんなにハレンチなアカ攻撃、暴力行為が行なわれようとも、報知新聞、報知印刷の役員の過半数を占める読売新聞社トップは沈黙を守りつけた。むしろ法廷闘争の敗色が濃くなると、経営法曹会議事務局長の和田良一弁護士を弁護団の中心にすえて解決をはかった。和田弁護士はそれまで読売新聞社の代理人だったのだから、読売トップの指示があつたことは間違いない。そ知らぬ顔で争議指揮だけはしていたのだ。まさに「読売・報知争議」である。読売コンツェルン全体の合理化のために、報知系の収益増大のために、報知系を「植民地」に戻すために試みられたこの争議は、しかし成功しなかつた。読売新聞、日本テレビ、読売テレビなど支配下の労働者がそれぞれのやり方で「ノー」

と叫んで立ち上がったからだ。読売新聞資本が切り倒そうとした木には、マスコミ労働者の「良心」がしつかり根を張っていたのである。

女子学生の卒業論文のタイトルが「読売・報知争議」になつたかどうか、報知労働者は知らない。

4 反撃が始まった

一月四日に第三陣、一一日に出勤停止処分七日組が就労して、社内全体としては、第二組合との人数比が均衡してきた。部長や第二組合員のイヤガラセも散発的になり、むしろ、飲酒外交・路線に変わってきた。一月五日に大量処分について東京都労委と大阪地裁に提訴したところから、社内の拠点・報知印刷労組書記局の緊張感もほぐれ始めた。したいに、月島の明る

さを取り戻していく。書記局は労働組合の顔である。月島と違つて社内の各職場に「分断」されている労働者的心を反映して少しづつ変ぼうしていった。休けい時間や食事時間、書記局に立ちよつては、そこにいなない仲間の心をのぞきこみ、また散つていった。

そして、岡本武雄氏ら職制たちが解決直後と同じようにふるまおうとしては、思いがけないカベにぶつかるようになる。労働者の反撃が始まつたのである。

前提条件。は許さない

一一月二八日、報知新聞労使は二回目のボーナス交渉を行なつた。会社は玄関内の組合掲示板の移動を要求し「応じることを即答しなければ回答しない」といい放つた。組合が「掲示板の移動問題とボーナス問題は別だ。ここではボーナス回答をしてほしい」と主張すると、用意



スト権確立の日、デモで気勢をあげる

してあった回答書をちらつかせながら一方的に席を立った。岡本労政得意の「前提条件戦術」——コレコレをのまねばゼニを出さないというやり方だ。四四年にはバスアップの前提条件に、なんと「賃下げ」の合理化提案をつけたため一七二日間の争議になつた。平和協定を前提条件につけられた印刷の労働者は四四年冬のボーナスを四五年秋に受け取つた。まことに非人間的な戦術である。

玄関内の組合掲示板の移動にこだわる理由もまた岡本労政らしい。掲示板の位置がエレベーターのまん前、全従業員はもとよりすべての外來者の目にとまる所だ。そこにたとえば「都労委、会社の猛省促す」なんていうビラが貼つてある。教宣活動が恐怖のマトなのである。初め撤去しろと主張してきたが、組合が拒否すると移動要求となつた。珍しくカサにかかるところないのは、一年前に無断撤去して東京地裁か

ら復元を命じられた経験があるからだった。眞実はもつと見えない所へ、というわけだ。

組合は別に掲示板移動を絶対に認めないという態度を取るつもりはなかった。ロックアウト中の火事でなくなりた書記局や剥奪されたいくつかの職場の掲示板の復元を要求していたからだ。掲示板など便宜供与の問題も話し合う。それとボーナスは切り離して解決しようという態度だった。しかし会社は「掲示板はボーナスより先決すべき」という戦術を変えようとしなかった。

一二月に入り報知系五労組のうち四労組が妥結。第二組合の三労組も妥結して報知新聞労組だけが無回答のまま残った。組合はそのうちにゼニに困ってアタマを下げるだろう、という態度が会社の姿勢にありありと見えた。

一組合員はロックアウト中労金から借りた金を毎月平均四〇〇円返済している。個人的な返

済もあるだろう。そのうえ被処分者へのカンバ平均二五〇〇円、組合費平均一七〇〇円を納めていた。精神的な圧迫感、肉体的な疲労感となるべくこの経済的負担は「三重苦」であった。冬のボーナスも全額は出ない。なにしろボーナス支給対象期間の八割がロックアウト中だ。だから解決時に、冬のボーナス支給額は妥結額の六〇%以上とするという協定を結んだ。解決時には「異例の獲得」と喜んでいたが、ノドもと過ぎればナンとやら。現実には妥結しても六割、一五万円の人で九万円だ。それでも乾天の慈雨にはなるはずだった。一日でも早く妥結しなければならなかつた。しかし「前提条件」をのむわけにもいかない。執行部は分会討議のなかで進路を決めることにした。

一二月三日の中央委員会に提案した方針は①「全従業員平均六〇%」の受諾を会社に通告する、②会社の態度が変わらなければ提訴する、

③掲示板問題は別に交渉する、というものだつた。四日間の討議を経たのち採決することを決めた。

悪条件下で分会討議

四日から就労後初めての分会討議が始まつた。分会討議といつてもロック前のようにはいかなかつた。まず職場でできない、会議室が借りられない、報知書記局を使えないという条件である。しかも勤務実態が変わつてるので分員の半分以上いっぺんに顔を合わせられないのだ。この悪条件が実は、やろうやろうといながら分会討議ができなかつた原因だつた。

しかしできないといつてはいられない。さんざん探ししまわつてみつけた近所のビルの会議室を二日間、午前九時から午後九時まで借り切つた。残りの二日間は喫茶店、レストラン、書記局などを転々とすることにした。場所は確保し

た。次は構成メンバーと時間帯の組み合わせ。組合員名簿に四日間の勤務時間帯を全部書きこむ。各人の出席希望日時を中央委員にきく。分会の枠が完全に外れた混成メンバーとなつた。月島の全員集会を細分化したようなものだ。それでも四日間に七五%の組合員が討議に参加できたのである。

「掲示板だけのことなら動かしてやってもいいじゃないか」という意見から「ボーナスなんか無くたつて移動は反対」という意見までいろいろと出た。ただ、「前提条件」は許せないという声が九九%だつた。ゼニで人の権利を買おうとは何ごとだという怒りである。ゼニでも暴力でもロックアウトでも「平和協定」をのまなかつた自信である。討議を終えてから「ボーナスはもともとゼロでもしかたないんだから安心しろよ」とか「オレの分会は年を越しても大丈夫だからがんばれよ」と執行委員の肩を叩いて去

つていく中央委員が何人もいた。

一二月七日夜、東京・大阪で開かれた中央委員会で、執行部提案を支持するもの二八人、反対するものゼロ、保留一人だった。出張で知らなかつたからというのが保留者だ。

この議決は岡本労政にたいする最初の痛烈な反撃であつた。真正面から“月島健在”を突きつけるものであつた。

翌八日、抗議をこめた受諾通告書を提出。あいかわらずの会社にたいして、一〇日東京地裁に提訴した。三回の審尋の間に団体交渉をくり返し、ついに会社をほば全面的に譲歩させた。ロック解除後痛めつけられつづけてきた組合が、岡本式前提条件戦術¹をみごと撃退したのである。二一日、ボーナス妥結、二六日には薄い札束を数えることができた。

職場でも反撃は始まつていた。一二月四日に就労したある報知印刷労組員、胸に沖縄国政参

加選挙支援のバッジをつけて作業していた。このバッジに目をとめた職制が「それはなんだ」ときいてきた。「沖縄のバッジです」と答えると「そういうものは、つけではならないことになつてあるんだ」と、取りはずすことを要求してきた。「そんなの、おかしいじゃないですか」と、といつて彼はそのまま作業を続けた。なんでこのバッジをつけちゃいけないんだ、だれに迷惑をかけるわけでもないのに。いや普通の人間の普通の権利じゃないか。休けい時間になると、彼は六階の書記局にかけこんだ、机の引き出しを片っぽしからあけ、ありつたけのバッジを持ち出して、職場に帰つた。「なんでもいいから、このバッジをつけてくれ」と仲間に頼んでまわつた。たくさんの仲間の胸のバッジを見た職制は、こんどは何もいわなかつた。あとで仲間にわけを話すとみんな腹をかかえて笑つた。

「オレたちにもはずせといえればいいのになあ」

たたかい、次々と復権

「前提条件戦、術撃退と職場での権利確保——この二つでことを聞いたとき、千代田区のある中小企業労働者が感嘆した。「労働者だなア、報知の連中って……。あれだけ不利な状況でよくそんな反撃を。これこそ本当の労働者魂だ!」若さあふれたこの賛辞をあびせられた

休」という労基法違反を、分会討議と教宣活動の広がりのなかで、改めさせた。約半年かかって年明けた三月、ロックアウト中の火事のあと封鎖されていた報知新聞労組書記局を取り戻した。

大阪でも四五年一二月、会議室の一方的使用禁止措置に抗議して書記局拡張をかちとった。二月、報知印刷大阪労組にたいする東京転勤命令強行を阻止した。三月、報知大阪臨労組はわずか一七人の組織で会社の「契約切れ解雇」をロックアウト解除後報知系労組初のスト権一〇〇%でハネ返した。

職場で起きたたくさんの事例はいちいち挙げ切れない。いずれにしても、これらの反撃は常に職場の團結と闘志を基礎にしていた。意志統一してから行動にでる。その行動が法廷闘争であり、ビラままであり、デモ行進であった。と

この二つの例に見られるように、このころから東京でも大阪でも、労働者の反撃とその前進は、いくつも見られるようになつた。

東京では、四五年一二月、一月一と三回の公

二勝。通算一〇連勝無敗となつた。支援・共闘の輪に支えられて、ロックアウト解除後もとどまることを知らぬ会社の弾圧政策に対する反撃は、一つ一つ実を結んでいった。

五労組、ついにスト権確立

社内でようやく反撃態勢が整う四五年秋、社外ではゆづくり「新しい報知争議」が広がつて、大量処分の内示があつた一〇月二七日、報知争議共闘会議が緊急招集された。このときから外での反撃がスタートする。三〇日、処分が発表されると同時に総評が全国へ異例の支援要請を通達した。争議共闘会議が、大量不当処分を訴えるタブロイド二ページのビラを全国の単産、単組に一九万部送りつけた。一月中に読売テレビ労組、大阪スポーツ労組など三つの支援スト権が立つた。各種の集会、大会で報知支援が決議された。新聞労連はただちに一人一〇

〇円以上のカンパを決定。読売新聞労組青年婦人部も、毎月五〇円以上のカンパに取り組んだ。二年近い報知争議の広がりに、再び血が通い始めたのである。

報知の労働者も社外に出た。全国オルグ、単組まわり、集会での訴え、行商活動、アルバイト——月島の教訓を生かそうと努力した。しかし、気ばかり焦つても月島、毎放映時代とは条件が違つて、一ヶ月前後は分割就労による影響が大きく、一月すぎると大部分が就労して社内の組合活動に奪われた。報知印刷大阪労組では全組合員月二回の公休返上体制を組んだほどだ。訪ねていった労働組合の書記局で、「最近、報知のニニースが来ないけど、どうなつてんの」といわれる。「すみません」と頭を下げては、春闘、春闘と心でつぶやいた。

春闘要求は報知新聞、報知印刷、報知印刷大阪の三労組が二月一五日、東京・大阪の報知臨

労組が三月四日に提出した。賃上げ一六〇〇〇円など諸要求にたいし、会社は例によつてなかなか回答してこなかつた。

春闘先行単組にはほど回答が出そつたあと、三月二十五、二六、二九日にようやく金額回答。一応「五ヶタ」が出たものの、内容はひどいもの。定期昇給を廃止、過勤料・記者業務手当を削減したうえでベアのハネ返り分も計算に入れた。合理化ベア。職場からは当然のことながら「スト権を立ててたかおう」という声が湧き上がつた。半年の間、ガマンにガマンを重ねてきた労働者の怒りが吹きだしてきたのだ。

四月二日午前一〇時。東京・富士紡会館で開かれた報知印刷労組の臨時大会。いつもなら出足の悪いこの時間なのにどんどん集まつてくる。早朝までの仕事で眠そうな顔はいつもと変わらないが、どの顔にも気迫が感じられる。それはそうだろう。なにしろ、夢にまでみたスト

投票の当日なのだ。

来賓の激励を受けたあと山口委員長がスト権確立の意義を訴える。「質問か意見があれば」という議長の呼びかけで一人が立ち上がつた。「きのう職場で全報印（第二組合）の人が『報知印刷労組のスト権が八〇%以上か以下か賭けしないか』などと話し合つていました。職制もそんなことをいつているようです。これらの人を見返してやるためにも、ぼくはきょうのスト権を一〇〇%で立てたいと願つています」割れんばかりの拍手がまきおこつた。「いいこというなア！」と賛成の野次がとんでどつとわく。

「きょうは出席九三、委任一八で、一一一人全員の投票となります」という報告にまたもどつときた。

投票が開始された。これまでならまず投票管理委員が投票用紙を配り、次に投票箱を持って回収していた。この日は一般の選挙投票方式に

なった。国会議員や知事選、地方選などでやるアレだ。スト権投票へ向けて職場討議したときに提案された方式を採用したのである。一票の内容をより高いものにするために……。

「それでは開票結果を発表します」いつもより時間が早い。もしかしたら、という期待に胸がおどつた。みんな食べていた簡易弁当をのみくだすことも忘れて耳に全神経を集中した。

「まず春闘要求貫徹スト権から。投票総数一一、反対ゼロ、無効ゼロ、白票ゼロ……」大歓声が投票管理委員の声を途中で消した。立ち上がりて拍手するものがいた。隣と握手するものがいた。目をうるませるもののがいた。

「不当処分反対スト権一〇〇%」拍手。「不當配転反対スト権一〇〇%」拍手。「新聞労連統一スト権九八・一九%」ホーッというためいきがもれた。惜しい！四本のうち一本だけ一〇〇%にできなかつたのが残念だった。しかし

それも反対1、白票1でしかなかつた。気を取り直した拍手がいつまでもつづく。「すげえや！」投票した当の組合員が一番驚き、夢中になつて喜んだのである。

春闘統一行動日のこの日の夕方。報知印刷大坂労組（五一人）が、同じ四本のスト権をすべて一〇〇%で確立した。別に立てた東京転勤反対スト権だけ白票1で九八%となつた。つづいて四月二二日に報知新聞労組（三四一）もそれぞれ九六%（労連スト権九三%）で、つづいて二四日に報知臨労組が、九五%でスト権を立てた。これでロックアウトとたたかつた五労組全部になつた。この事実は、四四年一月に読売・岡本労政の弾圧が始まつて以来、多くのキズを負いながらも不屈の団結を維持してきた報知労働者が内外に示した総決算であつた。そして新しい出発点でもあつた。ここから合理化反対・大量解雇撤回へ新たにスタートしたのである。

N どこにも築かれる「月島。」

1

広がる報知争議



「報知の仲間を
守る会」結成

「被解雇者の奥さんとしての立場から……」と司会者にすすめられ、ためらいながら安塚夫人はマイクを持った。夫、正敏さんは報知新聞のベテラン整理記者であり、組合の副組織部長をつとめていた。

「私は主人に以前から組合の役員をやつてもらいたくないといいつづけてきました。でも聞き入れてはく

れませんでした。それなら、どうせやるなら組合のチップになつたら、といったものです」満員の会場に爆笑と拍手が起つた。夫人はづけた。「クビになつたことを知つたとき、私は主人でよかつたと思いました。長く組合をやつてゐる主人が助かり、ほかの人が解雇されたりしたら申しわけなくて……」絶句した。しばらく静まり返つた会場は、やがてわれるような拍手で包まれた。

四五年一二月八日、東京の「報知守る会」結成大会のことである。この日集まつた仲間は約五〇〇人、この感動をそれぞれの職場に持ち帰つて広めた。以来三か月、守る会の会員は東京だけで、一五〇〇人・二二〇〇口（一口一〇〇円）となつた。報知に一番身近な読売、朝日、毎日、日本経済、共同通信などの新聞労働者が支部を作り各支部一〇〇人以上の会員を集めた。河北新報、新潟日報、北国、北日本などで

は東京と同時に支部が発足した。新聞協会労組は組織の九〇%以上が守る会に加盟した。もちろん、報知新聞社のある千代田区地域の労働者も、出版労協や民放労連関係の民間企業労働者ばかりではなく、全農林、全気象など官公労働者も参加した。そしてまた、報知の労働者とふれあつたあらゆる職業の市民たちが参加した。報知争議中各種報道や配布されたビラを見て、あるいはパンフレット『良心の歴史をつくりたい』を読んで激励の手紙を寄せてくれた人々。報知労働者の友人、知人。喫茶店や飲み屋・バーなどの人々、著名人などである。

『良心……』を読んだ二三歳の女性は、「守る会」に入つて父親に叱られた。そんなアカに賛成するなら、約束のアメリカ留学はさせない、というのである。この女性は父親の意見に逆らわなかつた。そして仮名で一年分の会費を前払いした。「アメリカへも行くけど、報知支

援もやめないつもり」という。報知労働者の知人、ある会社の経営者は会費一〇〇口で加入。なんと一ヶ月一万円の会費を納めつづけている。

大阪の守る会も二月二二日に結成大会を行ない八〇〇人八五〇口、東西で二三〇〇人三〇〇〇口になっている。この数字は、報知闘争の広がりと同時に、月額三〇万円のカンパ収入ということも示す。「報知系二三人の解雇撤回をめざす。そのために財政を確立する」という守る会の具体的目標を実現しつつある。「この数字はまだまだふえると思います。ぼくたちがいふのはおかしいかも知れないけど、報知闘争はもつと広がっていくだけの意味を持っていると思ふんです」と事務局はいう。報知印刷の山田晃一さん、報知新聞大阪の嘉村健彦さん、いずれも被解雇者だ。確かに映画監督の山本薩夫さんから、東京の守る会結成大会にとどいたメッ

セージのなかにあった。「……報知の労働者への弾圧とたたかうことは、すべての労働者・市民にとって、平和な生活と言論の自由・民主主義を守ることにつながるでしょう……」読売・報知資本の「合理化」は労働者・市民の生活を破壊することにつながり、またその弾圧は表現の自由を奪い民主主義の存在を危うくすることにつながるというのだ。報知への弾圧が報知だけの問題でないところに、守る会運動が発展する必然性はあるのだろう。そしてまた、全国いたる所で弾圧とのたたかいがあるという事実にも、守る会運動が発展しなければならない必然性があろう。たとえば宮崎放送争議の場合だ。

宮崎放送でも暴力ロック

「今はたとえ一人になつても、クビになつても、自分がボロボロになつてもやつていきませんから、東京の守る会結成大会にとどいたメ

九日）の見出しである。三〇歳を越した報道カメラマンが、組合分裂工作をハネのけて、全員集会で明らかにした決意の言葉だという。オルグに行つた大阪支部の風間委員長は「良心の歴史をつくりたい・宮崎版だ」という。宮崎放送労組のたたかいは報知と同じだというのだ。

報知争議が終えて二か月半、一二月一日に宮崎放送労組はロックアウトされた。一二月一四日、「中央警備保障」の暴力ガードマンに暴行された。一二月一八日には組合の「武装解除」が提案され、ストライキや大量宣伝を理由に懲戒解雇一人と休職三か月三人の処分が出された。そして一月八日、強引な組合分裂工作。だが五ヶ月を経て三分の一も脱落せず圧倒的多数派が社外でたたかい抜いている。——確かに順序は違うが、報知争議によく似ている。テレビと新聞の違いはあるが同じマスコミ労働者。宮崎の場合は、一体何が争点だったのであろう

か。

「九州一の賃金、労働条件」と、上部団体である民間放送労働組合連合はいう。民放労連傘下八一組合のなかでも、かなり高い水準の権利をたたかい取ってきたという。「その成果を示す端的な例が、争議の発端だった。臨労解雇撤回闘争。ですよ。『解雇無効』という宮崎地裁の判決をかちとったアレです」と報知労働者が裏づける。臨労とは臨時労働者の略、宮崎といえば、二人のアルバイト学生をさしている。臨労——本来は一般労働者が担うべき仕事を「臨時」「アルバイト」「パートタイマー」「嘱託」などの名によって受け持たされ、その名によつて身分や待遇の面で、一般労働者とは差別されている人々のことだ。差別されても当然であるかのような錯覚で社会的に見落とされがちな存在もある。その臨労の問題に正面から取り組むことができるという事実は、宮崎放送労組が

実現してきた民主主義の豊かさを示していると

いうのだ。そしてその民主主義こそが、宮崎放送資本とその背景にきらわれて、奪われるか守りぬくかの争点となつた。報知と同じである。

新聞や民放ばかりではない。マスコミでは大争議が続発している。出版では光文社争議が一年以上つづいている。映画では日活が解決したと思つたら東映で始まつた。いずれもロックアウトと暴力団を使った攻撃という点で共通している。職場の民主主義が攻撃目標であることも同じだ。地域や産業別統一闘争の先導的役割を担つている組合こそ、資本の側から見れば、ガンのようないくつかの存在であるに違ひない。資本の論理とは相反する民主主義が進んでしまうからだ。その「ガン」を取り除こうとして、資本は、カネと権力を背景に「暴力」をふるう。だが、その「暴力」にたいして、マスコミ労働者はもちろんたたかっている。争議ばかりではなく

く、紙面でも――。

圧力に屈しない民主主義

『社会部（記者）には特有の社会部的発想がある、理性より情緒、思考より感覚が先行し、挑発的、断定的な傾向がある』そうだ。だから、社会部記者に会うときは十分注意すること、と続く▼通産省が作った『広報雑記帖』からの引用である。……昨今の通産省内は『社会部アレルギーが全省的にひろがっている』といふくだりが面白かった。今まで通産省で取材するのは経済部記者だけだった。ところが今は、公害、物価、保安問題で社会部記者がわんさと来る▼そして社会部記者というヤツは、いくら筋道たてて説明しても記事になつたのを見ると『理性よりも感覚が先行し……』、省内だれも社会部記者に会いたがらなくなつたというのだ。わかる。よくわかる。……身びいきを承知でいえば、通産省の社会部アレルギー上には、こんな事情もあると思う。社会部記者が

公害、物価ではっきりと被害者や消費者側に立っていること。また、通産省や財界は産業界へのサービス機関であるより国民へのサービス機関であつてほしいと考えていること▼だからうまくマスコミを操縦したければ『通産省（の役人）には特有の通産省的発想があつて、消費者より業者、安全より企業利益が先行し、高圧的、統制的な傾向がある』ことを自覚して記者に会つたらどうか。たちまちアレルギーは解消するだろう。（四六年三月一二日、『朝日新聞』「天声人語」から）

この事件は、松下電器の広告スponサーとしての報道への圧力問題とともに、三月一一日の衆院物価問題特別委員会で、社会党の松浦利尚代議士が取り上げた。通産省幹部は「あれは省内の勉強用」といのがれながらも「不適当な表現もあるので」と廃刊を決めた。各社の記者も「天声人語」とほぼ同意見であったという。権力に屈せず独自の意見を守るジャーナリストの

姿勢がここにみられる。たしかに記者たち、といえば当人たちは「そんなんじゃない」というかも知れない。当人にしてみれば、自分の目で見た真実を国民に伝える姿勢を堅持しているに過ぎないので。ジャーナリストを志望した以上、國民が判断の材料として求めている真実を伝えない限り、國民の命をむしばむ商品を作られる公害企業の労働者同様、自分の仕事に生きがいを見い出すことはできないであろう。人間である喜びや悲しみを人間として味わいながら、人間の歴史を確かに担っていく者の一人として、ジャーナリストは人間が必要としている真実を送り届けることに誇りを持つ。そのことが、たしかにマスコミ労働者の根っこを支えているのである。公害も、物価も、安保も、沖縄も、ベトナムも、記者たちはさまざま。圧力を受けながら、ジャーナリストとしてのプライドにかけて真実を報道する努力をつづけて

いる。記者たちばかりでないのはもちろんのことである。報知や宮崎放送の争議は、眞実の報道への「圧力」を許すかどうか問われる争いでもあった。

四五年、教科書をめぐる家永裁判で勝訴したにもかかわらず、歴史教育での神話の登場など、大多数の国民の批判を受けながら、教育の反動化が押し寄せていく。四六年になると、青年法律家協会加盟の裁判官の新任、再任拒否や司法修習生の一方的罷免など一連の行政措置が司法独立の危機をはつきり示している。熊本地裁の宮本判事補の再任拒否の場合、最高裁判所は「クビ」の理由を本人にさえ明らかにしなかつた。もし世間一般の経営者が解雇理由も示さず解雇すれば、直ちに裁判所から解雇無効の判断が出されるだろう。その裁判所のやつた暴挙である。

もし、マスコミが眞実の報道を、教育が科学

的事実を、裁判所が公正な判断を放棄したら、國民はどうなるのだろう。考へてもみたくない、ゾッとする想像だ。しかしそれが現実にならないという保障が、現在の日本はない。保障し得るのはマスコミ、教育、司法の関係者の良心と、なにより「主権者」である國民の意思表示だ。それらを支えるものが民主主義の前進でなくて何だろう。であればこそ、報知争議が國民のなかに広がり、報知の守る会運動が発展していかないはずはない。言論の自由をマスコミが奪われていいはずがないからだ。いま、広範な労働者・市民が、みずから生活と権利を守るために、言論の自由を守るために、「報知の仲間を守る会」に結集しつつある。

報知の守る会がその意味で労働者や市民の間に広がっていくれば、第一に解雇撤回をやがて実現するだろう。第二に産業別・地域別の労働者の連帯が強められて労働者の生活や権利が前進

するだろう。第三にそれらすべてにも増して市民一人一人が、『報知』にかけてその意味を問い合わせる日本民主主義の内容がより豊かに成熟していくことだろう。

そして四六年四月、統一地方選挙の結果が、報知の闘争の未来を示した。四五年の京都について東京、大阪で革新知事が選出された。ほんとうに国民の側に立った考え方、行動は必ず世論の支持を得る。正しいことはやがて広がり、国民大多数の支持を背景に必ず勝つ、ということである。

2 見知らぬ人の真実を

「投げ手」と「受け手」が結びあれば

水俣病の患者が病床にゴボウのような手足を横たえてウツロな目を精いっぱい見開いて激痛

を訴えている事実を、あなたは知っているだろうか？ 肩に掌が付いているサリドマイド児の成長をみつめながら「この子も結婚できるのだろうか」と法廷で号泣する父親の姿を、あなたは知っているだろうか？ 三池炭鉱の落盤事故でCO中毒になり未だに、いろは。も書けぬ夫を見守って生きる妻や子の嘆きを、あなたは知っているだろうか？ 安中のカドミウムにおかされ「ハラワタを投げ捨てたい」と叫んで自殺した二八歳の娘を、あなたは知っているだろうか？ 戦争で敗けて土地を奪われ、しかたなしに米軍基地で働いた沖縄農民が今度は職も奪われる怒りを、あなたは知っているだろうか？ 広島と長崎に原爆を落として、ダメ押しをした米軍が東京大空襲の何十倍もの爆弾をベトナム民衆のうえにまきちらしている戦争の実態を、あなたは知っているだろうか？ そのアメリカと手を結んで「韓国」や「台湾」

の「防衛」を担うはずの自衛隊にあなたの兄弟や息子たちがかりたてられようとしている現実を、あなたは知っているだろうか？　そして交通事故や物価高や重税や住宅難を解消できない政治の正体を、あなたは知っているだろうか？

あなたは知っているに違いない。どんな例をあげても、それをマスコミが片隅にでも取り上げている限り、世界一文盲の少ない、テレビの普及した日本に住んでいるあなたは、見た目聞いたりしたに違いない。そして胸を痛め涙を流し、なんとかしなければならないと感じたに違いない。報知労働者も同じである。しかも、そしてなお、報知労働者は何をしたのだろうか？　何を糾弾し、何を変えようとしたのだろうか？　報知争議をたたかい、今もたたかいつづけるだけで十分なのだろうか？

情報化時代。といわれる現代日本にあつ

て、もつとも深く問い合わせられていることは、信頼し得る情報に出会ったとき、私たちが何をしたのか、何をしなかったのか、ということである。虚々実々入り乱れる「情報」のなかで、私たちが選択した情報に接してなお指一本動かさぬなら、他人とはコミュニケーションできないといふなら、もし見知らぬ人々のなかにある眞實に共鳴していく力が私たちにないならば、人間の歴史は荒廃の道をたどることだろう。しかし、さいわいにも、あるいはあたり前というべきかも知れないが、私たちのうち、たとえばあなたが、あなたがたのうちのだれかが、人間の心のつながり・連帯を行動で示し、それを守り発展させてきた。

たとえば公害である。たとえば沖縄である。いずれも長い間の血と汗のたたかいの歴史があつた。マスコミの報道などまったくないところから、問題が人間全体にかかると訴えはじめ

たごく少數の人々は、たくさんの犠牲を払わなければならなかつた。そして、人間共通の問題であるからこそ運動は広がり、やがてマスコミでも報道され、ついには、その真実を隠したがつた人々までが事実を認めざるを得なくなつた。公害も沖縄もそうだった。いや、国民の側から行なわれる「告発」はいつも同じ苦闘をくり返してきたのである。

イタイイタイ病の発見者秋野昇医師の話「公害訴訟としては異例のスピード審理といわれているが、私としてはむしろ長かった感じだった。私が、はじめてイタイイタイ病患者を見たのは、二

十一年三月のこと。それからすでに二十五年もたつたと思うと、感無量だ。法廷に出れなかつた入院患者に、裁判が結審したことを知らせると、みんなほっとし、喜びの表情を見せていた」（四六年三月一二日、『朝日新聞』夕刊から）
六月三〇日に富山地裁から判決が出ることが

決まつた富山イタイイタイ病だけではない。熊本水俣病も新潟第二水俣病も四日市ぜんそくも、すべて地域住民から始まつたたかいがあつたのである。公害の例にすぎない。

真実の投げ手であるマスコミと受け手である国民とが、しつかり手を握り合つたとき、私たちの民主主義の未来は確かにひらける。再び一例をあげる。報知新聞争議や宮崎放送争議に出現した「私兵」的暴力ガードマンと関係深い事件だ。ささやかではあるが、報道と国民が手を結んで暴力を追放した実例である。新聞の見出しを見てほしい。

那珂湊争議の場合

「労使紛争こじれる茨城・那珂湊市」「右翼系20人を職員に採用」「市長が面接だけで」「すごく黒メガネ、不穏な庁内」「スト破り専門会社、特別防衛保障」（四六年一月一二日、『毎日新聞』）
「紛争の那珂湊、不審な事件ひん発」「変な

職員。取材妨害」「故意? 市職組委員長は交通禍」（四六年一月二三日、『毎日新聞』）

「世論の非難どこ吹く風」「那珂湊市の薄井市長と一問一答」「オ・ス」に守られ強気」「市長室で木刀の揺振り」「臨時職員? 立派な人さ」（四六年一月一四日、『朝日新聞』）

「ザ・ガ・ンコマン」「5時間の怪氣炎」「那珂湊市長の現代感覚」「右翼の役人、なにが悪い」「評判落としたエリート」（四六年一月一七日、『東京新聞』）

「那珂湊市役所の紛争」「市民のための市政はいつ?」「批判不在に目開け」「まだひ弱い住民パワー」（四六年一月一九日、『読売新聞』）

「報知闘争」の労組員も（支援）（四六年一月一九日、『朝日新聞』茨城県版）

まだ記憶に新しい那珂湊市での臨時職員採用事件だ。報知争議で暴力をふるつた「特別防衛保障」の「ガードマン」採用をマスコミはいつせいに叩いた。そして特別防衛保障の飯島勇社

長が、三四年の「主婦と生活社」争議以来、「三光自動車」「東京発動機」「学園紛争の「日大」」「東京デザイン学院」「千代田学院」などで暴力介入した「専門家」であることを報道した。三五年の安保闘争当時、自民党水戸県連の要請で自民党本部付近を「防衛」したことでも明らかにされた。

市民の税金で雇われた暴力ガードマンにたいして市民の批判は爆発した。盛り上がる世論を背景に市議会も全員解雇を求めて、市長に迫った。一月二一日、水戸の「民族派」を自称する人の仲介で、暴力ガードマンは全員解雇された。そして事件は、市長リコール運動に発展していった。眼前で、暴力と直結する市長のやり方を見て、市民が立ち上がったのは当然のことである。暴力を否定し民主主義を確立しようとする気持ちちは、報知や宮崎の労働者と同じだった。

だが、報知や宮崎と違っていたのは、暴力ガードマンをわずか二週間で排除できたことだ。同じ連中を報知では五ヵ月間、中央警備保障の暴力ガードマンは五ヵ月後のいまも排除できていない。報知の場合、五月に労働省から「是



パパがんばって！ テレる古川委員長

正勧告」が出されたにもかかわらず彼らは争議解決まで居すわった。なぜだろう、この違い。飯島勇社長や恩慈宗武専務の新聞写真をみつめながら報知労働者はいうのである。「市民の運動にマスコミの報道が結びついたからですよ。もし報知争議が那珂湊のように報道されいたら、一ヶ月で終わっていたかも知れない……」

浜口「この記事（那珂湊報道）、ひとつ新聞だけでも何回も書いていますけれど、これは合計すると何千万部になるかわかりませんね」

証人（山口克巳報知印刷労組委員長）「はい」
浜口「これは組合がこんどの争議で行なった大量宣伝とくらべて、規模はどうちが大きいですか」

証人「これはもうお話にならない

ですね。圧倒的に茨城の方が大きいですね」

浜口「それで報知争議のことが書いてあるんだけれども、報知新聞社ないしは報知印刷の会社側から、まあ読売は、別としても、朝日、毎日、東京、サンケイなどに会社が抗議した、あるいは名誉毀損ないし告訴を行なったというような事実がありますか」

証人「いや、聞いていませんね」（都労委審問

速記録から）

弱点を乗り越えて

争議解決の主武器の一つだった大量宣伝によつて報知労働者はクビ切られたが、さしもの読売・岡本労政も、国民の支持を得ているマスクミの報道を、罰する。ことはできなかつたのだ。たとえその内容が報知系の大量宣伝と同じものであつたとしても……。

「……報知新聞を暴力ガードマンが占領した事件も、この国の民主主義が危険にさらされている

端的な例だ。この事件が与えたショックは三島事件の比ではない。ベンが暴力に屈するということは、やがてサーベルに支配されることになる。それがしかも『新聞社のことゆえ』にジャーナリズムが、遠慮しているとするならば由々しきことだ。……」（四五年一二月一五日、日本ジャーナリスト会議機関紙「記者の目、D・W・コンデ記者に聞く」から）

新聞の那珂湊報道にも汚点がある、と報知の労働者はいう。『毎日新聞』とならんで一月二日から、ほぼスクープの形でこの事件を報道した『読売新聞』の紙面が、ついに、臨時職員の正体は報知新聞争議に登場した暴力ガードマンであるという事実を報道していないというのだ。一五日朝刊までなぜか沈黙を守つた大阪の読売新聞も同じ扱い。民主主義否定の那珂湊事件の本質を十分に報道したとしても、自分につごうの悪いデータを省くという姿勢では間

題があるというのである。この事実は、マスコ

ミ労働者のたたかいも、国民の眞実への要求も、まだまだ不足していることを立証するものではないのか。そうしたこと谦虚に反省する人々がふえていくとき、私たち自身の幸福は、私たち自身の力で実現していくことだろう。報知労働者のめざした『月島』はどこにでも築くことができるはずである。

3 困難でも明るい未来

四六年春闘でスト権が確立したとき、報知労働者は過去と手を切り、未来を見つめ始めた。暴力ロックアウトをめぐる報知争議はすでに思い出。過去の経験を財産に、新しい地平線めざして歩き出したのである。困難であるとしても、いや、困難であるからこそ、職場に、より進んだ民主主義を打ち立てていくことが、課せられ

たテーマとなつた。

二三人の被解雇者の生活を守り職場復帰を実現するために、毎月カンバし守る会運動を広げる。職場のなかの権利を回復し正しい報道姿勢を確立するために、憶せず発言する。新しく生み落とす未来は決して暗くないはずだ。「報知系三単組」と呼ばれてきた三組合が六年ごし念願の組織統一実現へ職場討議を始めた。東京の臨労組は、新聞社や新聞販売店に働くアルバイトを結集した「全臨労」に加盟、都内の臨時労働者闘争の拡大に努力している。ロックアウト中は、憎しみとさげすみの感情でしか見られないかった組合脱落者にたいしても同じ労働者として同じ要求で共闘していくとする気分も生まれ始めた。報知印刷大阪労組の糸井委員長はいふ。「私たちが分裂しても痛手を受けても守りぬいてきた『良心』が、やがて社内の全労働者の統一点となるでしょう。自信を持つてそういう

い切れます」

新しい時代の息吹き

「オフクロにクビだとはいえたなかつた。報知印刷の石井さんは五月に結婚した。出版会社のたなかう労働者が奥さんになった。報知新聞労組の佐藤書記長の初めての子どもが八月に誕生する。敗戦後二五年、新しい時代の息吹きが報知にも生き生きとしてある。次々に芽ばえ育つてくる新鮮なエネルギーが、人間らしさを求める良心の確かな未来を約束しているようだ。

五月中旬、前の晩から小学校四年生の次男が東京へ連れて行ってくれとせがんでいた。学校が休みだというのだ。ロックアウトのことはこの子にもわかるように説明してあつたので「連れていくてもいいが明日はピラまきだよ」と説明した。「うんいいよ、ボクやる

よ」と返ってきた。生まれは三五年六月二一日で、六〇年安保闘争の真っ最中。ある劇作家が「國どよみ民怒れる日ぞ鬼子生まる」と色紙で祝つてくれた札つき息子。水道工事やガス工事を頼まれもしないのに泥だらけで手伝う。「ボクは将来土方の大将になるんだ」と口ゲセのようにいふ。さて、早朝八時三〇分、霞ヶ関でのビラまき。彼、小ワキに抱えてんだビラを、なれない手つきで一枚一枚めくつて渡す。うまくいかない。手をペロペロつぱでぬらしながら、それでも一生けんめいはがして渡す。ぼくにいわれたとおり「読んで下さい」と大声で渡そうとするが、ビラがはがれない。通勤途上、あくせくした通行人も足を止めざるを得ない。渡してもらえるまで待たざるを得ないので。なかには笑いながら彼の小ワキからビラを抜き取つていく人もいた。

ビラ書きを終えて尾崎記念館前の広場に連れていく。彼は、神奈川育ちで東京を知らない。「このお城はなあに?」「なんだこれも知らないのか、皇居だよ」「皇居って?」「天皇陛下のいる所だよ」「へえっ、天皇ってデカイ家に住んでるんだなあ!」

時間を持て余して会社に連れていく。ロッカーアウト中だから裏階段をのぼって書記局にいく。「エレベータはないの?なぜのれなーいの?」「表玄関にいたのはおマワリさん?」「ガードマンがなせあんなかっこうをするの?」質問の山だ。説明しても納得がいかないらしい。

昼すぎ玄関前で就労闘争。知っている「沖縄を返せ」を大声で歌い、ガンバローとこぶしを突き上げた。しかし、自分の父兄たちに向かってヤジと挑発をあびせかけるガードマンにたいして奇異の念を抱いたらしい。彼の大好きなテレビのガードマンと違い、親友である近所のおマワリさんとも違う暴力ガードマンを、バケものでも見るような目付きでにらんでいた。

その日の最後の約束、上野動物園をひとまわりしたあと、彼はいった。「どうしてあんなガードマンやつつけないの?」ぼくが黙つて笑っていると「やつつけてライオンの檻に入れてしまえばもうエバれないね」彼一流の夢が頭をかけめぐっているらしく晴れやかな笑顔だった。

六月、組合のパンフレットの宣伝ポスターを玄関前に貼り出すと「それはなあに?」と聞いてきた。ぼくが毎朝カバンに入れて持つて歩く本のお知らせだといつたら「いつまで貼つておくの?」勝つまでといつたら納得したようすだった。

九月の解決時、彼は勝ったか負けたかしつ

ごく聞いた。勝ったと説明したら、二か月後、ぼくが六か月ぶりに仕事に出る朝、彼は「お父さんガンバレ」とぼくの肩を叩いた。暴力ガードマンを雇う会社に入るのだから、父さん負けるなよ、という意味だつたらしい。これには泣かされた。

彼はじきに五年生になる。大学進学をあきらめるからたたかえといつてくれた長男は、大学に進学する。いや、どんなことがあっても進学させる。（報知新聞労組広告分会・S・Sさんの手記）

全国のみなさんに訴える

私たちは現在、職場にどっしり腰をすえて元気にたたかいつづけています。不当解雇された二三人も持ち前の明るさを失わず忙しい毎日を過ごしています。

会社はあいかわらず、第二組合との差別を強行しようとしたり、裁判の引きのぼしをはかり、露骨な組合つぶし政策をとりつづけています。私たちは「今、新しいたかいが始まつたばかりだ」と確認しながらじりじりと反撃しています。きびしいロッカーアウト闘争によつてきましたえられ、働く人間にとつて大切なものは何なのかを知った、一人ひとりの自信が支えになっています。いたる所で仲間に出会い、その仲間によって教えられてきた自信もあります。新聞労連・各単産・地域の仲間をはじめとして、全国で支援・共闘してくださったすべての人々に、心から御礼申し上げます。

私たちのたたかいが今後も、よりいっそう多くの方々に御理解・御支援いただけますよう、共闘会議に作つていただきたいこのパンフレットができるだけ広めていきたいと考えています。「報知の仲間を守る会」（一口毎月一〇〇円）にも御参加いただきたく、合わせて御協力をお願いいたします。

またこのパンフレットのために、貴重な時間をさいて尽力してくださった労働旬報社の柳沢編集長、飯島編集部員、小林営業部員、また東銀座印刷のみなさまに、心から御礼申し上げます。

報知新聞労働組合 執行委員長 古川洋一
新聞労連 報知印刷労働組合 執行委員長 山口克巳

報知印刷大阪労働組合 執行委員長 糸井富雄

▽抗議先

東京都中央区銀座西三の一

読売新聞社長

務吉光雄

▽激励先

東京都千代田区平河町二の二九

報知新聞社長

菅尾旦夫

報知印刷社長

岡本武雄

東京都千代田区平河町二の二九

報知新聞労働組合大阪支部

報知印刷労働組合

大阪市北区野崎町四六

報知印刷大阪労働組合

編者・報知争議共闘会議

日本労働組合総評議会

東京地方労働組合評議会

千代田区労働組合協議会

マスコミ共闘会議

総評弁護団

日本新聞労働組合連合

700人の記録——続・良心の歴史をつくりたい

発行日 1971年5月15日 第一刷発行 頒価200円

編集・発行 報知争議共闘会議

印刷所 東銀座印刷出版株式会社

月島基地

